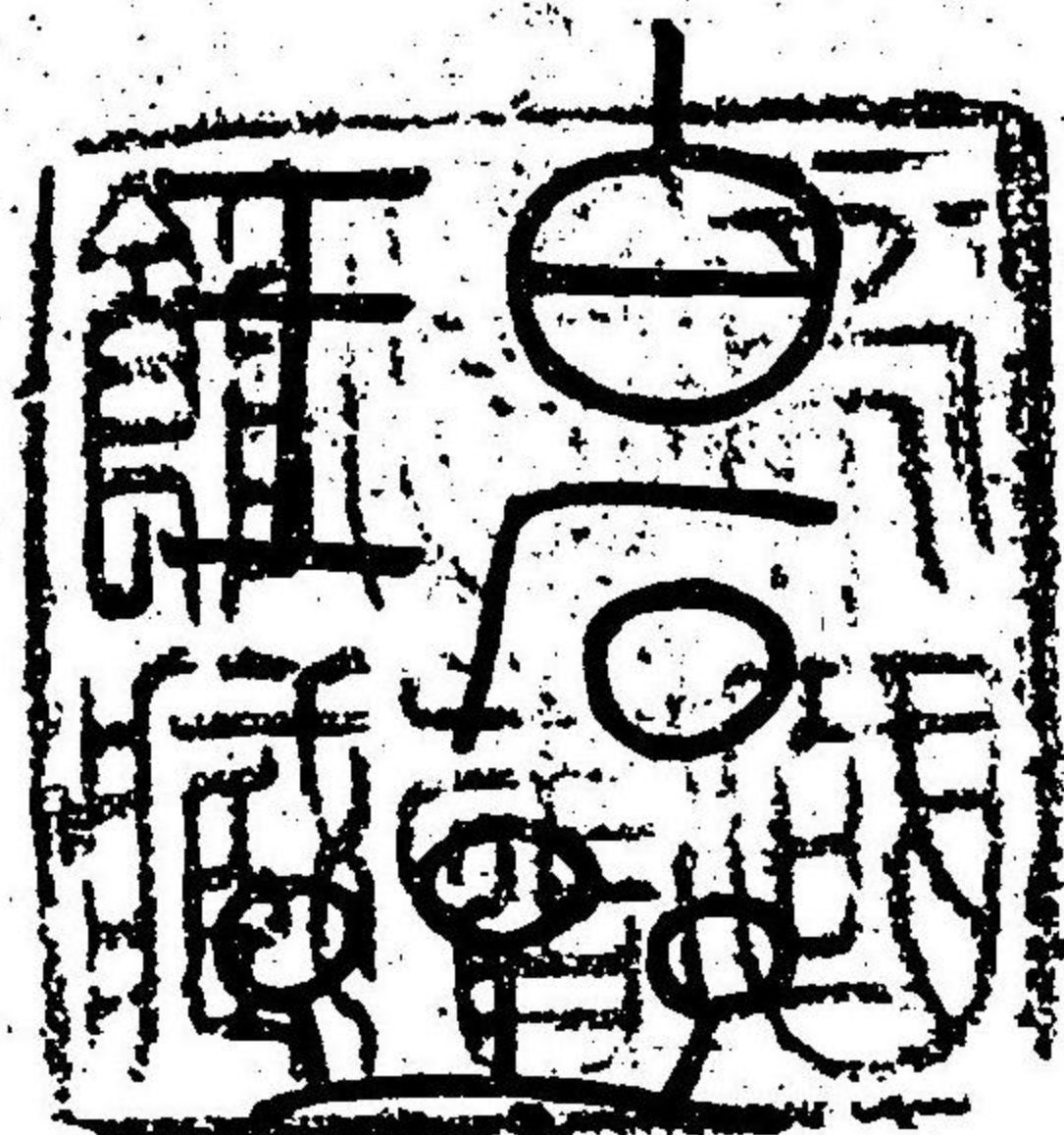


324-1



上海圖書館藏
大英圖書館藏
子部

明治
39 11 14
内交

碧巖集講話 下卷目次

第五十一則	雪峰是甚麼	一
第五十二則	趙州石橋略約	一八
第五十三則	馬大師野鴨子	二四
第五十四則	雲門近離甚處	三四
第五十五則	道吾漸源弔孝	四一
第五十六則	欽山一鏃破三關	五九
第五十七則	趙州至道無難	七一
第五十八則	趙州時人窠窟	八〇
第五十九則	趙州唯嫌揀擇	八六
第六十則	雲門拄杖子	九四
第六十一則	風穴若立一塵	一〇五

第六十二則	雲門中有一寶	一一五
第六十三則	南泉兩堂爭猫	一一三
第六十四則	南泉問趙州	一一〇
第六十五則	外道問佛有無	一三五
第六十六則	巖頭什麼處來	一五〇
第六十七則	梁武帝請講經	一六三
第六十八則	仰山問三聖	一七二
第六十九則	南泉拜忠國師	一八一
第七十則	瀉山侍立百丈	一九三
第七十一則	百丈併卻咽喉	二〇二
第七十二則	百丈問雲巖	二〇六
第七十三則	馬大師四句百非	二一〇

第七十四則	金牛和尚呵呵笑	二二三
第七十五則	烏臼問法道	二三五
第七十六則	丹霞問甚處來	二四八
第七十七則	雲門答胡餅	二六六
第七十八則	十六開士入浴	二七二
第七十九則	投子一切聲	二八〇
第八十則	趙州孩子六識	二八九
第八十一則	藥山射塵中塵	二九五
第八十二則	大龍堅固法身	三〇五
第八十三則	雲門露柱相交	三二三
第八十四則	維摩不二法門	三三二
第八十五則	桐峰庵主大蟲	三三八

第八十六則	雲門有光明在	三五〇
第八十七則	雲門藥病相治	三五八
第八十八則	玄沙接物利生	三六八
第八十九則	雲巖問道吾手眼	三八四
第九十則	智門般若體	三九八
第九十一則	鹽官犀牛扇子	四〇五
第九十二則	世尊一日陞座	四二二
第九十三則	大光師作舞	四三〇
第九十四則	楞嚴經若見不見	四三五
第九十五則	長慶有三毒	四四六
第九十六則	趙州三轉語	四五六
第九十七則	金剛經輕賤	四六七

第九十八則	天平和尙兩錯	四七七
第九十九則	肅宗十身調御	四九〇
第一百則	巴陵吹毛劍	五〇〇

附錄

普勸坐禪儀講話	一
---------	---

碧巖集講話下卷目次



碧巖集講話

藹々 大内青巒居士 講述

第五十一則 雪峰是甚麼

垂示纔有是非紛然失心不落階級又無摸索且道放行卽是
把住卽是到這裏若有一絲毫解路猶滯言詮尙拘機境盡是
依草附木直饒便到獨脫處未免萬里望鄉關還構得麼若未
構得且只理會箇現成公案試舉看

機に是非あれば紛然として心を失すといふは三祖僧璨大師の信心銘の語を引て
きたので是非といふは善惡といふも同じである苟くも何事に限らず其れが善い

とか此れが悪いとかと、心が動き初めたならば、モハヤ本心本性を失なふことなる、ナゼかといふに本心本性は元來善惡も邪正も是非も曲直も無いものであることは、今さら申すまでも無い、花の咲いたに善惡があるかい、紅葉の散るに是非があるかい、其れを善いの悪いの奇麗の汚穢のといふは、皆只人間の妄想から強めて彼れ此れといふまでのことであるから、花や紅葉の本性を傷つけて、天真爛漫の法身佛を片輪とする五逆罪の隨一である、とは云ふもの、階級に落ちざれば又摸索すること無し、沙彌から長老には成れないと云ふ俚諺の如く、一旦すてに久しく妄想分別に陥入たものが、修證の功を経て其の本分の田地に立戻らうと云ふには、何うしても追々と階級を経て進むと云ふことと無ければ、何とも手の着けやうが無い、その様子を承陽大師は、此法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も、修せざるには顯はれず、證せざるには得ること無しと示されてある、サ一此處の進退去就どうしたものであらうぞ、且らく道へ放行するか、是か把住するか、是か許して自由に働かせうとも、抑へつけ、動かれないやうにするとも、ソコは師家たる人の學人を接する手段の掛引で、ずしも斯うと定つたことの無いのが、即ち祖師門下の他宗

諸派に異なる所である、這裏に到つて若し一絲毫の解路ありて、猶ほ言證に滯ふり、尙ほ機境に拘はらば、盡く是れ依草附木要する所は把住するとも、放行するとも、其れは臨機應變であるけれども、少しでも理窟に涉つたり又は言葉に着き廻つたり或は見るものにせよ、聞くものにせよ、客觀のために動かされるやうなことで有つたならば、盡く皆依草附木の精靈であると言ふ、依草附木といふは俗に謂ふ所の幽靈とか亡魂とか云ふものが、人の體を離れて依り所なきに、草に依たり木に附いたりして、種々様々な姿をあらはすと云ふことを、支那人は昔から言ふたもので、現に易にさへ遊魂作變と云ふ語があつて、支那は幽靈の根據地である、今も其の通り本體本性を失ふて妄想分別に迷ふて居たならば、依草附木の幽靈と何の異なる所も無いぞと云ふのである、然らばズツと通りぬけて直饒便ち獨脱の處に到るも、獨脱は獨立脱躰で決して他の支配を受けない自由の境界たとへ其處まで到り得たとした處で、未だ免かれず萬里に郷關を望むことを、ナゼかと云ふに既に獨脱の處に到つたと云ふのが、ハヤ一つの取り着き場が出来たので、決して其れが本來の面目では無い、法華經に謂ゆる化城であり、又淨土門で謂ふ所の化身土である、眞の極

樂寂光淨土へは千里万里の隔たりであるぞと云ふ此に至つて還て構得ずやサ
斯やうに取り着く手蔓の絶えた所で果して能く其の本分の家郷に到り得る趣向
があるか何うじや若し未だ構得ずんば且らく只箇の現成公案を理會せよ箇の
現成公案が即ち本分の作用であるから先づ其の道理を會得するが好いぞと本則
に及ぼして試に舉す看よ。

本則 舉雪峰住庵時。有兩僧來禮拜。見來以手托庵門。
放身出云。是什麼。僧亦云。是什麼。僧後到巖頭。什麼處來。僧云。曾到雪峯。

庵泥裏有利。如龍。似。僧後到巖頭。得。同道方知。頭問。什麼處來。是。家始得。同參。泊乎放過。僧云。嶺南來。傳得什麼消息。來。也。頭云。曾到雪峯。

麼動破了多時。僧云。曾到。打。頭人難得。頭云。有何言句。去也。僧舉前話。便。也。納取。頭云。他道什麼。好。口。便。打。僧云。他無語。低頭歸庵。又。納取。也。是。

麼動破了多時。僧云。曾到。打。頭人難得。頭云。有何言句。去也。僧舉前話。便。也。納取。頭云。他道什麼。好。口。便。打。僧云。他無語。低頭歸庵。又。納取。也。是。
什麼頭云。噫我當初悔不向他道。末後句。洪波浩渺。天若向伊道。天下人

不奈雪老何。僧至夏末。再舉前話。請益。不。僧云。未敢容易。穿却鼻孔。停因長。

時正賊去了多時。賊過後張弓。何不早問。好。與。歇。倒。禪。僧云。未敢容易。穿却鼻孔。停因長。

兩重公案。頭云。雪峯雖與我同條。生不與我同條。死要識末後句。

只這是。信。殺。一。船。人。我。也。不。信。泊。乎。分。疎。不。下。

雪峰住庵の時と云ふは、唐の武宗皇帝が會昌年間に廢佛の勅令を出して、天下の寺
を毀ち僧を逐ふた其の時に雪峰義存禪師は嶺南の地に遁れて、小庵を結んで住ん
て居た其れを住庵の時と云ふのである其時に巖頭全裕禪師は同く徳山宣鑑禪師
の弟子で、雪峰の爲めには師兄であるが此の武宗の廢佛の時に、巖頭は鄂渚湖とい
ふ湖水の渡守になつて世を避けて居たのであつた其頃の事と見えるが、兩僧あり
來りて禮拜せんとす、兩人の坊さんが雪峯禪師の庵室の門の傍へ往くと、雪峰は來
るを見て手を以て庵門を托して身を放つて出づ、兩人の僧が門を敲くの待たず
に、直に内から門を托開して、ヒヨイと飛出して、是れ什麼ぞと言ふた、着語に什麼を

か作すと兩僧が禮拜せんとするを咎め又一狀に領過すウロ／＼と他人の足下に禮拜などをして歩く奴は兩人とも一所に尉してやるが好いぞと言ふサスガに雪峯は雪峰だけに庵門を托し開いて飛出した様子が鬼眼睛で恐ろしい見暮ぞと言ひ又無孔の笛子で穴の無い笛は吹きやうが有るまいとほめ更に頭を擧げ角を戴く危険で寄り附けないぞと言ふ僧云く是れ什麼ぞ此の僧も亦た中々の舊參と見える大抵の者であつたならばサスガの雪峯に先を越されて是れ什麼ぞと擲着された時にひるひはずであるのにスカさず鸚鵡返しに是れ什麼ぞと言ふたアンバ、並々の行脚僧では無いと見えるけれども圓悟は泥彈子到底雪峰を撃つわけには往かぬぞと言ふ泥彈子と云ふは子供が泥を丸めて木の尖に挟んで犬などに抛げ着けるものそやうな又鼈拍板これは毛氈で張つた太鼓といふこととて到底鳴らないから太鼓の用は作さないと云ふ惡口又箭鋒相挂ふとある雪峯も是れ什麼ぞ此の僧も是れ什麼ぞ同じく是れ什麼ぞで勝負は見えぬと冷かした其實は彼の達磨も不識と云ひ武帝も不識と云ふたやうなわけに到底同じ價で買ふわけにはゆかぬのである峯低頭して庵に歸るコゝて雪峯が何とか言ふたならば彼の兩僧も何

とか働けることであつたかも知れぬが雪峯は何とも言はずにチヨイと頭を下げてハイ左様ならと内へ入つてしまふた兩僧遂に手の着けやうも口の出しやうも無かつた着語に爛泥裏に刺あり此の獸して庵へ歸つた作略といふものは徳山の棒とか臨濟の喝とか云ふやうな激烈なる所作では無いけれども其の溫柔なる機轉に容易ならぬ峻峻の鋒刃を藏して居ると言ふ又龍の足なきが如く蛇の角あるに似たり普通の姿でないに依て遂に非點の打つ處を見出しかねる中に就く措置を爲す難し平生でも雪峯の機鋒は手の着けやうの無いことばかりであるが此れは亦た其中でも別段であるといふのである僧後に巖頭に到る全裕禪師が既に渡守を罷めて鄂州の巖頭に住せられた後の事であらう彼の兩僧は雪峯から巖頭への書翰をも持て居たといふことであるから彼の時に門前拂ひを喰つただけには無く幾分か隨身して居たことが見えるとにかく巖頭の處へ往た着語に也た須からく是れ問過して始て得べし巖頭に問ふたならば雪峯が無語で低頭歸庵した消息が分るであらうぞと云ふナゼかと云ふに巖頭と雪峯とは同道方に知る俗に謂ゆる蛇の路は反鼻であるからぞ頭問ふ什麼の處より來る此れは例の如く地理

的に問ふのでは無い、其の人の從來參得し來つた道程を問ふのであるから、作家の漢ならば此で十分の働きがなければ成らぬのである、故に圓悟が也た須く作家にして始て得べし、凡庸の漢では致し方がない、況や這の漢往々に敗闕を納る既に雪峰の處で失策して來たのである、若し是れ同參に非ずんば、泊んと放過せん、サスガに巖頭は雪峰と同參の兄弟であるから大丈夫であるが、若し他人であつたならば取り逃がしてしまふであらうと言ふ、僧云く嶺南より來る嶺南は即ち雪峰住庵の地であるから、正直に答へたのである、着語に什麼の消息をか傳へ來る嶺南の地は六祖大師以來禪宗勃興の靈境であるが、此の僧果して如何なる好消息を持てきたかと揶揄し、也た須く是れ箇の消息を通ずべし、たしかな消息を通じないでは詰らんと、兩僧に向ふやうに言ふて、暗に吾々互ひに斯る場合の消息を示されるのである、還て雪峰を見るやと次の巖頭の拶問を豫言する、頭云く曾て雪峰に到るや地理的の雪峰山では無いぞ、故に圓悟が勘破し了ること多時と言ふ、巖頭は此の僧が必ず雪峰に參した者であるといふことを疾に勘破して居る、然し雪峰に遭つても遭つた効が無いと云ふことも能く見透して居るらしい、して見れば到らずと道

ふべからず、雪峰に參じたことが無いとは言へない、參じたと言へば參じた所詮は何處に在る、是れ又吾々互ひに反省せねば成らぬ所ぞ、僧云く曾て到れりと誠に正直である、着語に實頭の人は得難し、正直は正直であるが、得べきことは得られな、打て兩概と作す曾て到れりと云ふ言葉がハヤ兩端に涉つて居る、元來本分の地は到るの到らぬのと論量すべき場處では無いぞと抑へる、頭云く何の言句かある、雪峰が何とか言ふたかと問ふたのを、圓悟が齒痒がつて、便ち慙慙にし、去るや其んなことを問ふて居らずに、直に本分の令を行ずれば好いと云ふ、僧前話を擧すと前の低頭歸庵の話をした、又便ち慙慙に去る巖頭に何の言句があると問はれた言葉に付き廻つて、昔話をして居るとは何事ぞと叱り、又重々に敗闕を納ると誠めた、頭云く他什麼とか道ひしと巖頭の檢舉が厳しくなつて來た、着語に若し是れが圓悟であつたならば、好し、劈口に打たん、彼れが語路を逐ふて昔話などを仕掛けた時に、ビシヤリと打ち擲れば好かつたにと言ひ、又鼻孔を失却し、了れり、巖頭何の面目があるぞと抑へる、僧云く他は無語低頭して庵に歸ると到頭此の僧が雪峰の作略如何を領會し得ぬことを白狀したやうなものである、故に着語に又敗闕を納ると

抑へた、更に備旦く道へ他は、什麼ぞ貴公は其の雪峰の作略が何であるのか分らないかと叱りて、門下諸人を警醒せられた。頭云く、噫、我當初悔らくは他に向て、最後の句を道はざりしことを、巖頭の此の一語は實に慈悲深重なることとて、此の一則の公案の尤も眼目とする所である。ナゼかと云ふに、此の僧は雪峰の低頭歸庵したのを見て、己れが是れ什麼ぞと突き返したのを、雪峰が許したことの様に思ふて、そこで其話を大切らしく擔ふて歩くのであると云ふことを、巖頭が見ぬいたに依て、サテサテ氣の毒なことと思ひ、乃ち彼の雪峰は吾が同參の兄弟であるばかりでは無く、彼れが悟り切れないで居るのを、吾が世話をして悟らせたいのであつたが、其時にモ、一つ踏み込めて最後の句を言ふて聞かせて置けば好かつたに、其れが欠けて居るから惜しいことをした若し、伊に向て道ひたらまし、かば天下人雪老を奈何ともせざらん。に最後の句さへ道ふて置いてあつたならば、誰でも手の着けやうは無かつたらうにと、巖頭が愚痴をこぼすのを聞て、此の僧は始めて雪峰には最後の句が欠けて居るといふことに氣を取られたから、彼の是れ什麼で低頭歸庵させたと思ふて居た悟りの重荷をスツカリ巖頭に取りあげられてしまふたのである。乃ち今度

は其の最後の句といふことが、難透の公案になつて此僧これから九十日の間非常に苦辛した様子である。着語に、洪波浩渺、白浪滔天、此の最後の句といふことが、何のことやら方角の着かないこととて、巖頭の言ひ草が如何にも浩渺滔天の勢ひである。とほめたのである。癩兒伴を牽く、雪峰巖頭好い道づれよ、必とせず、最後の句といふことが敢て必ず無ければならぬわけのものでは無いと排し、須彌も也、た粉碎すべし、其の最後の句に因ては雪老を奈何ともせず位のことでは無い、須彌山でも砕けるであらうに、上げたり下げたりして、遂に且く道へ他の、困糞什麼の處にか在ると吾々後學へまで參究を勸誡せらる。僧其末に至りて再び前話を擧して請益す。九十日の夏安居も愈々終らうといふ頃になつて、更に巖頭に向つて此の最後の句の會得し難いことを白狀し、何うしたならば好からうかと相談に及んだものと見える。着語に、已に是れ惺々たらず、何處までも愚な男であるぞと罵しり、更に正賊去り了る。こと多時、今頃になつて何の事である、賊過て、後の張弓、何の用に立つぞと叱る。頭云く、何ぞ早く問はざる。九十日の夏安居中何を考へて居た、ナゼ早く最後の句を問はなんだぞと言ふ、圓悟が好し、爲めに、禪床を掀倒するに、巖頭が其う言ふた時に、巖

頭の禪床を引くる返して痛い目に遭はせてやるべきであるに、過也モ遅い残念
 なと言ふアンパイ僧云く未だ敢て容易ならずナゼ早く問はぬかと仰せられても
 此の最後の句の工夫は中々容易なことでは無いに依て、今日まで工夫に工夫を重ね
 ねましたがサテ何うも合點が往きませんと云ふ着語に、這の棒、本是れ這の僧、喫す
 と此着語は無いが好いと風外老人言はれたが其うであらう、鼻孔を穿却す到底此
 の僧は巖頭に鼻づらへ繩を透されてしまふた囚に停つて智を長ず一夏九十日の
 工夫がヤット斯んなとか囚に停て智を長ずといふは監獄の中で罪の言ひぬけや
 うと考へるといふことだそうな已に是れ、兩重の公案、最初にも不會であつたのが
 夏末になつても同じく不會で、不會の兩重公案よ、頭云く雪峰我と同條に生ずと雖
 も我と同條に死せず、雪峰と我とは同じ處で生れても同じ處では死なない、彼は彼
 たり我は我たりであるぞ、最後の句を知りたいのか、最後の句は只這れ是れよと言
 ふ、サ一今度は此れが鐵饅頭ぞ、どんな味がするやら能く咬みしめて見なければ成
 らぬが最初雪峰が是れ什麼ぞと言ふたのと、今巖頭が只這れ是れと言ふたのは、是
 れ同か是れ別かとも參究して見ねばなるまい、是れとは畢竟何をさしたのであら

うぞ、垂示に謂ゆる解路に涉らず言詮を離れて、依草附木の誹りを受けないやうに
 せねばならぬ所であると云ふことじや、着語に漫天網地、巖頭の機用は宇宙に充滿
 する、一船の人を賺殺す、最後の句といふやうな妙なことを言ふて、何ぞ有り難いこ
 とでもあるかと思へば、只這れ是れ、其れに釣られて九十日間の閑工夫、同學の者の
 迷惑になるぞと云ふ、我也た信せず、只這れ是れだけのことは、圓悟は承知せぬぞ
 と、亦た是れ人を賺殺するのである、泊んと分疎、不下到頭何の事とも分らないぞと
 すべての解路言詮を打ち拂ふてしまふた

頌末後句 已在前 **爲君說** 有頭無地 **明暗雙雙底** 時節 **節** 老

同條生也共相知 是何種族 **不同條死還殊絕** 我

還殊絕 還要與殊絕 **黃頭碧眼須甄別** 盡大地人亡

南北東西歸去來 在 **夜淡同看千**

巖雪 人 **會** 也 **只是** 他 **大地** 還 **得** 末後句 **便打**

末後の句と例の如く本則の眼目を拈提し來つた、圓悟が其れを奪つて已に言前に在り、最後の句は雪竇から聞かないでも疾に分つてると言ひ、更に將に謂へり、眞箇と何ぞ別に最後の句といふものが眞實に有るかのやうに思ふて居たが、畢竟噉ばかりよと言ひ、又覲着すれば、瞎す若しも別に最後の句を見やうとしたならば、目が墮れるぞと言ふ、然るに雪竇は君が爲めに説くと第二句を置いた、巖頭は曾て他に向て道はざりしを悔ゆと言ふて居る所の最後の句を、今や雪竇は君が爲めに説くと言ふ、君といふは吾々互ひ總べて此の公案に參ずる諸人のことである、そこで圓悟は若しも其の最後の句を説いたならば雪竇の舌が抜けてしまつてあらうぞと云ふので、舌頭落地と言ひ、又説不着到底説けるものには無いイヤ説くべきものでは無いと言ひ、更に頭ありて尾なく、尾ありて頭なし、結局最後の句は有るとも無いとも判断のつかぬものよと言ふ、けれども雪竇は續いて明暗雙々底の時節を謠ふ、明暗雙々と云ふは雙明雙暗といふも同じこと、明は物の形の能く見えるとて萬象差別の姿、暗は平等一相無差別の處、今此の最後の句只這れ是れと巖頭の言ふた立場は、明とも暗とも即ち迷とも悟とも凡夫とも諸佛とも片付けて見らるべき所

ては無いに依て、明暗雙々底の時節である、圓悟が葛藤の老漢と雪竇が色々の言句を説き立てるのを叱り、又牛の角なきが加く、虎の角あるに似たり、畢竟有りと思へば無、無かと思へば有、明暗雙々ては何とも形容のしやうが無いぞと賛成を表し、彼此恁麼あちらも明暗雙々こちらも明暗雙々宇宙萬象さらに擇ぶ所は無い、同條生や共に相知る、即ち本則に巖頭の雪峰は我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せずと言ふたのを拈し來つて其れに注釋を加へて謠ふたのである、これは何も雪峰と巖頭に限つたことでは無い、又斯ういふことを言ふたならば頑固な禪僧などが恠むてあらうけれども、天地萬物皆悉く同條に生じて同條に死せざるものである、山と川とは同條に生じて其生や同胞である、けれども山は是れ山て水は是れ水である、其姿も其の作用も同條では無い、梅と櫻は同じ春風に咲くけれども、梅の香と櫻の色とは同條でない、之を古人は春風無高下、花枝自短長とも謠ふてある、今其の同條生の所に於ては共に相知るで、互ひに同じ趣味を相弄して居る、着語に、是れ何の種族ぞ、其の同條に生じたと云ふのは、同胞兄弟であらうか、一體に其れは白哲人種か、黄色人種か、刹利種か、婆羅門種か、能く參究して見ると吾々への注意であり、彼此

没交渉、雪竇は共に相知るといふけれども恐らくは互ひに何の交渉も無からうぞと抑へ、又君は瀟湘に向ひ、我は秦に向ふ途中までは親しい道づれてあるが、いづれ追分て別れてある、別れた後は何うである、不同條死や還て殊絶、柳の緑は花の知らざる所て花の紅は柳の知つたことでは無い、人々自ら光明の在るあり、東方薬師の本願は現世の利益のみで、西方彌陀の本願は未來往生に在るも面白い、着語に拄杖子は我が手裡に在りとある、圓悟殊絶の本分は即ち是の如くぞ、争てか山僧を怪み得てん、何も不思議なことは無い、然るに你が鼻孔、什麼としてか別人の手裡に在ると門下の學人を警めて、其方たちは人々各自の本分を等閑にして、やゝもすれば他人の爲めに翻弄されて居るとは何事ぞと叱る、雪竇は例のくせて還て、殊絶と前句を疊みかけて、サ、此の殊絶の處は黃頭碧眼も須らく、甄別すべし、黃頭といふは釋尊のこと、碧眼といふは達磨大師のことである、此の殊絶なる不同條死の境界は釋迦も達磨も互ひに相知ることは出来ない、圓悟が還て棒を喫せんと要すや、還て殊絶と疊みかけた上には愈々圓悟の本分を行せねばならぬやうになつたぞと言ひ、又什麼の摸索の處か有らん、其の殊絶の處を其う事むつかしく摸索するには及

ぶまいぞと言ふ、又次の句に盡大地の人鈴を亡じ、舌を結ぶ、こゝに至りては誰でも手出しも口出しも出来るものでは無いと言ひ、しかし我、た、恁麼他人は却て不恁麼すなはち我は我たり、汝は汝たり、何も甄別し難いことは無い、只老胡の知るを許して、老胡の會するを許さず、酒は酔ふものぞと云ふことだけは誰でも知れる、けれども其の酔ひ心は常人より外に合點するものは無い、果して然らば人々各自に南北東西歸去來、サ、互ひに歸るべき所へ歸らうぞと雪竇老漢の大號令である、着語に收と上來の都ての云々を只此の歸去來の一句に能く收拾したとほめ、又脚跟下猶ほ五色の線を帶ぶること、在り、歸去來と口では言ふても足元が覺束ないぞと抑へ、更に你に一條の拄杖子を興へん、愈々歸るなら杖を一本貸してあげやうかと擲か、然らば其の歸つて往く落ち着き場は何處であるぞ、夜深けて同く看る千巖の雪、石頭大師の參同契に、明暗各々相對して比するに、前後の歩の如しとある、これが宇宙の眞景で、即ち本地の風光である、其れを巖頭は只這れ是れとも言ふた、着語に猶ほ半月程に較れり、若し之を以て最後の句と認める者があつたならば、まだ

また遠くて本分の地までは尙ほ十五日もかゝるであらうぞと言ひ、從他あれ大地雪漫々たに千巖のみならず大地漫々の雪であつても溝に填ち壑に塞りて人の會する無し、誰ありて此の風光を眞實に合點する者は無からう也、た是れ箇の瞎漢ども、これ皆盲目だちよと罵しり、遂て最後の句を識得すやと警醒して、便ち打つ、最後の句を識り得たと云ふも三十棒、識り得ぬといふも三十棒、こゝに至つては同條も不同條も双明も双暗も都べて勦絶し盡された、これが即ち圓悟の此公案に對する本分の見やうである。

第五十二則 趙州石橋略約

本則 舉僧問趙州久響趙州石橋到來只見略約也、有人來持虎鬚○

州云汝只見略約且不見石橋慣得其便○這僧云如何是石橋約也、是稱僧本分事

州云渡驢渡馬一網打就○直得盡大地人

趙州從諗禪師の住して居られた觀音院は趙州城の東にあたり石橋を距ること十里とある、其の石橋といふは天台山と南嶽と趙州との三石橋と稱して、天下の名所

の隨一である、そなたこて或る僧が趙州和尚に問ふ久く趙州の石橋と響く、到來れば只略約を見ると言ふた、これは謂ゆる借事問て石橋に事よせて趙州の佛法を勘檢しやうと云ふのである、略約といふは獨木橋すなはち一本橋のことである、から此僧が無遠慮にも趙州和尚に向つて趙州の從諗禪師といふ名前は久く天下に鳴り響いて居るから、モ少し大善知識らしく眉間から光明ても輝やかして居るかと思ふたに來て直接に遭ふて見れば何の奇特も無い、老耄の坊さんて御座る、いと云ふたやうなアンバイ、隨分失禮な言ひかたである、着語に也、た、人あり來て、虎鬚を拵つ、命しらずの僧ではある、趙州の如き虎の鬚を拵て、今にワングリと咬み殺されるであらうにと云ふ、然しながら也、た、是れ、稱僧本分の事ぞとほめたやうにも見えるが、又其の石橋に譬へられる事からは、人に問ふべきことでは無い、人々各自本具のごとて、殊に稱僧本分の事であるにと抑へたやうでもある、州云く汝只見略約を見て且らく石橋を見ず、其れは其方が只老耄たけを見ることが出來て、眞實の趙州老漢を見ることが出來ぬのよと、誠にアツサリとした答ではあるが、中々に毒氣を含んだ一言であるから、着語に其便を得るに慣へり、サスガの趙州であるに依

て、人を接することに慣れたものであると言ひ、又這の老漢身を賣り去れり、其方は眞實の趙州老漢を見ることが出来まいと言ふたのは已れと已れの身を餌にして釣を垂れるやうなものぞと言ふ、果して此の僧は其の釣針に懸かつて、僧云く如何なるか、是れ石橋、一鉢に此僧が最初から石橋と略約と二物對待の見を以て、其間に揀擇取捨する所のあることを自白して居るのであるから、其んなこととて到底此の七百甲子の老趙州を勘破することなどは思ひも寄らぬことである、果して趙州の語路に翻弄されて、略約の外に別段の石橋と云ふ物が有て、特別の人だけ渡ることでもあるかのやうに思ふた、圓悟が釣に上り來れりと言ひ、果然と言ふ皆其模様を評したのである、州云く驢を渡し馬を渡す、其の石橋と云ふ橋は何も異つたことは無い、驢も渡れば馬も渡る、天子も通れば乞食も通る、花も咲けば紅葉も散る、宇宙萬象そのまゝが眞如法性の當鉢よ、圓悟が一網に打就す何も彼も皆一網に引きあげてしまふぞと、識し更に直に得たり、盡大地の人氣を出す處なし、斯うおつかふせせられては、誰でも動きは取れまいと言ひ、又一死更に再活せず、香に氣を出す處なし、位なことは無い、三世の諸佛も歴代の祖師も皆ことごとく死人となつてしま

ふぞと言ふ、ナゼかと云ふに、只此の驢を渡し馬を渡すところ、佛法にも祖道にも用は無いからである。

頤孤危不立道方高

須是到道地始得言

入海還須釣巨鼈

坐斷要津不通凡聖

○蝦蟇蟻蚌不足而○大

堪笑同時灌溪老

也○有德人曾患來○解云劈箭亦

徒勞

猶較半月程○似則似是則未是

孤危立せず道方に高しといふは、趙州老漢の人を接する手段が、彼の臨濟や徳山などの忽ち棒を揮ひ喝を吐いて、甚だ孤危峻峻近か寄ることの出来ないやうなことは仕ない、其の様子を孤危不立と言ふた、孤危不立で誠に言葉やはらかに汝は只略約を見て來た石橋を見すなどと、平生の談話のやうであるけれども、其の平話の中に萬仞峻崖容易に攀ぢ登り難い所のあるのを道方に高しと言ふた、着語に須く是れ這の田地に到て始めて得べし、此れは中々他人の及ばぬ所、趙州ほどの境界に到り得たもので無くては決して眞似も出来るものには無いと言ふ、言猶ほ耳に在りかねて趙州の機鋒の鋭い噂は聞て居たが、實に聞きしに違はず威あつて猛からざ

る所に浸々と感服したと言ふアンバイ、他に、自分の草料を、還せ、衲僧の自分を、是に草料すなはち棒もあれば喝もあるが、其のやうな孤危を用ゐずとも、平話常談の間に是の如く衲僧の自分を、是に草料すなはち棒もあれば喝もあるが、其のやうな孤危を用ゐずとも、平話常談なる材料は、皆この趙州老漢に譲り渡してしまはねばなるまいと、徹頭徹尾の大賛成である。海に入ては、還て、須く巨鼈を釣るべし。偕其の趙州の道方に、高き調子を、啓へて見やうならば、列子に、龍伯國に大人あり、足を擧げて、數十歩に、盈たざるに、五山の所におよび、一釣に六鼈を、連ね負ふて、國に歸るなど、と云ふことがあるやうなもので、佛法の大海に於て、一言半句を吐くも、蝦や、雜魚を釣るのでは、無い、鼈とも謂ふべき大鼈すなはち、立地に成佛作祖し得るほどの上根上機の學人を接するのであるぞと言ふ、着語に、要津を、坐斷して、凡聖を、通せず、要津とは、此岸より彼岸に到るに肝要なる渡し場であるが、今此の趙州の機鋒は、煩惱生死とか、菩提涅槃とか、云ふ所の其の根元から、斷ち截るのであるから、其の煩惱生死に沈淪して居る凡夫とか、其の菩提涅槃を得たる聖者とか、云ふ所の名目さへも、無くなつてしまふのであるぞと言ふ、蝦、蜆、螺、蚌は、問ふに、足らず、斯んな着語は、無くもがなと思ふ、大丈夫の漢、兩々

三々なるべし、兩々三々といふは、彼れも此れも、と云ふやうなことで、今は海に入れば、必らず巨鼈が目的、其他に鱈が居ても、鯨が居ても、其んなものには、目を懸けないと云ふ意味、笑に堪たり、同時の灌溪老、これは、雪竇が趙州を讚歎する餘りに、灌溪老を引合に出して、比較したのであるが、灌溪老こそ、好い面の皮である、此れは、趙州と同時代の灌溪志閑禪師と云ふ人のこと、此人にも、此の本則と、誠に同じやうな問答がある、其れは、或る僧が灌溪に問て、久しく灌溪と響く到來するに、及びて、只箇の瀋麻池を見ると、言ふた、瀋麻といふは、詩經にある語で、少しばかりの水が、ビチャビチャして居て、僅に麻を、ひたすほどの、小さい池ぞと云ふのである、溪曰く、汝只瀋麻池を見て、且く灌溪を見ず、僧云く、如何なるか、是れ灌溪、この問も、答も、全く今の本則と同じ調子である、然るに、こゝで灌溪の答は、全く趙州と違つて、甚だ孤危峻嶮に、溪云く、劈箭急なり、即ち此の灌溪の激流は、強弓で射る矢よりも、疾いぞと答へた、雪竇は、其れを引合に出して來て、何も其のやうに力を入れて、劈箭急なりなどと、威張らないでも、穩健平易に、驢を渡し馬を渡すと、力も入れず、骨も折らず、十分に本地の風光を吐露し得るものと云ふので、笑ふに堪たりと、批評したのである、着語に、也、た

恁麼の人ありて會て恁麼にし來ると言ひ更に也た恁麼に機關を用ふる底の手脚ありと言ふ二句ともに同じ意味で偈は趙州ばかりでなく外にも斯のやうな問答で學人を接した人もあるぞと云ふのであるが後の一句は前の一句の説明として後人が書入れるのが混じたのでは無からうか劈箭と云ふことを解するも亦た徒らに勞す此の句の意味は既に前に辨じた通りのこととて力を入れて威張つたやうな所だけ趙州の常談平話には及ばないそこで只徒らに勞すと言ふたのである着語に猶ほ半月程に較れり趙州の境界に到るには尙ほ半月もかゝらうぞと云ふ似たることは則ち似たり是なることは則ち未たし形式は能く似て居るけれども精神の程度は餘ほど違ふて居ると言ふ。

第五十三則 馬大師野鴨子

垂示 徧界不藏。全機獨露。觸途無滯。着着有出身之機。句下無私頭。頭有殺人意。且道古人畢竟向什麼處休歇。試舉看。

徧界藏さず全機獨り露はるとは、宇宙の本体は萬象の上に其の作用の全分を露はして居るぞと云ふことである徧界とは十方世界に徧ねく満ちてあると云ふ意味であるから謂ゆる無限の空間に充ち塞がつて居ると云ふこと、不藏といふも獨露といふも同じ意味で、要する所は其の無限の空間に充ち塞がつて居る所の本体、即ち眞如とも法性と名けられるもの、或は大極と見られたり、ゴットと眺められたりするものの全力の活機は、山となつては高く聳え水となつては長く流れ、花となつては春に咲き紅葉となつては秋に散る、少しも掩ひ藏す所はない赤裸々露堂々の姿である、其れを其儘にお互ひ人間の上に受用し得て自在無礙になつたのを、且らく假りに名けて本分の衲僧とも又は佛とも祖とも曰ふのである、そこで其の衲僧たる者の作用は、途に觸れて滯りなく着々出身の機あり、即ち如何なる場合に於て如何なる事情に出會ふても、其の爲めに束縛されるといふこと無く、自由自在に働らくことの出来る様子を、着々出身の機ありといふのである、又句下に私なく頭々殺人の意ありといふは、其の衲僧たる者が本分の令を行して學人を接する時になつては、一言一句皆悉く天眞の本性に契ふて、決して自己の憶断を雜えない様子を

句下無私と謂ふ、己に是れ無私の言句であるに依て、頭々殺人の意ありて、如何なる人に對しても皆悉く其生命與奪を自由にする機鋒がある、且く道へ古人畢竟什麼の處に向てか休歇するサテ是の如き大機大用を逞くする衲僧の謂ゆる殺人の鋒刃を受けつゝ、大安心の境に住して休歇することの出来た人は、古人の中に於て誰であらうぞ、試みに擧す看よと本則を呼び出した前の語句の中で休歇といふ二字が誠に肝要なので、煩惱だの菩提だの生死だの涅槃だのといふ重擔を悉く卸してしまふて、自家の座床に樂々と穩坐することの出来た姿を休歇といふのである。

本則擧馬大師與百丈行次見野鴨子飛過兩箇落草漢○草裏大師云

是什麼和尙合知○道老丈云野鴨子鼻孔已在別人手裏○只管大師云什麼

處去也前箭猶在後箭深○第丈云飛過去也只管隨他後轉大師遂扭百

丈鼻頭父母所生鼻孔却在別人手裏○換轉鼻頭○要轉鼻孔來也丈作忍痛聲只在道裏○還喚作野鴨大師

云何曾飛去鼻孔只在鬼窟裏○道老漢元

馬大師といふは江西馬祖山の道一禪師のこと、第三則の處に大略其の傳記を申して置いたことであつた、百丈山の懷海禪師は即ち馬祖の上足の法嗣である、ある日のこと師弟二人で散歩して居た時に、野鴨子の飛び過ぐるを見る、圓悟の着語に兩箇落艸の漢と言ひ艸裡に輾ずと言ふ、師匠も師匠なれば弟子も弟子である、何の目的もなしにノソノソと遊び歩くとは何事ぞと抑へた、けれども此の兩人決して空く遊び歩くのでは無い、即ち直に野鴨子の飛び過ぐるのを見つけて、然るに圓悟は慈願して什麼か作さん、本分の地には一法も見ざるべきものは無いはずであるに、野鴨子などに目を留めて何にするぞと抑へた、大師云く是れ什麼ぞ、これは馬大師が野鴨子の何物たるかを知らずに百丈に問ふたので有らうか、マサカ其うてはあゝるまい、垂示に謂ゆる徧界不藏、全體獨露の處を、此の野鴨子の飛び過ぐる上に於て、弟子の百丈が何う見て居るかを勘檢せられるために、斯う問はれたことは申すまでも無い、着語に和尚まさに知るべしと此れは圓悟が馬大師に向つての一拶である、更に這の老漢鼻孔も也、た知らずイヤ馬大師は野鴨子を知らないと見える、斯の様子では己れの鼻の孔が何う明いてるかも知らないであらうと冷かす、丈云く野

鴨子まことに正直な答である、明日以後は佛祖の頂巖を蹂躪して、天下人の如何ともし難き百丈大智禪師も、今日の所ては未だ此の場合に於て自由の分は無かつたのである故に着語にも鼻孔已に別人の手裡に在り、到底百丈を活かさうとも殺さうとも馬大師の手心一つといふことにあつた、又只管に欸を供す氣の弱い罪人が正直に白狀するやうな姿であるぞと言ひ、更に第二杓の惡水は更に毒ならんと言ふ、此の一問一答はマダしものこと、次の一問は別して透りにくからうぞと豫言したのである、大師云く、什麼の處にか去るさて彼の野鴨子は何處へ往くのであるぞ、イヤ徧界不藏の全機は何の處に落着するぞとの問である、着語に前箭は猶ほ輕く後箭は深し、前の是れ什麼ぞと放つた矢よりも、今度の什麼の處にか去ると放つた矢の方が百丈の胸板へグサリと深く立つたぞと云ふ、第二回の、啗啄これは第十六則にあつた啗啄の啄の字で、親鳥が卵の中の兒鳥をつき出すこととて、即ち師匠の馬大師が弟子の百丈に悟らせやうと思ふ一心で、前には是れ什麼ぞと第一回の啗啄を試みたが、未だ雛が卵から出ないに依て、今また什麼の處にか去ると再び啗啄したと云ふのである、也、た、合に、自知すべし、馬大師自家の事ならは何も百丈に問ふの

必要は無い、丈云く、飛び過ぎ去る實に言はずとも知れたことよ、着語に、只管に、他の後に隨て、轉ず、少しも自己出身の處は無く、どこまでも人の口車に乗せられて歩く氣の毒さよ、當面に、蹉過す、全く行き違ひになつてしまふた、大師遂に百丈の鼻頭を扭る、馬大師到頭疔癢をもちして、百丈の鼻づゝを指の尖てキリ、と扭つた、こゝに遂にと云ふてあるが、此字は何處に使つてあつても、其前に彼れ此れと遣つて見たけれども、何うも思ふやうに往かぬに依て、遂に斯うしたと云ふやうな場合の時に使ふ字である、即ち此の一字に依て、馬大師が百丈のために色々心配せられたことが解つて、師匠の恩の深重廣大なることが想ひやられる、圓悟が父母所生の鼻孔却て別人の手裡に在ると言ふ、百丈元來自家本具の光明があるては無いか、然るに其れを自ら發揮することが出來ないで、屢々馬大師に手敷を掛けるとは何事ぞ、これは吾々も互ひ誰人も尤も反省せねばならぬ要點である、槍頭を、振轉すと此れは馬大師が今までは言葉を以て啗啄して居たのを、今度は腕力で開發させやうとするのを許したのである、鼻孔を、裂轉し、來れりとは、モ一言ふにや及ぶ、丈忍痛の聲を作す、百丈は鼻づるを扭られてアイタ、と號んだ、此の一刹那に無始劫來の無明煩惱

ことく根絶しに切斷し盡したと見える着語に只這裏に在り只此の忍痛アイ
 タ、と云ふ聲、これは馬大師が強めて百丈に啼かせたのか、幾ら啼かせやうても本
 具の聲の無いものは啼きもしまし、遠て喚て野鴨子と作し得てんや、さては野鴨子
 が啼いたので有つたか、何うぢや百丈これて遠て痛痒を識るや、痛たさ痒さが解
 つたとすればも目てたい、大師云く何ぞ會て飛ひ去らん、其方は先刻野鴨子が飛ひ
 過ぎ去ると言ふたが、其れ其處に居て其のやうな聲を出して啼てゐるでは無いかと
 言ふ實に馬大師の慈悲廣大限りも無い言葉である、圓悟は餘りに其の深切に過ぐ
 るを抑へて、人を瞞することなくんば、好しと言ひ、更に這の老漢元來只鬼窟裡に在
 て活計を作すと、言ふ忍痛の聲を認めて法性法身の説法の如くに言ふ所、甚だ婆談
 に類するを抑へるのである、然しながら百丈は此の一段の因縁に依て、其翌日馬大
 師から汝深く今日の事を知ると云ふ印可の證言を受けたのである、又圓悟も評唱
 の中に於て、諸人佛祖のために師とならんと要せば、百丈に參取せよと言はれてあ
 る、古人暫時も放過せず日々夜々に寝ても起きても、只此の事にのみ専心工夫せる
 結果、是の如き時節因縁に逢着したのである、吾人も互ひ眞面目に學ふべき肝要の

所だ。

頌野鴨子

又有一隻

知何許

知解似

馬祖見來相共

語

打葛藤有什麼了

國有馬祖

話盡山雲海

月情

知他打葛藤多少

依前不會還

飛去

他不會

道

飛過

欲飛去

是與他下手裏

却把住

更道

道道

山僧道

不可作野

鴨子

天若天

脚跟下好

不知向

什麼處去

野鴨子

知何許

長空を飛ひ行く野鴨の數は何程あるぞ

野鴨子知何許ぞ、長空を飛ひ行く野鴨の數は何程あるぞ、梵網菩薩戒經の序には、
 我今盧舍那まさに蓮華臺に坐す、周匝せる千華の上に復た千の釋迦を現ず、一華に
 百億の國ありて一國に一釋迦あり、各々菩提樹に坐して一時に佛道を成ずと説か
 れてある、野鴨子の道づれば實に限りもなく多いことぞ、圓悟は群を成し隊を作す
 と言ひ、又一隻ありと言ふは百丈を斥す用て什麼をか作さん、幾ら有つたからても
 何の用に立つかと拂ひ、更に麻の如く粟に以たり、十方三世の一切諸佛西天東土の
 歴代の祖師そんな物が入用ならば幾らでもあるぞと言ふ、馬祖見來りて相共に語
 るかねて馬大師は其の多くの野鴨子と親い中であるから、其れを百丈に紹介して

是れ什麼ぞと話しかけたが百丈は彼の現に空を飛て行く野鴨だけが見えた様子で馬大師が少し間のぬけた氣味であつた。そこで着語に葛藤を打して什麼の了期が有らん馬大師が幾ら其やうなことを言ふたからても果てしのあるものでは無いと抑へ又箇の什麼をか説かん元來言語道斷で彼れの此れと言ふべきことは無いと言ひけれども獨り馬祖のみありて箇の後底を識る此の百丈には十分に見込があるといふことを馬祖は知て居るから次の句の話し盡す山雲海月の情で更に什麼の處にか去ると第二問を發し馬祖は深切の心底を傾け盡して居る奈何せん東家の杓柄は長く西家の杓柄は短かし馬祖と百丈と程度が違ふて居るので知ぬ他は葛藤を打すること多少ぞ色々馬大師が言はれても相談になりかねて依前として會せず還て飛び去るとばかり未だく解らない圓悟は因と着語した、此の因の字は日本の俗に何か不慮に氣の付いた時などハツと云ふ聲を出す其音を寫したのであるそうな今もハツと氣がついて其の野鴨は何處へも往かぬ其れ此處にと云ふたアンバイ道ふこと莫れ他は言ふことを會せずとイヤこれは百丈が會せぬのでは無い飛び過ぎ去ると言ふ一言に凡聖迷悟皆悉く勦絶し盡したの

てあらうぞと冷かし什麼の處にか飛び過ぎ去れりや其の行き先きを知て居るか
とこれは學人への擲着飛び去らんと欲す却て把住せらる百丈は飛び過ぎ去ると
言ふたけれども中々飛び過ぎ去ることが出來ないで馬大師に鼻柱をキユツと扭
られてアイタ、着語に鼻孔は別人の手裡に在り己れの鼻を他人に自由にされた
已に是れ他のために注脚を下し了れり此れは雪竇の頌の能く行届いたをほめ老
婆心切とは馬祖の把住すなはち鼻頭を扭却したのを贊し更に什麼をか道はんこ
いて百丈が何と言ふたものぞと言ふて次の道へ道へを引き出したサー什麼とか
道はん百丈は只アイタ、と忍痛の聲を發したのみであつたが也た山僧をして道
はいむべからず他人のことはイザ知らず圓悟は何も言はぬぞ野鴨子の叫を作す
べからずマサカ野鴨子の真似でもあるまい蒼蒼天と此れが圓悟の言ひやうと
見える何を悲んだのであらうぞ脚跟下好し三十棒を與ふるに本式でゆけば斯う
じや知らず什麼の處に向てか去る結局落處は何處であるぞと門下および吾々ま
てへの擲着である圓悟は評唱の結末に雪竇然も頌し得て甚た妙なりと雖も争奈
せん跳不出なることをと言ふて居る。

第五十四則 雲門近離甚處

垂示 透出。生死撥轉。機關等閑。截鐵斬釘。隨處蓋天蓋地。且道是什麼人行履處。試舉看。

凡そ禪宗の參學は定慧等學を必要とするので禪定の力と智慧の働きとが圓滿せんければ、定力も其用をなさず、智力も亦其効がないことになる。そこで其の定力の結果は生死を透出して、イツ何時に生死岸頭に立ち、忽ちに閻魔大王のお迎ひにあつかりても、用事はてゝ家に歸るが如く心嬉しく死に就くことが出来るやうになり、又其の知見の力を以て機關を撥轉し、如何なる場合に於ても自由自在に働き得るやうになるのである。既に是の如く定慧圓明の地に到り得た作家の衲僧であれば、等閑に鐵を截り、釘を斬る、等閑といふは別段に注意を用ゐずに、思ふまゝに言ひ手當り次第に何事でも行ふ、其れが其儘に截斷し難きこと、鐵釘の固きが如き困難なる煩惱妄想をも、自在無礙に易々と透りぬけて、隨處に蓋天蓋地なり、隨處といふは何處でもといふこと、即ち順境に於ても逆境に於ても、嬉しい中ても、悲しい處でも、其

處が其儘に其事からを取りも直さず、蓋天蓋地て宇宙萬象の上に充滿瀾滄するところになる、且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞ、其ういふ境界の人は誰であつたらうぞ、試みに舉す看よと本則を舉揚する。

本則 舉雲門問僧近離甚處。僧云。西禪。西禪果然可然實

門云。西禪近日有何言句。僧云。某甲話在爾待要翻款那〇却似展兩手展兩手〇

門打。一掌打〇快便難逢僧云。某甲話在爾待要翻款那〇却似門却展

兩手展兩手〇僧無語。門便打不可放過〇此神合是雲門奧〇何故當斷不斷

雲門僧に問ふ近離甚の處ぞ、これは例の如く初めて來た坊さんに從前の經歷を問ふ定例の試験である、着語に也、た西禪と道ふべからず、雲門の問ふ所は地理上における近離の處では無いぞ、然るに若し地理上から西禪から參りましたなどと言ふまいぞと、ころばぬ先の杖をさづけ、畢竟この間は探竿影草て此の僧の定慧の程

度を探偵するのであるぞ、東、西、南、北と道ふべからず、假令いづれの方角にもせよ地理的の答ては濟まぬぞと言ふ、僧曰く、西禪、西禪といふは傳燈錄第十卷に南泉禪師の法嗣十七人を擧げてある中に、蘇州の西山和尚とあつて、他の本には此人のことを西禪和尚と書いてある、今此僧は是れまで其の西禪和尚の坐下に參じて居たものと見えて、正直に西禪と答へたけれども、此れでモ一脚下を明かに見すかされてしまつたのである、着語に、果然として、可憐、實頭と冷かし、又當時好し、本分の草料を興へて、三十棒を食はせてしまへば好かつたにと言ふ、門云く、西禪近日の言句かあると更に第二の試験にかゝつた、着語に擧げんと欲すれども、恐らくは和尚を驚かさん、其の西禪近日の言句をお聞せ申しても、好いが、おほかた、喫驚されるであらうと思ふと、斯う言へば好いにと重々に冷かす、深く來風を辨ずといふは雲門は飽くまで此僧の臍の下までも見ぬいて居るぞと言ふのである也、た和尚に似て、寐寤するに相似たり、イヤ西禪近日の言句は誠に能く貴方に似て、而も寐ぼけて居るやうて御座ると、斯う答へても好かつたに、と何處までも冷かす、然るに此僧中々に活機がある即ち僧兩手を展ぶ、西禪近日の言句で御座るかサ、此の通りと云ふアン

パイで物をば言はずに兩手をグツと廣げた、圓悟は敗闕し了れり、此れでモ一、大失策よと抑へ、又雲門に向つて賊を匂して家を破る、斯のやうな僧を相手にして居ては、盗人に追殺して身代限りするやうなものぞと言ふ、妨げず人をして疑着せしむることを、然りながら此の兩手を展べた所に、何か一見識あるかのやうに思はれて、初心の者に疑ひを起させるだけの作用はあるぞと益々冷かす、門打つこと一掌と手の平でビシヤリ、圓悟は大賛成で、令に據て、而して行すと、言ひ、又好く打つたとほめ、更に快便逢ひ難しと重ね、ノの讚歎じや、僧云く、某甲話、在イヤ、其れに就ては、お話があり、ますと言ふた調子は、中々に作家の滑稽らしく見えるぞ、着語に、爾翻歎を要することを待つや、歎と云ふことは、前にも在つたが、裁判所で罪人の白狀した記録のことである、其れを翻すといふは豫審で言ふたことを公判の時に自ら取消すやうなことをするのである、此僧すてに雲門に一掌を食はせられたに就ては、ガラリと引くり返りて、イヤ某甲にお話があるなど、一筋の血路を開いたのであるかと、言ふ、却て旗を掲ぎ、鼓を奪ふ底の手脚あるに似たり、此僧の勢ひは殆んど雲門の陣中に切り込んで大勝利を得るやうであるぞと、揶揄す、サスガの老作家たる雲門大師

そこに抜けめのあるべきかは、早く己に機先を制して却て兩手を展ぶと、彼の僧が先刻やらかして却つて一掌を喫した通りのことを爲られた、是の時に今度は彼の僧の方からビシヤリと雲門大師を打つことが出来てあつたら面白いが、サマガに此僧もマンザラの初心でもなければ勿論狂人でもないに依て、僧無語何の言句も出なかつた、着語に峻とあるオヤ危険よと云ふたアンバイ青龍に駕輿すれども騎ることを解せず、此僧せつかく此處まで漕ぎつけながら無語で退ぞくと哀れである、と云ふので、更に惜むべしと着語した門、便ち打つ。そこで雲門は更に此僧をドシンと一棒の正令を行じた着語に放過すべからず何うしても赦しては置けぬ所ぞと言ふ、又此棒まさに是れ雲門喫すべし、何が故ぞ斷すべきに斷せざれば返て其亂を招く、其僧眞に英靈の漢であつたならば、雲門が兩手を展べた時にビシヤリと雲門を打てさへ置けば、今になつて雲門に打たれるはずは無いのであつたに、と擲し、更に閑黎多少をか喫すべし、此れは雲門に向つて閑黎も何ほどか棒を喫せねば成らぬだけの過はあらうぞと言ふ、一着を放過す多少の棒に止まらずモツと罰すべきであるけれども、先づく此位で赦して置かう、若し放過せずんば、合に作麼

生、これは坐下への擲着て、少しも赦さないとした時には何うするのであると思ふか、審細に参究して見るとの垂誠である。

頤虎頭虎尾一時收

殺入刀活人劍須是道漢始得○千兵易得一將難求

凜凜威風四百州

坐斷天下人舌

天蓋地

却問不知何太峻

不可言細語○雲門元來未可知在○閑黎相次着也

師云放過一着

又若不放過

○盤天下人一時落節○擊禪末二下

此頌は七言三句のみで第四句が無い、前の第三十六則の長沙遊山の頌は五言七句で第八句が無い、咄と云ふ一字を以て結であつたが、此頌は放過一着といふ四字で結である、これも亦た頌の一鉢である、虎頭虎尾一時に收むといふは雲門大師の人を接する機鋒は、始もあれば終りもあり頭尾照應圓滿してあることを稱賛したのである、先には僧が兩手を展べた所で一掌を與へ、後には僧の無語に乗じて又一掌を與へた調子少しも隙間が無い、そこで圓悟は殺人刀活人劍と着語した、殺そうとも活かそうとも自在無礙である、須く是れ這の漢にして始て得ん是の如き機轉は雲門で無くてはと重々の讚歎、凜々たる威風四百州、それ故に雲門大師の威德風采

は支那四百餘州の道俗皆悉く景仰し、天下人の舌頭を坐斷す、誰一人も批難するこ
 とは出来ぬ、管に四百州ばかりでは無い、蓋天蓋地て十方三世に獨尊ぞとほめあげ
 た、却て問ふ知らず何ぞ太た嶮なる。此句は古來餘程解しにくい句であると言ふこ
 とで、大燈國師やは却問といふは雲門が兩手を展べた所で、不知といふは僧の無
 語の所、太嶮といふは雲門が打た所であるとも言はれたそうなる、其う一々あてはめ
 て見れば不思議も無やうであるが、やはり詩句としては解しにくい、然るに風外老
 人は易々と之を辨じて、各々雲門を取り違へまいぞ、尋常に茶を喫するとき虎頭に
 騎て喫したが、飯を喫するとき虎尾を收めて喫したが、坐臥經行凜々たる威風に非
 ざるは無い、此を雪竇が諸人に自知自得せしめんが爲めに、却て問ふ知らず何ぞ太
 た嶮なると廣くかけて、此様に閃機電轉するは何うしたものぞと問ひかけたので
 ある、人々返照して看よと言はれてある、此れて能く解かつた、畢竟此の一句は吾々
 後學の者に參究の要路を指示せられたのである、そこで圓悟は、盲枷瞎棒すべから
 ず、如何に本分の正令であるなどと云ふたからでも、妄りに人を打つと云ふことが
 其れを謂れなく、嶮峻とか孤危とか名けるわけには往かぬ、しかし、雪竇元來未だ知

らざる、こと、在り、雲門の嶮の如何なるかを知らぬために却て問ふ知らず何ぞ太た
 嶮なるなどと疑問らしいことを言ふたので有らう、闇黎相次着也、闇黎は雪竇をさ
 し相次は造次と同じで不注意の意味または疎忽の義、即ち此の一句は雪竇が不注
 意疎忽に斯のやうなことを言ふたのでは無いかと、此れ亦た吾人に疑團を重ねさ
 せて、其の結局は更に説明の路を開かせる、却て師云く、一着を放過すと突き放した
 師とは雪竇である、第三句まで頌し來りて、まさに結句を置くべきに當りて、諸人試
 みに之を結んで見ると云ふたアンバイ、此れが即ち雪竇の此の本則を拈起して吾
 人を提撕せられる活手段である、故に圓悟は若し放過せずんば、又作廢生と擲着し
 た、こゝに至つては盡大地の人、一時に落節す、誰ありて勝利を占め得る者はあるま
 いと言つて、禪床を撃つこと、一下とカチリ、此れが即ち圓悟の結句である。

第五十五則 道吾漸源弔孝

垂示 穩密全眞、當頭取證、涉流轉物直下承當、向擊石火閃電
 光中坐斷、誦訛於據、虎頭收虎尾、處壁立千仞、則且置放、一線

道還有爲人處也無試舉看

穩密全真とは謂ゆる把住底の境界穩は安穩て密は綿密大元帥陛下が九重の大奥ふかく玉簾の中に在しますやうな姿其穩密の處そのまゝに宇宙全體の真相である此に於て當頭に證を取る當頭といふは俗に出合頭といふほどのことで見るとつけ聞くにつけ皆ことごとく悟りとなる流れに涉りて物を轉すとは謂ゆる放行底の作用で彼の穩密全真の光が都べての事物を照してゆく姿流れに涉るといふは見れば見るに任せ聞けば聞くに随つて逆らはないこと物を轉すとは其の見るもの聞くものに逆らはずに其の事物を活かして働らかせる様子其の直下に承當す其場を去らず其時を移さずに佛祖の大道に承當する承當とはヒタリと出合ふて隙間のない姿君と喚るれば應と答ふるやうにスツクリ真理に契ふとを承當と謂ふ撃石火閃電光中に向て請訛を坐斷す此れは前の流に涉りて物を轉する様子を説き明かしたので如何ほど迅速銳利なる間に於ても快刀を以て亂麻を截るか如くに樂々に其請訛を辨明する請訛といふは前には屢々あつたが荦牙といふも

同じ意味で物事の錯雜して辨明し難いことをいふのである虎頭に據て虎尾を收むる處に於て壁立千仞謂ゆる騎虎の勢ひて幾かに躊躇すれば虎のためにワングリと咬みつかれる場合こゝに至りて壁立千仞何とも他から手のつけやうも口の出しやうも無いと云ふほどのことは則ち且らく置く今は一線道を放して千軍萬馬の重圍の中から纔に一筋の血路を開いて而して還て人の爲にする處ありや也た無しや之を古人の中に求むれば道吾が漸源を接したやうなもので有る試に舉す看よ

本則舉道吾與漸源至一家弔慰源拍棺云生邪死邪道什麼道好

兩頭在吾云生也不道死也不道龍吟相語起虎嘯風生切源云爲什麼不道

果然錯會也吾云不道不道源水頭流前同至中路源云和尚快與

某甲道苦不道打和尚去也却較些子多過刻吾云打即

任打道即不道再三須重事源便打好打且道打他什麼後道

吾遷化源到石霜舉似前話知而故犯也○不知是霜云生也不道死也

不道飯可煞新鮮○道殺茶源云爲什麼不道道與前來問是問是別霜云不道

不道天上下○曹溪波源如源於言下有省山僧好源一日將鐵子於

法堂上從東過西從西過東也是死中得活○好與先師出氣霜云作什麼

源云覓先師靈骨不覺初○爾道什麼霜云洪波浩渺白浪滔

天覓什麼先師靈骨也須他作家始得雪竇着語云蒼天蒼天天賦過後張

源云正好着力且道落在什麼處○先師曾向爾道什麼太原孚云先師

靈骨猶在大衆見麼○因電相似○是

道吾といふ石頭藥山道吾と相承して達磨大師十世の法孫である潭州の道吾山に住して名は圓智と曰はれた漸源は其の道吾圓智禪師の法嗣で後に同く潭州の漸源に住した仲興禪師のことである此時には漸源が未だ修行の最中で道吾山の典

座を勤めて居たとも云へば侍者をして居たとも云ふことである或時師弟もろとも一家に至て弔慰す檀家の葬式に往つた然るに漸源は頻りに生死透脱の工夫を凝らして居る最中であるから何事に就けても空しく看過しない直に其の死人の棺を拍つて云く生か死か此の棺の中に入れて居る人は生きて居ますか死して居ますかと道吾に問ふた此れは實に人生最終の大問題である現象から見れば確かに生死があるに依て此の棺中の人は死して居るに相違ない然るに之を本體の上から見れば謂ゆる物質不滅勢力保存て其の身體も精神も死だとは言はれないしかし其の時には不生不滅であつて元來生れたと云ふことを認めない上からてなければ死なないといふことも認められないそこで吾々が生死の現象中に在て生死の苦みを脱しやうと云ふには即ち不生不滅の本體と一致することが出来なければ成らぬ已に不生不滅の本體と一致することが出来れば此身此儘すなはち生死のまゝに不生不滅であるから更に生死を棄てゝ別に不生不滅の涅槃を求めぬには及ばぬのである然るに道理を説明して見れば斯んなことであるけれども實地に此の生死の身を以て不生不滅の本體に一致し朝な夕なの都べての事は自然に不

生不滅の眞理のあらはれた姿であると云ふやうになることは、中々に容易なことでは無いに依て、古人は二十年三十年の辛苦艱難をなめて修行をせられたのである。乃ち今漸源が生か死かと問ふたのも、とかく此の生死といふことが氣にかゝるからのことである。着語に「什麼と道ふぞ、元來不生不滅であるに生か死かとは何と言ふのぞ」と叱る。又好、不惺々、これは日本の俗語に「好い馬鹿だ」といふたやうな悪口。這の漢猶ほ兩頭に在り、生と死との兩つに心を奪はれて居ることよと言ふ。吾云く生とも也。た道はず死とも也。た道はず實に生死に涉らないのであるから、生とも死とも言ふべきでは無い。花の咲くは生か死か、紅葉の散るは生か死か、咲くの散るのと云ふことは煩悶せず、咲くべきには咲き散るべきには散る、山の高きは生か死か、水の長きは生か死か、生とも也。た道はずに山は自から高い、死とも也。た道はずに水は自から長い、然るに吾々人間に在ては何事に就ても煩悶苦惱を免かれない。畢竟妄想妄念に過ぎぬのである。圓悟が龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生すと、道吾の答を讚歎した。又、帽を買ふに頭を相す、漸源の頭に相當して帽子を授けられたので、誠に老婆心切なる答であるに、漸源は只其の道はず道はずと云ふ言葉にばかり着

き廻つて、什麼としてか道はざると突き込んだは、中々一生懸命の様子ではあるが、氣の毒などには、蹉過了也、また果然として、錯て會すと云ふ着語を免かれない。漸源は道吾に於て言ふべき道理があるのを隠して言はないとても思ふたものと見える。然るに道吾は更に道はず道はずと言ふた、只此の道はず道はずが八萬四千の法門も五千餘卷の經文も、皆此の一句に攝し盡してあるのである。故に圓悟は、惡水、蕩頭に、澆ぐと讚歎した。又、前箭は猶ほ軽く、後箭は深し、前の生とも也。た道はず死とも也。た道はずと言ふたのよりも、今度の單に道はず道はずと言はれた力が非常に強いと云ふ。然るに漸源は未だ時節因縁が到らぬものと見えて、回つて中路に至り、とあるから、葬式のあつた家では十分に問答も出来なかつた爲めに途中に於て更に問答を始めた。着語に「太た、慳々」とある。如何にも其の參究に熱心なには、威服の外はない。乃ち源云く、和尚快に某甲が爲に道へ若し道はざれば、和尚を打ち去らん。快の字は疾速の義で、スミヤカの訓に讀むが好いと云ふことである。何ても彼でも是非に言ふて聞かせてもらひたい。若し何うしても言はぬと云ふなら、モ一師匠とは思はぬから、打ち擲るぞと云ふ。實に命がけの掛合である。圓悟は却て些子に較れ、此

の打つぞと言ふた所が中々本分に契ふた様に見えるぞと冷かし、更に穿耳の客に逢ふこと罕なり多くは舟を刻む人に遇ふと評した、漸源の耳の孔は塞がつて居るから幾ら言ふて聞せても聞えないで、却つて舟を刻むの愚をなして居る、船舷を刻むの故事は辨ずるまでも無かるう、這般不啻の漢に似ば地獄に入ること、箭の如くならんと、漸源の遲鈍を抑へて坐下を警誡せられたが、其の道のために熱心なる所は却つて千歳の龜鑑ともせねばなるまい、但これほどまでに眞面目に熱心でありながら、道吾の道はす道はすが會せられぬを見ても、生死の大事を決定することの容易ならぬを知らねばならぬのである、吾云く打つことは即ち打つに任ず道ふことは即ち道はず、言ふべきことを言はぬのでは無い、言ふべからざることであるから言はないのである、即ち此の道はす道はすの一言が其の眞理を言ひ盡して居るのであるから、洞山大師は頭を要せば斬り持ち去れ道ふことは即ち道はすと言はれたこともある、況や打たれるほどのことは何でも無い、圓悟は再三に須く事を重んずべし、道はす道はすが此れて三度に及んだ御丁寧なことよと言ふ、就身打却これは前にあつたが、盜賊が人の身體にビタリと就き添ふて而して其の懐中の物

などを切めることそうな、今は漸源が言ふて聞せてもらひたいと迫るのに打任せ、何うぞ悟らせたいと思ふ大慈悲の方便を其れに譬へたのである、故に更に這の漢滿身泥水と言ふてある、泥の中に陥入てる者を救ふには己れも滿身泥水にならなければならぬからである、又初心改めず、最初から道はす道はすの一本鎗て、更に他の手段を用ゐない源便ち打つと到頭漸源は師匠の道吾を打ちなぐつた、圓悟が好打と冷かして更に且く道へ他を打て、什麼をか作すと、此れは此の漸源が打つたのが好いか悪いか、道理に契ふか契はぬかを審細に參究して見ると門下への一擲、そうして置て更に屈棒、元來人の喫する有ること、在りと言ふ、屈棒といふは罪の無いものを打つことである、世の中には斯のやうな屈棒を喫することも間々あることよと冷評ぞ、此時に道吾禪師は漸源を諭して、其方が此の老僧を謂れなく打たと云ふことが露顯したならば、他の多くの弟子どもが承知しまいに依て、暫くの間は餘處へ往て修行して來いと云ふて道吾山を去らせたと云ふことである、漸源は其後餘處で熱心に修行した効があつて、遂に大に悟る所があつて始めて師匠の道吾に遭ひたくもなり、且つ遭ふべき面目もあるやうになつたのである、けれども、残念

なことには其間に道吾禪師は遷化せられてしまふたに依て、同じ道吾の弟子で自分のためには法兄である所の石霜慶諸禪師の處へ往て印可を求めた、其事を本則に後に道吾遷化す源石霜に到て前話を舉似すと云ふてある、乃ち前の問答から師匠を打つたとまで陳述して、そうして石霜の意見を尋ねた様子である、着語に知て故らに犯すと言ひ、又知らず是か不是か是ならば則ち也、太奇と言ふ、此時には漸源もモ、大躰は知て居るから石霜に問ふたからでも、到底何とも言はぬであらうと知りつゝ、わざと試みに問ふたのである、又自分の今の境界が是であるか不是であるか、そこは先輩に勘検してもらはねばならぬが、確かに是であつたならば面白いと云ふほどの考へて居たらしいと云ふ、圓悟の鑑定である、然るに霜云く生とも也た道はす死とも也た道はす、全く先師そのまゝの答である、着語に可、新、鮮、ま、こ、とに珍らしい答で是れまで聞えたことが無いと言ふ、實に言葉は先師と少しも違はないけれども、漸源の聞き心地は實に新鮮であつたらう、しかし道般の茶飯却て元來人の喫するあり、道はす道はすが日用尋常の家具て、朝な夕なに誰も皆受用不盡であるべき道理ではあるが、其の日常の茶飯を眼前に置きながら飢渴に困んで

居るのが世の常態である、源云く什麼としてか道はざる、と此れも昔のまゝに突き込む、即ち知て故らに犯す様子がアリ、と見えるやうである、圓悟は語は一般なりと雖も、意は兩種と言ふ實に漸源も今昔の感に堪えぬであらう、且く道へ前來の問と是れ同か是れ別か能く辨別して見るとは、坐下への注意、霜云く道はす道はす何處までも先師と同一轍である、着語に天上天下只この道はす道はすが、十方法界に充滿して居ると言ふ、しかし曹溪の波浪若し相似たらば限りなき、平人も陸沈せられん、此れは前の語雖一般意兩種と云ふのと語は別にして意は即ち同じなもの也、太奇である、源言下に省あり、始めて多年實參實究の効があらはれて、先師廣大の慈恩に感泣する時節に至つた、省ありと云ふは大悟と云ふまでには往かないでも、頗ぶる疑團を打破するとの出來た姿を、斯ういふのが禪宗の術語である、圓悟が瞎漢と罵しる、眼前目下に歷々分明なることを今まで見えぬとは何といふ、盲目ぞ、言下に省ありなどと云ふて此の圓悟を欺むくまいぞ、元來省も不省もあるべきことでは無いぞとの意、源一日、鎌子を將て法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぐ、法堂のことは前にもあつたが、禪宗の師家たる人が衆のために法を説く大講堂

であるから、尤も神聖なる道場である。然るに漸源仲興和尚が歎^{なげ}を持って法堂の中をあちらこちらと何が捜してあるく様子である。着語に也、た、是れ、死中に活を得たり、今までは全く死人同様であつた漸源も、今は非常に活潑なる機用を呈することになつた。好い、先師のために氣を出だすに、これこそ道吾圓智禪師の弟子らしく成つたぞとほめる。他に問ふこと、莫れ、且、この一場の懺懼^{ざんぐ}を看ん、これは漸源が斯のやうな妙なことをしても誰も相手になる者が無ければ、手持無沙汰^てで耻^はをかくだけのことであるから、誰も構はないが好いぞと圓悟の揶揄である。然るに石霜が之を見つけて什麼^{なに}ぞか作すぞと咎めた着語に、隨後、婁藪也、これは何の分別もなく人の言葉に付き随つてゆくことの俗語である。そやな、そこで誰も相手にならぬが好いぞと言て置いたのに、今石霜が知らず、漸源の要求に應じたやうになつたのが無分別である。と云ふのである。源云く、先師の靈骨^{りやうこつ}を覓^{もと}む。イヤ此邊に先師道吾の靈骨^{りやうこつ}があらうと思ふから、其れを堀り出さうと思ふて、鍬^{くわ}を持って來たと言ふ。今に至つて先師の在世に此の活機を呈することの出来なかつたを、千年後の吾々から見ても、残念に堪えぬけれども、其實は先師の靈骨^{りやうこつ}は石霜となつて働らさ、漸源とな

つて働らいて居る。しかし圓悟は喪車^{そうしや}背後^{はご}に藥袋^{りやくぶくろ}を懸^かく、此れは事既に及ばずと云ふ意味の俗語で、死人に藥を與へて何の役に立つぞと抑へたのである。又悔らくは當初^{はじめ}を慎^{しん}まざることを會て生か死かと問ふた時に疎忽^{そこつ}であつたから致し方が無いと言ひ、更に備^ひ什麼^{なに}と道ふぞ、今頃になつて先師の靈骨^{りやうこつ}を覓^{もと}めるなど、は何事ぞと叱る。霜云く、洪波^{かうぱ}浩渺^{かうまう}、白浪^{はくろう}滔天^{たうてん}、什麼^{なに}の先師^{せんし}の靈骨^{りやうこつ}をか覓^{もと}めん。今我が此の法堂は大海のはてしなく底をも知らず、一點の塵埃^{ちんあい}をも留めない處であるに、先師の靈骨^{りやうこつ}など、云ふは汚^{けが}はしいものは幾ら覓めたからとて、覓め得られるものには無いぞと言ふ。着語に也、た、須く、他の作家に還して始て得べし、他の作家とは石霜をさす。サスガ石霜でなくては此の本分の説法は出来ないと、の讚歎^{さんたん}、群^{ぐん}を成し、隊^{たい}を作すも、什麼^{なに}をか作さん、石霜以外に幾千百人あつたからでも到底斯うは働けぬぞと重ねく、の稱揚である。雪寶^{せつほう}着語して云く、蒼天^{そうてん}蒼天^{そうてん}、これは申すまでも無い天を仰いて歎き悲む姿であるが、此の着語は次の正に好し力を着るにとある。漸源の語の次に在るべきであるのを、誤て此へ入れたのである。と云ふことである。と云ふ雪寶は何を其う悲しんだのであらうぞ、先師の靈骨^{りやうこつ}を覓めることが出来ないと云ふのを

貫ひ泣したので有らう、道吾の遷化を今更に悲むのであらうか、又漸源が覓むべからざる靈骨を覓めるのを悲むのであらうか、或は又蓋天盖地悲歎の一枚で呵々大笑と同一致でもあらうか、國悟は太遲、生と言ひ賊、過後の張弓と言ふ、皆今になつては後の祭り六日の菖蒲十日の菊ぞと抑へたのである、又好したために、一坑に埋却するに、道吾も石霜も漸源も雪竇も今は皆同罪であるぞとの意であるが、國悟も亦た免がれまい、源云く正に好し力を着くるに、先師の靈骨は覓められぬと言はれるなら、愈々これから更に一段の力を入れて勵まねばならぬぞと言ふ、着語に且く道へ、什麼の處にか落在す、此の漸源が力を着くると云ふは結局何うすると云ふことであるぞとの撝着、先師會て、爾に向つて什麼とか道し、先師の言葉をお忘れはしまし、イヤ先師を打たことも覺えて居らうかと言ひ、這の漢頭より尾に到り直に如今に至るまで出身することを得ず、まだ力を着けるの着けないのと言ふて居るか、抑へる、太原の孚云く先師の靈骨猶ほ在り、太原の孚上座と云ふ人は雪峰の法嗣て亦た一方の大善知識である、曾て此の公案を評して道吾禪師の靈骨は確かに在るぞと言ふた、近くは石霜もよび漸源が今日此事あるを隨喜し、遠くは本源自性の法身

舍利は普天卒土に充滿して居るを證明したのである、着語に大衆見るや、太原が猶ほ在ると云ふが、一同に見たかと注意し、イヤ其形は閃電に相似て蹤跡を見留められないと自ら答へ、又是れ、什麼の破草鞋ぞ、其の靈骨とか云ふものは塵塚へても棄てるが好いぞ、結局太原の評は猶ほ些子に較れり、到底十分では無いぞと抑へた。

頤兔馬有角

斬○可○然○然○特

牛羊無角

斬○成○什○麼○樣

絕毫絕

我○天○上○下○唯

如山如獄

在○什○麼○處

黃金靈骨今猶在

向○一○邊

無處着

只○恐○無○人○識

白浪滔天何處着

放○過○一○着

無處着

果○然○沒○講○深○坑

歸曾失却

祖○不○了○累

無處着

眼○裏

隻履西

兔馬に角あり、兔や馬には元來角の無いものと思ふたに今は角があると云ふ、棺の中に入れて居る者は元來死人であると思ふたに、生とも也、た道はす死とも也、た道はすである、着語に斬とある、其角を一刀に斬り棄てしてしまふた、又可、慙、奇特と言ひ、可、慙、新鮮と言ふ、兔馬に角があるとは實に珍らしいては無いか、遂に是れまで聞いたことのない話であるぞと言て、佛法は凡情を以て解すべからざることを明かす、

牛○羊○角○なし○牛や羊には元來角のある者と思ふたに、今は角が無いと云ふ、生とも也た道はす死とも也た道はすてある、着語に又斬とある、其の無い角をもボキリと斬り落すぞと言ふ、什麼の模様をか成す、其の角のない牛や羊は如何なる姿のものであらうぞ參究して見ると坐下への注意と見える、別人を瞞ずることは即ち得ん他人はイザ知らず此の圓悟は其のやうな言句に欺むかれはせぬぞ、毫を絶し、釐を絶すとは長空萬里一點の雲をも留めない無相無形の有様、毛ほどのものも見るべきは無いと本體の無限にして平等、元來生死に涉らない姿を示された、着語に其れが即ち天上天下唯我獨尊の境界で第二人は無いぞ、然るに、爾は什麼の處に向てか摸索する、若し此の絶對無限の處に於て生だの死だのと摸索して居ることであつたならば、萬劫にも歸家穩坐することは出来ぬぞと坐下へ警誡される、果して然らば終に一物の見るべき無きかと云ふに、山の如く、嶽の如し、歷々分明に誰にも見える此の峨々たる山嶽および彼の洋々たる江海、これ皆かの絶毫絶釐底の模様であつて、絶毫絶釐が其儘に如山如嶽である、これは何の不思議も奇特もない、朝夕夕夕に誦て居る、般若心經に色即是空々即是色と聞き飽きて居る道理であるけれども、其

れが實地に自己の生死問題になれば幾んど別事の如くなるものであるから、生か死かの間に煩悶することになるのである、圓悟は其の山嶽が什麼の處に在ると言ふて坐下に注意し平地に波瀾を起すやうな餘計なことを言ふなと雪竇の口を塞ぎ更に其の山嶽が爾の鼻孔に、堅着す其れが見えぬかと重ねて參學の者に擧示せらる、これ道吾の道はす道はすを頌し了りて、第五句以下は石霜と太原との語に就て語はれた、太原は黄金の靈骨今猶ほ在りと云ふけれども、石霜は白浪滔天であると言ふ、其靈骨を何の處にか着けんやつと堀り出した靈骨を何處へ置いたものであらうぞと言ふ、これを前の第三句第四句に照し合せて見れば、山の如く嶽の如きものを絶毫絶釐の處へ何う据え附けたものであらうぞと云ふたやうなものである、畢竟は滔天の白浪そのまゝが黄金の靈骨であつて、黄金の靈骨が白浪となつて滔天する、此間に着けるも着けないのと云ふ論量は無いのである、然るに之を言句に出せば早く已に第二第三に落ちるのであるから、圓悟は舌頭を截斷し、咽喉を塞却せよと叱り、一邊に拈向せよ、其の靈骨を何處ぞの隅へても片つけて置けと言ひ、只恐らくは人の伊を識得すること無からんことを、到底其の靈骨を靈骨らしく

始末をつける者はあるまいぞと吾人を警醒せらる。又次の句の着語に、一着を放過す何の處にが着けんと丸出し言ひ放つたは、少し放行に過ぎやうぞとの意、脚跟下に蹉過す、脚下も頭上も悉く白浪滔天であるに、何の處にか着けんとは一步踏み違へたぞと抑へ、眼裏裏着くことを得ず元來滔天の白浪は法界徧滿であるから眼見耳聞の及ぶべきでは無いと言ふ、そこで雪竇は例の如く壘み返して着くるに處なしと愈々本地の風光を示し、道はず道はずの真景を一句に書き出だした、圓悟が果然、そうくるであらうと思ふて居たと言ひ、却て些子に較れり、これこそ少しは價值があると言ひ、しかし雪竇も到頭身動きのならない處へ陥つてしまふたぞと讚歎した雪竇は更に其の着るに處なき様子を古人の例に求めて、雙履西に飯て會て失却すと謠ふた、これは言ふまでも無い達磨大師は支那に於て死なれたのを熊耳峰へ葬つたと思ふて居たに、雙履すなはち片方の靴のみ、壘の中に遺して置き、片方の靴を携さへて印度へ歸つたと云ふことであるが、然らば其の印度に達磨が居るかと言ふに、誰ありて遭ふた者も無い遂に其の行衛が分らない、結局生とも道はれなければ死とも道はれない、今も丁度其のやうなものよと故事を引て結んだ

のは、文句の上の話である、要する所は宇宙の眞理實相は彼れの此れのと考へることも出来ねは云ふことも出来るものではない、謂ゆる言語道斷心行所滅である、其れを今は着くるに處なしと言ふたまでのことぞ、着語に祖禰了せざれば累兒孫に及ぶ、元來初祖の達磨が死なやら生きて居るやら分らないに依て、其の兒孫の道吾も石霜も漸源も雪竇も皆此の通り路頭に迷ふのであるぞと讚歎し盡した着語である、更に打て、云く、什麼として、か、這裏に、在ると、圓悟は例の本分の正令を行て雪竇は會つて失却すと言ふが、其の失却したものが何ういふわけて我が手裡に在るのてあらうか、これは只圓悟の手裡のみては無い、人々各自皆その手裡に握つてあるはずであるに、何故に其れを自由に受用することが出来ないのてあらうぞ。

第五十六則 欽山一鏃破三關

垂示 諸佛不曾出世。亦無一法與人。祖師不曾西來。未嘗以心傳授。自是時人不了。向外馳求。殊不知自己脚跟下。一段大事因緣。千聖亦摸索不着。只如今見不見。聞不聞。說不說。知不知。

從什麼處得來。若未能洞達且向葛藤窟裏會取試舉看。

諸佛會て出世せず亦た一法の人に與る無し世人は多く三千年前に印度に出世して十九の時に出家し八十の時に入滅した釋迦其人の如き者のみを佛と思ひ又其の釋迦が一代五十年說法して謂ゆる五時八教の如きもののみを法と思ふて居ることであるが其れは佛法の影法師に過ぎぬ眞の佛法は出世して説示するには及ばぬ説示しないでも山は自ら高く出世しないでも水は自から深い譬へばニュートンの出世せんでも引力は宇宙間に活動して出て何の不足も無いやうなもので祖師會て西來せず未だ嘗て心を以て傳授せず世人は多く千三四百年前に天竺から支那へ來た碧眼胡僧の達磨其人の如き者のみを祖師と思ひ其の達磨が直指人心見性成佛と言ふたやうなとばかりを禪宗とか佛心宗とか思ふて居るが其れは祖道の影法師に過ぎぬ眞の祖道は西來して傳授するには及ばぬ西來しないでも三年に一聞あり傳授しないでも雞は五更に向て鳴く譬へばワットが發明しないでも蒸氣力は宇宙間に活動して居て何の不足も無いやうなものを然るに自ら是

れ時人了せず外に向つて馳求す何ぞ別段に佛法とか祖道とが云ふものが外に有て其れを釋迦とか達磨とか乃至師匠とか知識とか云ふ人たちから説き聞せてもらはねば解らぬもの傳授してもらはねば悟れぬものやうに思ふて此れの彼れのと煩悶して佛を求め祖を求め殊に自己脚跟下一段の大事因縁は千聖も亦た模索不着なることを知らず一大事因縁といふことは法華經に釋迦如來が我は一大事因縁の爲めに世に出現すと言はれたのが本據であつて其の一大事と云ふは一切衆生を佛の知見に開示悟入せしむると云ふことであるさて又其の開示悟入の結果はと云へば謂ゆる生死即涅槃煩惱即菩提の家郷に歸り得て自在無礙に各自の本分を盡すに在るのであるから此れは本より他人の事では無い人々各自に寝たり起きたり食たり被たり笑つたり泣たりする上の事諸佛が出世して説示してくれないでも互ひに眼に色を見て耳に聲を聞くに不自由は無かつた祖師に傳授してもらはないでも手に在て執捉し足に在て運奔するに不便を感じたことは無い然るに其の本源如何と願みるに至つては茫然として自失するそこで外に向つて馳求することにもなるのであるが結局これは千聖も模索不着て如何に

大慈悲の佛でも祖でも他人の鼻の孔へ呼吸を通じてやることは出来ぬ、亦た他人の舌を借りて已れの食物を味はふことも出来るはけのものでは無い、只如今見不見聞不聞説不説知不知什麼の處よりか得來ると自己に返照して見るより外は無、此の見不見聞不聞等の語を古人が色々讀んで居る見れども見えずとも讀めば不見を見るとも讀み、又は見即不見の義にも見て居る、其他に種々の訓もあるけれども、今は見るとか見ないとか聞くとか聞かぬとか説かぬとか知るとか知らぬとか云ふことは畢竟何處から來るのであるぞと、即ち摸索不着底の本源を參究せしめやうとの意であらうと思ふ、若し未だ洞達すること能はずんば已むを得ぬに依て且く葛藤窟裡に向つて會取せよと本則を徴して試みに擧て看よ。

本則 舉良禪客問、欽山、一鏃破三關時如何、不助奇特。山云、放出關中、主看、時而來也、也、要、天、家、良云、恁麼則知過必改、已、機、而、作、山云、更待何時、有、候、有、疑、良云、好箭放、不着所在、便出、果然、山云、且來關黎、呼、則、易、道、則、難、良回首住、中、也、山把住、云、一鏃破三關、

即且止、試與欽山發箭看、波、口、裏、橫、身、良擬議、果然、機、索、不、着、山打、

七棒云且聽這漢疑三十年、正、尾、正、良禪客といふは巨良と曰ふ人て一時に名を知られた作家であつたそなたが傳燈

録には其傳が見えぬ、尤も此の本則の因縁は傳燈録にも佛祖宗派圖にも載せられてある、欽山といふは洞山悟本禪師の法嗣で、澧洲欽山の文遂禪師のことである、或時に巨良和尚が欽山禪師に見える因み、鏃に三關を破る時如何と問ふた、目的の處へ到達するまで三箇所の關門がある、其れを一筋の矢て一時に射破つてしまふには何うしたものて有らうぞとの問である、一念に三大阿僧祇劫を起ゆるとても、一心に三觀を貫ぬくとても、一句に三句を透るとても、一棒に三世諸佛を殺すとて、もいづれにしても階級を経ずに自分の田地に到らうと云ふのである、圓悟が嶮と言ふ、其のやうな戦ひを欽山に挑みかけるのは誠に危險ぞ、然かし其の志氣は妨げず奇特であるのみならず、此れは中々に妨げず、是れ箇の猛將で、餘程奮參の作家と見えるとほめた、山云く、關中の主を放出せよ、看ん、三關を破るのが目的ではあるま

い、先づ其の關中の主人公は誰であるぞサアこゝへ出して見ろ、着語に劈面來也。それ關中の主が眼の前にといふアンバイ也、た、大家の知らんことを要す、大家とは參學の諸人をさす此れは良禪客ばかりのことでは無い、誰も彼れも關中の主を知らなければならぬぞとの注意、主山は高く、按山は低し、主山按山は前の山と云ひ後の山といふも同じこと、高いもあれば低いもある、此れが即ち關中の主の寫眞であるぞと圓悟が出て見せたのである、良云く、慙麼なるときは即ち過を知て必ず改めん、ハイ、左様で御座るか、左様ならば拙者の射かたが悪いのでありましたから追て復た射直しませうと戰場を退ぞいた、着語に機を見て作すとある、欽山の機鋒の容易ならぬを見て取り更に陣を立て直そうとする様子ぞ、けれどもモ、已に第二頭に落在して居るから、第一機に戻ることは出来ないぞと云ふ、山云く、更に何の時をか待たん、ナニ過ちを改めると言ふて退ぞくか、其れは何時改めるのであるぞ、即今直下に何とか働らけぬから逃げる敵を逐ひかける、着語に擒あり、縦あり、サスガ欽山の手兵を操縦する策略は巧みなものであるとほめ、更に風行けば草偃す、此の欽山の威風には誰でも屈伏せねばなるまいと言ふ、良云く、好箭放つて所在に着せ

ずと言ふて便ち出づ、惜い一矢であるが思ふ的に中らないから止めやうと、惡まれ口をきながらサツサと出て往てしまふた、着語に果然、到頭射損じてしまふた、翻款を待たんと擬する、か前には過ちを改めると云ふたては無いか、然るに其様な失禮なことを言ふは豫審の申し立を公判で翻覆しやうとするのか、第二棒は人を打てとも痛からず、其んなこと何うして欽山を勘破することが出来るものか、果して山云く、且く來れ、關黎マア、待て、チヨツと此へ來いと聲をかけた、着語に呼ぶことは、則ち易く遣ふことは、則ち難し、譬へば獅子や虎を狩るやうなもので、餌を以てなりとも餌を置いてなりとも呼び寄せるとは容易に出来るが、若しも其の獅子や虎を擒り損なふた時になつては、モ、何處へなりとも往てくれと云ふても、中々さきで承知しまいぞと欽山にからかふたのである、さて又良禪客を喚び得て、彼れが首を回らしたとしても、什麼を作すに堪えん、若しも彼れは眞の禪僧であつたらば、喚ばれたからと云ふて戻るはずは無し、若し亦オメと戻るやうなものであるならば、全く不啣の漢であるから、喚び戻した効もなからうぞと云ふのである、良首を回すも着語に果然、として、把不住、イヤ、ハヤ、良禪客は到頭關中の主人公

を取り遁かしてしまふたぞと抑へ中れりこれは欽山の喚び戻し策が上出来であつたとほめた山把住して云く一鏃三關を破ることは即ち且く止め試に欽山がために箭を發せよ看ん欽山ヤオラ良禪客を引捉へて一矢に三關を破るなどと云ふ空論よりもサア此の欽山を一矢射て見ろ言句を吐くとも翻筋斗をするとも打つとも喝するとも何とても働いて見ろと誠に單刀直入の勢ひで迫られた着語に虎口裏に身を横たふ良禪客の生命は一刹那の間に決することになつた逆水の波て之を順流させることは到底むづかしいぞ義を見て爲さざるは勇なきなり斯くありてこそ欽山は眞に義勇の名將であるとの讚歎じや良擬議すサスガの巨良和尚も此に至つて窮し畢つた先刻いくら喚ばれても首を回らさずに耳を掩ふて去れば好かつたに果然として摸索不着となつた圓悟は遂に本分の令を行して打て云く可惜許エー惜いことをと叱る山打つこと七棒して云く且く聽す這の漢疑ふこと三十年ならんと此れが欽山自から關中の主となつて敵軍を平定し天下を一統して再び叛旗を掲げる者のないやうにとの勅令を下したのである着語に令まさに恁麼なるべし必ず其うなければならぬぞと言ふ實に欽山の作略は始めあり

終りありと賛歎し又頭も正しく尾も正いと稱揚し遂に遺箇の棒は冷に是れ欽山の喫すべかりしと言へり若し彼の良禪客が眞實舊參の作家であつたならば疾に欽山を打つべきはづであつたにと云ふのである此の公案は畢竟關中の主權を争ふたのであるが幾分衝天の志氣を逞くして高尚幽玄なる議論をしても一鏃の三關のと二物を見て破るの破らぬのと對待に滯ふつて居ては實地に當つて大失敗を取ることは是の如くに至らざるを得ぬのである吾人お互ひに反省せねはならぬ所ぞ。

頌與君放出關中主中也○當頭退後放箭之徒莫莽鹵一死不再活○過了取

箇眼兮耳必聾左眼半斤○放過一着捨箇耳兮目雙瞽右眼八兩○只得一路則

不見打劫去也可憐一鏃破三關全機恁麼來時如何的的分明箭後路打劫去也君

不見打劫去也可憐一鏃破三關全機恁麼來時如何的的分明箭後路打劫去也君

君が爲めに放出す關中の主サー、參學諸君の爲めに關中の主人公を出して見せ
 るぞ、射そこないやうに矢を放つて見ると言ふ、圓悟が先づ第一箭を放つてソレ中
 かつたと言ふ、又當頭に蹉過す、關中の主は關中に在てこそ貴きに、已に放出しては大
 間違ぞと抑へた、退後、退後、これは警蹕の辭で、昔し將軍または諸侯など通行の時に
 下に居れ下に居れなどと云ふて道路を警戒したものである、今も關中の主の通
 りであるぞ、近寄て無禮をするなど圓悟のよしやれてある、放箭の徒莽鹵なること
 莫れ、參禪學道の人は苟且にも此の主人公を射はづしてはならぬに依て、慎密の上
 にも慎密に勇猛精進に實修實證せねばならぬぞと言ふ、着語に「死、再活せず、若し
 も一步を誤つたならば天地はるかに隔たることになるぞ、これは誠に大誦訛て容
 易に辨じにくい所である、と云ふて居るうちにハヤ過ぎ了れり、關中の主は何處へ
 か見えなく成つた箇の眼を取れば耳必ず聾す、其の箭の放ちかたの難しさは、眼が
 を取らうとすれば耳が聞えなくなると云ふやうなわけで、一方へ片寄ればハヤ的
 外れる、着語に「左眼半斤、右眼半斤、一斤には半分足らない、一着を放過す、雪竇餘りに説き立
 て、老婆心に過ぎ、本分に契はぬぞと抑へた、一方へ片寄れぬに依つて、左邊にも前ま

す右邊にも後れずてなければならぬ箇の耳を取れば目双べ替す、これは前と反對
 て前は眼を取れば耳が聾すとあつたが、此れは耳を取れば目が障れると言ふ、要す
 る所は取るも捨るも皆旨聲の原因である、三祖大師が至道は難きなし唯揀擇を嫌
 ふ、只憎愛なければ洞然として明白と言はれたのも、全くこの道理である、纒かに
 取捨に涉つて憎愛とか好悪とか云ふ心があつたならば、關中の主人公を見ること
 は決して出来ぬ、着語に「右眼八兩、左眼も半斤、此の右眼も八兩をなほち
 半斤、一斤には半分足らない、けれども此に只一路を得たり、己に耳も聾し眼も瞎
 すれば、始めて二邊に涉らず取捨を離れたる所の一線路が開けたぞと云ふ、進前す
 れば坑に墮ち、進に落つ、退後すれば猛虎脚を銜む、此の兩邊を超過して始めて關中
 に入り主人公を見ることの出来る様子は、浄土門の二河白道の譬喩のやうである、
 憐むべし、一鏃三關を破る、良禪客の此の一間は誠に參玄の要路であるに依て、眞に
 愛すべきであるぞと言ふ、着語に「全機恁麼に來る時、如何彼の良禪客の一間は未だ
 全機を呈し來つたとは思はれぬが、若しも此に滿分の活機を全提し來つて斯う問
 ひかける者があつたならば、諸人は何と働くぞと坐下への抄着と見える、什麼と道

ふぞ是れは雪竇に向つて、何を愛憐すると言はれるか、圓悟は不審に思ふぞ、破や墮や、其の三關は疾に破墮したつたと言ふ、的々分明なり、箭後の路ナゼ彼の一鏃破三關を愛すと云ふかといふに、彼の一矢で箭路が能く分つたに依て、後來飯宗だの同安だのが色々論評して、參玄の衲子に關中の主を射とめさせるやうに成つたと言ふ、着語に他人の箭路を尋ねて矢を放つやうな者は死漢であるぞと罵る、咄と此れも箭後の路を咄破する、打て云く、遠て見るや、此の打たのは圓悟が一矢を放つたのである、諸人其の箭路が見えたと云ふ、君見ずや、着語に癩兒、伴を牽くと、雪竇が古人の語を引くのを賛し、又葛藤を打し去る、餘計なことをと評す、玄沙言へることあり、此れは其實は飯宗禪師が先きに言はれたのを後に玄沙和尚が擧揚したのてある、そらな、着語に那箇が是れ、玄沙ならざる、何も事々しく玄沙言へることあり、などと言ふには及ばない、誰でも好いては無いか、大丈夫は天に先ちて心の祖と爲ると、世上の通例には天を以て萬物の始と爲し、又心を以て萬法の源とまて居る、あるが今は其の天に先ちて其の心の祖と爲ると言ふ、此れが即ち關中の主の最尊無上なる所以である、着語に一句截流して、萬機寢削す、此れは只此の一句に都べて

の衆流を截断して其本源に徹し、萬機すなはち凡聖も迷悟も善惡邪正も智慧貴賤も皆悉く其の沙汰は止んでまゐると言ふ、ナゼかと云ふに、衆流萬機は皆彼の天地ありての後のことであり、又心の子孫であるからである、鼻孔我が手裡に在り、まかし如何に大丈夫でも其鼻づらは此の圓悟が捉へて居るぞ、其うて無くては關中の主とは言はれないと、圓悟が關中の主を獨占してまゐるが、未だ天地世界あらざる以前に、什麼として安身立命したものであらうぞ、其れが出来さへすれば圓悟の鼻孔を各自の手に任せることも出来る、と云ふものである、此の着語は學人に向つての撻着と見える。

第五十七則 趙州至道無難

垂示云。未透得已前一似、銀山鐵壁。及乎透得了、自己元來是鐵壁銀山。或有人問、且作麼生、但向他道。若向箇裏、露得一機、看得一境、坐斷要津、不通凡聖、未爲分外。苟或未然、看取古人。

様子。

未[○]た透[○]得[○]せざ[○]る。已[○]前[○]は一[○]に銀[○]山[○]鐵[○]壁[○]に似[○]たり。宇宙の全真を悟り得ない前に在ては萬事萬物皆悉く疑團の種て煩悶苦惱を免かれぬ有様譬へは銀山鐵壁の攀ぢることも登ることも出来ないやうなもので彼の宋の東坡が廬山烟雨浙江潮未到千般恨不消と云ふたもこの様子を謠ふたのである然るに透[○]得[○]し[○]了[○]る[○]に及[○]ては自[○]己元來是れ銀山鐵壁なり已に宇宙の全真を悟り得て見れば自己の當躰この儘に宇宙の全真であるに依て謂ゆる天上天下唯我獨尊て三世の諸佛も歴代の祖師も我に向て手を着けることも口に出すこともならぬ即ち我か身心直に是れ銀山鐵壁である彼の東坡が前の二句に續けて到[○]得[○]還[○]來[○]無[○]別[○]事[○]廬[○]山[○]烟[○]雨[○]浙[○]江[○]潮[○]と謠ふたは此處の味である或は人ありて其自己元來銀山鐵壁の様子は作[○]麼[○]生[○]と問ふ者があつたならば但他に向て道はん箇裡に向て即ち此の本則の至道さらに通俗に言へは宇宙の眞理に於て其の眞理を一機の上に露し得[○]または一境の上に看得する即ち見るにつけ聞くにつけ寝るにも起るも語黙も動靜も其儘に眞理の全體を提

さけ至道の妙用に契ふやうになりさへすれば要[○]津[○]を坐[○]斷[○]して凡[○]聖[○]を通[○]せ[○]す生死を脱して涅槃に到るとか煩惱を斷して菩提を證するとか云ふ所の此岸彼岸を二つに見る階級的の法門などは皆こと／＼排ひ除いて凡夫だの聖者だのと云ふ名もない處に到り得ることも容易であるから未[○]た分[○]外[○]と爲[○]さ[○]ず其れが決して身分不相應の事とは言はぬ別に不思議のない當然のことと云ふものであるけれど苟[○]し或は未[○]た然[○]らずんば古[○]人[○]の樣[○]子[○]を看[○]取[○]して審[○]細[○]に參[○]究[○]せぬはならぬぞ其のよ手本には尤も好い公案があると云ふので本則を引き出した。

本則 舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇如何是不揀擇道無難唯嫌揀擇僧云此

猶是揀擇果然證他釋了也州云田庫奴什麼處是揀擇山崩僧無語僧云此

目録口直得

或る僧が趙州すなはち觀音院の從諗禪師に問ふた至道無難唯嫌揀擇と云へり如何なるか是れ不揀擇この至道無難唯嫌揀擇と云ふ語は曾て三祖鑑智僧璨大師の

作られた信心銘の冒頭の二句である、其れを趙州和尚が毎常拈提しては人に示されたので、已に前の第二則に其示衆に就ての問答を擧げられてあつた、此僧も其れを知て居て、其の謂ゆる揀擇を嫌ふと云ふ言葉を捉へ、何故に揀擇しては悪いかと突込み、趙州が何と答へても其れもヤハリ揀擇では無いかと突かゝる考へと見える至道と云ふは至極の大道と云ふことと即ち宇宙の真理である其れを吾人の朝な夕なに實行すると云ふことは、無難すなほち何も困難なことでは無い、實に容易なことである、火が物を焼くに何の困難がある、水が物を濡らすに何の難澁なことがあらうぞ、けれども若しも火が炭や薪に向つて其の木は好きだとか此の炭は悪いとか擇り嫌ひをしたならば、決して火の本分を全くすることは出来ない、水で物を洗ふときに其の衣服は美人の肌着であるから奇麗に洗つてやらうの、此の股引は監獄の囚徒が穿いたのであるから御免を蒙むると云ふやうなことは言はない、吾々互ひも其通り縁に隨ひ法に任せて任運放曠に、何事にも揀擇する所さへ無かつたならば、天下泰平國土安穩て何の苦勞も無いのである、然るに其の揀擇しなると云ふことを理窟では直に分るが、實地に就ては無難どころか中々に困難で

あるから、此の如何なるか是れ不揀擇と云ふ問題が誠に大切なことになる、着語に這の鐵蒺藜、多少の人呑むこと得ず、これは容易な問題では無いぞと言ふ、大に人の疑着すること有る在り、此の疑問は今に始めぬこととて此僧のみには限らない、満口に霜を合ひ、これは中々誰にも容易に説き得ることが出来ぬ、州云く、天上天下唯我獨尊、十方法界に充滿して都べて對待するものは無い、此れが即ち無難の至道に揀擇を絶した姿である、着語に平地上に骨堆を起す、其のやうなものを平地上に持ち出されては往來の邪魔になるぞと、抑へるやうな語を以て趙州古佛の機鋒英邁を讚歎した、衲僧の鼻孔、一時に穿却す、垂示に謂ゆる要津を坐斷して凡聖を通せざる處であるから、誰ありて手も口も出しやうは無い、金剛もて鐵券を鑄る、これは開不得と云ふ意味の俗諺であるやうな、一鉢に鐵券と云ふは確實なる證據と云ふことであるに、しかも其れを金剛で作つたとしては、固いが上にも更に堅いと云ふことである、僧云く、此れ猶ほ是れ揀擇、この僧は最初から此れが言ひたいので、此の問答を始めたのであるから、こゝぞと思ふて突かゝつた、着語に果然として他に隨て轉じ、了れ、此僧は最初より言葉咎めを得意として居るのであるから、唯我の我の字

も我他彼此の私の字と見え、獨尊の尊の字も貴賤尊卑の尊の字に見えるので、斯のやうなことを得意らしく言ふのである。しかし這の趙州老漢を抄着したつもりであらうが、州云く田庫奴什麼の處か是れ揀擇ぞと叱りつけられた、田庫の庫の字は舍の誤りて即ち田舍奴と云ふは讀て字の如く、東京の人などが輒もすればコノ田舍ものメがと人を罵しるのと同じこととて、無智蒙昧の人を叱る言葉である、即ち今も趙州が江戸ッ子のベラボイメ調子で、何だは此の田舍ッボイめ何處が揀擇だとぬかしやゝがるンだと言ふやうなアンバイ着語に、山崩れ石裂く實に恐ろしい勢ひぞとほめた、僧無語サスガに言葉答めの博士先生も、到頭こゝて閉口してしまふた、國語が備に三十棒を放すと誠に有り難い御賞典である、直に得たり目瞪口呆することを、これは僧がびつくりして一言も出し得なかつた有様の形容である、然るに風外老人は此の田舍奴と唯我獨尊と是れ同か是れ別か、田舍奴と言ふたのは褒めたのか、謗つたのか、之を兩極となし去る者が多いであらうが、若し此僧が眞の作家であるならば、此の田舍奴と言はれた言下に、眞に天上天下唯我獨尊と言て禮拜せねばならぬ所ぞと言はれた實に審細に參究すべき點である。

頌似海之淺 如山之固 蚊蟲弄空裏 猛

風也有意底○果然不レ 蝮蟻撼於鐵柱 同坑無異土○且得沒抄 揀分擇分 頭水河

趙州來也 當軒布鼓 已在言前 一坑埋却 如

初めの二句は趙州古佛の定慧圓明にして機轉宛轉無礙自在なること、到底窺ひ知るべからざる様子を讚歎した、即ち其の深きことは海の深きに似たりとある、着語に是れ什麼の度量ぞ、淺いの深いのと比量するは何事ぞと答め、其實は淵源測り難し海に喩へたも未だしぞと言ひ也、た未だ一半を得ざる、こと在り、機かに半分ほどにしてか當らないと言ふ、これ等の着語は皆無難の至道を標準として言ふのであると云ふことを忘れないやうにせんければならぬ、其の固きことは山の固きが如し、八風吹けとも動せず巍然として雲間に聳ゆるやうなものぞと言ふ、着語に什麼人が撼かし得心如何なる、禪僧であつたからても、此の趙州老を動かすことが出来るものか、故に今山の如しと稱したのも猶ほ半途に在り、到底十分の讚歎には當らないと言ふ、次の二句は彼の僧が此の趙州老を勘驗しやうと謀つた愚かさを、誠しめ

る。蚊○蟲○空○裏○の○猛○風○を○弄○す○。虻○や○蚊○は○風○の○な○い○に○時○を○盡○々○と○飛○び○廻○る○こ○と○も○出○來○
やうが、空裏の猛風に出あふたならば、何處の梵天國へ吹き飛ばされてしまふか知
れたものでは無い。着語に也、た、恁麼底あり彼の僧の如き實に其通りである。果、然、と
いて力を料らす、己れの分量を知らないにも程があるぞと誠める。可、愍、自、ら、量、ら、す、
異本には可愍を可笑にしてある。其れならば彼の僧が己れの力を量らないで大敗
北したのが可笑と云ふのであるが、左もなければ前の着語を別語を以て重ねたま
てのこと、無くても好いと思ふ。螻○蟻○鐵○柱○を○撼○か○す○。これは只蚊蟲を螻蟻に改め猛風
を鐵柱にしただけのこと、全く同じ意味のことを對句にしたまてのこと、螻蟻
の龍車と云ふも同じで、字句の意も亦た辨ずるまでも無い。故に着語にも同坑に、異
土なしと言ふた、且得沒交涉かの田舎奴が螻蟻の身を以て趙州の鐵柱を撼かそう
としたのは、實に沒交涉で木に竹を接がうとしたやうなものよ、閩、黎、他、と、同、參、閩、黎
とは雪竇をさしたので、今も前が海に似たとか山の如くだとか言ふて居るのも、大
抵彼の僧の道つれらしいぞと、雪竇を抑へたやうに言ふて吾々に語句を離れさせ
やうとの慈悲であるさて次に結末の二句は雪竇餘才を弄して活句を呈した、揀、た

り○擇○た○り○軒○に○當○る○布○鼓○。彼の僧の重荷らしく擔ひあるく所の揀擇、其の揀と云ひ擇
と云ふ、其れが其の儘に至道の當鉢で、言語道斷心行處滅の布鼓であるぞと言ふ、布
鼓といふは布で張つた太鼓といふこと、幾ら打ても鳴らないものと定つて居る、
今此の無難の至道も其の通り、幾ら擔き廻つても言詮を以て落着することの出來
るものには無い、畢竟揀擇だの不揀擇だのと云ふは皆其人に在るので、第二則の所
で現に趙州老が事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了りて退けと言ひ、其れを雪竇
が頷して揀擇明白自ら看よと言ふてある。又此の次の第五十八則をも參考して
審細に工夫すべきである。着語に、水、を、擔、ふ、て、河、頭、に、賣、る、。これは言はずも知れたこ
とよと云ふ意味、河端へ水を賣りに往つたからでも誰が買ふものか、什麼と道ふぞ
元來言句を離れたことを、揀たり擇たりなど、言ふは何事ぞと抑へ、趙州來也、其の
揀擇即至道を唱へる調子は趙州老人ソツクリぞとほめ、布鼓の下に己に、言前に、在
り、これ、も、疾、から、知、れ、さ、つ、た、こ、と、よ、と、い、ふ、意、味、一、坑、に、埋、却、せ、ん、趙、州、も、雪、竇、も、色、々
と面倒なことを言ふて人に迷惑をかける、二人ともに一つ坑へ活埋にしてしまは
ふぞ、麻の如く粟に似たり、此の着語はこゝに用がない、現に異本には書て無いので

あるから刪るが好いと云ふ説がある、打て、云く、爾が咽喉を塞却すこれて誰も何とも言へない、即ち布鼓の當鉢があらはれた。

第五十八則 趙州時人窠窟

本則 舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇。是時人窠窟否兩重公案〇

州云曾有人問我直得五年分疎不下直〇胡孫喫

有踏者秤鐘硬似鐵〇猶有這箇在〇莫以已妨人

これは垂示が無くて直に本則じや、雪竇が趙州の至道無難に關する公案を拈提すること、これにて三回である、餘程此話に興味を持って居られたものと見える、僧あり趙州に問ふ至道無難唯嫌揀擇と是れ時人の窠窟なりや否や、此僧は中々の舊參であつて、常々に趙州和尚が動もすれば此の至道は難きこと無し唯揀擇を嫌ふと云へる、此の三祖大師の語を拈提して人に示される所を捉へ其う屢々同じことを言はれるのを見れば、或ひは和尚が此の窠窟に陥入て居るのでは無いかと突き込んだのであるが、サスガに和尚がとも言へぬからワザと餘處くしく時人すなはち當

時の世の人たちがとは言ふたけれども、其實は直に趙州和尚の攻撃に掛つたのである、窠窟といふことは今さら申すまでも無いが、すべて何事でも一方に片寄つて住着する處があれば、菩提も涅槃も佛界も悟道も皆窠窟である、苟くも窠窟に落ち入れば其のために束縛されて自由を得られぬことは、煩惱生死に束縛されたのも菩提涅槃に束縛されたのも、溺死と焚死との違ひほどのこと、命の無いと同じことである、然るに若しも趙州和尚が幾ら三祖大師の金言であるからと云ても、至道無難の窠窟に陥入て居るとあつては、七百甲子の老古佛の金箱が剝けてしまふ、趙州が之に對して何と答へられるか、誠に天下人の耳を傾けて聞かんと欲する所である、着語に兩重の公案、これは己に前則で済んで居るぞ、けれども也た是れ人を疑はしむる處、それが窠窟であるか無いかは別の疑問である、秤鐘に蹈着すれば硬きこと鐵に似たり、秤鐘は物の輕重を量るものであるから、いづれか一方に片寄らねばならぬ、今若し佛法の參究が其の秤鐘のやうに孰れなりとも、一方へ片寄つたとすれば即ち窠窟になるのであるから、硬きこと鐵に似て如何とも手が着けられぬ、不自由千萬なことになると云ふのである、猶ほ這箇の在る有りたとへ三祖が何

と言はうとも趙州が何ほど其れを拈提しやうとも要する所は這箇に在る然るに這箇の何たるを忘れて他人の言句にばかり付き廻るから斯のやうなことを氣に掛けて人に問ふてあるくのぞと此の僧を抑へた己を以て人に方らぶること莫れ己れが既に窠窟に陥入て居るに依て老趙州までをも疑ふて云ふは怪しからぬ奴ぞと叱る州云く會て人あり我に問ふ直に得たり五年分疎不可まことにハヤ平氣な答てサスが質問の僧も呆氣にとられて二度と口が開けなかつたと見える答話を通俗に言ひ換えて見ればハア其事かい先頃も其んなことを問ふた人があつたがナ其れから五年このかた未だ何とも返事が出来ないうといふ意味である分疎といふは俗に申し譯といふこととて其れが不下であるから申し譯が出来ないといふことであるこれは唯五年十年のことでは無い無始劫來未來永劫言詮を以て申し開きのつくべきことでは無い唯に趙州古佛一人のことでは無い三世の諸佛も歴代の祖師も口壁上くちやうじやうに懸けて言語道斷心行處滅である但これが若し徳山や臨濟または雲門のやうな人であつたならば或は棒喝を行し或は謂ゆる一句に三句を具すると云ふやうな鐵饅頭を食はせるのであらうけれども此の趙州老人はいつ

ても斯ういふアンパイにねま猫撫聲ねまで俗談平話のうちに佛祖の頂顛を蕩過すること
を言ふこれが即ち此老特得の家風である圓悟が面の赤きは語の直なるに如かず
問ひ詰められた時に赤面して引込むよりは正直に白状した方が好いと擲論した
やうに言ふて趙州の本分を開示せられた所を證明したのである胡孫毛蟲を喫ナ
これは猿が毛虫を食たやうであるといふ俗語で吞むことも吐くことも出来ない
と悪口を以て分疎不下を賛したのである蚊子鐵牛を咬むこれも前と語は異つた
だけで此の分疎不下の一句には誰も啄を容れることは出来ぬぞと稱賛したので
ある。

頌象王 嘔呻おうえん 獅子 哮吼せうこう 無味之談むみじのたん

西 烏飛兔走うひつうそう 塞斷人口さいだんじんこう 南北東

象王嘔呻これは趙州老人の度量廣大なる姿を頌したのである嘔呻は欠伸といふも同じやうなことであくびをすることらしいけれども今は象王がブーくと大

鼻息を吹き出す意味と見える彼の恐ろしい見あげるばかりの大象が太い足を踏み寄ばし長い鼻を動かして大息を吹き出す様子が、誠に能く趙州老人の平氣な面をしてシャー／＼と直に得たり五年分疎不下などと言ふて居る様子に似てゐると云ふのである。圓悟が富貴中の富貴であるとはほめ、又誰人か悚然たらざらん此の象王の嘖呻には誰でも驚き怖れるであらうぞと言ひ、更に好箇の消息いかにも言ふに言はれぬ面白い話では無いかとの讚歎ぢや獅子嘖呻。これは同じく趙州老人の風采を稱揚しながらも、象王の如く度量廣大なばかりでなく、其の機鋒峻峻の怖ろしさ加減を頌したのである。實に獅子は百獸の王であつて、三歳にして能く嘖呻すと云ふ、其聲を聞けば百獸皆畏服すると云ふ所から、如來の説法を獅子吼と言ひ、涅槃經には獅子吼品といふ一段があつて、其事を色々と言かれてある。今趙州の孤危峻峭なるも亦た其れよと稱揚したのである。着語に作家中の作家とほめ、又百獸腦裂すと言ふ、獅子の聲を聞けば如何なる猛獸でも皆其腦が破裂するほどに怖れると云ふことである。好箇の入路、今此祖道に參學する者も、是非一度は頭腦破裂の場合に至らなければ、到底本統の修行は成就せぬのであるから、此の獅子嘖呻を

聞くのが誠に好い入門の要路であるぞと言ふ、無味の談。サテ其の象王の嘖呻の如く獅子の嘖呻するに似たる趙州の一言一句は固より俗談平話であつて何の趣味も無いやうであるが、其の無趣味の處に即ち絶待の妙味があるのである。着語に相罵しることは、偏に饒す、皆を接ぎ無味とても無趣とても何とても罵しれと雪竇に抗するやうに言ふて、實は大賛成の意を表するのであるから、更に鐵櫃子に相似たり、此の無味の妙味を味はひ得る者は無からうと言ひ、又什麼の咬嚼の處があらん能く咬みしめると味が出るといふ俗諺もあるが、これは元來咬むことが出来ない、分疎不下五年強、一葉舟中載大唐、渺々兀然波浪起、誰知別有好思量、これは白雲守端禪師が此の本則を頌した偈であるから、圓悟の着語では無い、其れを此へ書き入れたのは後人の備忘でも有つたらうと思ふ、之を講釋して居ては長くなるから、預りにして置く。人口と塞斷すサテ其の無味の談が其儘に鐵櫃子であるに依て如何なる作家の稱僧も之に喙を容れることは出来ぬ、着語に相唾すること、は、你に饒す、水を潑げ、これは前の相罵の着語と對句で、唾を吐きかけるなら幾分てもきかけろ足らずば水でも潑げと、例の如く雪竇を抑へるやうに言ふての大讚歎である。噴

これも前に何處かにあつたが、フ、ンと冷笑つた姿で即ち圓悟が此の句に對しての機鋒である、闇、黎、甚、麼、と、か、道、ふ、既に人口を塞断したならば雪竇も前も何とも言へぬはずであるが何を言ふて居るぞと云ふ、南、北、東、西、これは空間的に無難の至道は無限であること言ふ、着語に有、り、や、有、り、や、ナニ東西だの南北だのと云ふ方角があるのかと咎めた天、上、天、下、イヤ天上も天下もあるぞと言ふ、蒼、天、蒼、天、イヤ何うも限りなく廣大なことよと長空を仰き見る姿、鳥、飛、び、兔、走、る、これは時間的に無難の至道は無限であることを言ふ、着語に古、へ、より、今、に、謂ゆる久遠劫來未來永劫に無始無終である一時に活埋せん、趙州も雪竇も餘りに至道の安賣りをする、二人とも活きながら埋め殺してしまへと、例の勦絶である。

第五十九則 趙州唯嫌揀擇

匡示該天括地越聖超凡百草頭上指出涅槃妙心干戈叢裏點定衲僧命脉且道承箇什麼人恩力便得恁麼試舉看。

天を該ね地を括り聖を越え凡を超ゆこれは至道の本體が無限の空間に充塞し無

限の時間を通貫して前則の頌に雪竇が東西南北鳥飛ひ兔走ると言れたやうな姿であることを語を換えて天を該ね地を括ると言ふた此の至道の本體は佛に在ても増さず衆生に在ても減らず一切平等一相であるに依て至道の上には聖者だの凡夫だのと云ふ名さへ無いさて其の至道の妙用を實地に運轉し得る本分の衲僧であつたならば百草頭上に涅槃妙心を指出し干戈叢裡に衲僧の命脈を點定す百草と云へは野や山にモサ／＼と生繁つて居て馬や牛の飼秣より外に何の用にも立たない誠につまらぬものと思ひ又涅槃妙心と聞けば佛祖の親しく面授相承したまへる尊きものゝやうに思ふのが即ち凡夫の妄見である然るに今至道の妙用を自由に働らかせる上に於ては其の何の價値も無いと思ふて居る百草が直に是れ涅槃妙心であることを人天に開示してモサ／＼した馬糧から大光明を放たせて見せる又干戈と云へは戦争の時人を殺す兇器であるとばかり思ひ命脈と聞けば泰平無事の間にはかり保てるものと思ふのが凡夫の妄見である然るに今至道の妙用を自由に働らかせる上に於ては其の人を殺す兇器を以て直に衲僧の命脈を點定して息災延命の境に安住せしむる活機用がある點定といふは何事にも

其れを確かに是れと推し定めることである。且く道へ箇の什麼人の恩力を承けて便ち恁麼なることを得たる。サテ其ういふぐわいに自由の働らけると云ふは、一鉢それは誰のお蔭であるぞ、其事は本則の公案に參じて見れば解らうぞといふので、試みに擧す看よと言ふ。

本則 舉僧問趙州。至道無難。唯嫌揀擇。有語言是。

揀擇滌口含霜和尚如何爲人。抄者道老州云。何不引盡這語。賊是小人智過

馬趁賊僧云。某甲只念到這裏。兩箇弄泥團州云。只這至道無

難。唯嫌揀擇。換却眼睛○捉敗了也。

雪竇が趙州の至道無難を拈提するのはこれて四回である。僧あり趙州に問ふ。至道無難。唯嫌揀擇。纒かに語言あれば。是れ揀擇和尚如何してか人の爲めにせん。これは前にも屢々申した通り、趙州老人は動もすれば三祖大師の至道無難唯嫌揀擇と云ふ語を拈提し更に纒に語言あれば。是れ揀擇と言ふて學人に示されたに因り、學人の中の稍や氣力ある者が、代り代り色々な疑問を呈出して、或は老人の脚下を勘檢

しやうと思ふ野心の者もあれば、又は眞面目に疑團の解決を求めめる者もあつたと見える。今此の僧の如きも一大難問を提出して、老人を閉口させやうと思ふ野心があつたらしい。そこで其の間端が中々面白い。あなたは毎常に至道は難きこと無し。唯揀擇を嫌ふて仰せられ、且つ少しも何とか言へばハヤ其れが執れかに揀擇したことになるぞと仰せられるが、然かし何とも言はず人の爲めに法を説くことも出来ずすまいが、あなたは何うなさるお考へてありますぞと突込んだ。着語に再運前來しば、同じことを言ふなと抑へ、什麼と道ふぞ、無難だの揀擇だのと言ふ必要は無いと拂ひ、三重の公案ついで三回に及ぶは餘りに五月蠅と罵する。又満口に霜を含む纒に語言あれば。是れ揀擇であるから、何とも物は言へぬはず。此僧の言ふ所尤も千萬であると擲論し、更に道の老淡を抄着す。能く趙州を問ひ詰めたぞと冷かし、これは前にもあつたが日本の俗に何なりとも始めて其れと氣が附いて驚いたやうな時にハツと言ふたやうなアンバイの聲であるそやうな。州云く何ぞ這の語を引き盡さる。貴公は只揀擇を嫌ふと云ふとたけ言ふて居るが、三祖大師の言はれたのは至道無難唯嫌揀擇の次に但憎愛なければ洞然として明白と云ふ語

があり、又老僧が其れを貴公たちに拈提して聞かせるにも、纔に語言あれば是れ揀擇是れ明白老僧は明白裏に在らず是れ汝等還て護惜すべきや、はた無やとまて言ふて置たに、其れを貴公は是れ揀擇たけを將きて彼れ此れと言ふて居るのでは無いか、ナゼ老僧が言ふた通りの全分を皆擧げてきて問はないぞと言ふたのである、着語に賊は是れ小人、智は君子に過ぐ、趙州は實に老賊である此僧の懐中物をスツカリ取りあげてしまふたぞ、一鉢に賊といふものは小人のはずであるに、其智慧は中々君子も及ばぬぞとの讚歎である、白拈賊イヤ賊も賊夜中の窃盜ではなくて眞晝間の大賊ぞ、賊馬に騎て賊を趁ふ、此僧元來趙州の懐中をねらふて來た賊であるに、其の騎てきた馬すなはち是れ揀擇云々の語を以て、直に此僧の口を塞いでしまふたけれども、此僧も亦さる者て僧云く、某甲只念ずること、這裡に到る、イヤ拙僧は後の處までは氣がつかませんので、先づ氣のついた所は此處まで、ありますと言ふ、其のやうなことで何うして此の七百甲子の老趙州を勘破することが出來やうぞ、着語に兩箇泥團を弄する、漢どもこれも子供の戯むれのやうであるぞと罵しる、しかし僧の財産は悉く趙州に奪はれてしまふたと云ふので、箇の賊に逢著すと

言ひ、塚跟敵手し、難し、塚跟といふは進まざる貌とあつて、自由に歩けない姿、州云く只這の至道無難、唯嫌揀擇、サウカ後に用が無いと言ふか、其れが本統ならば其れて好い、只此の至道無難、唯嫌揀擇だけのことよ、其外に彼れの此れのと妄想分別するには及ばぬ、只這の二句に向つて實參實究するが好いと教誡せられた、着語に畢竟這の老漢に由る、かやうな爲人の作略は趙州老人に限ると贊し、他に、眼睛を換却せらる、此僧も此れて眼が覺めたか、捉敗了也、到頭趙州老人に捕虜にされてしまふたぞと笑ふ、

頤水灑不着 説什麼○本深遠生 **風吹不入** 如虚空相似○理無碍 **虎步龍行** 他家得自在

鬼號神泣 大衆掩耳○草屣風行 **頭長三尺** 怪底物○何方聖 **知是誰** 怪底物○何方聖 **相對無**

言獨足立 山○放過即不可○便打

水灑けども着かず、趙州の答話の如何にも出格なる姿を、彼の蓮の葉に泥水が飛びかゝつても、直にハラリと撥きのけるやうなアンバイであると言ふ、着語に什麼をか説く、雪寶の其う言はれるは、其れは何の事て御座るか、太深遠生イヤ大層に深遠

なことで解りかねる什麼の共に語る處かあらん何も其のやうにむづかしく相談するほどの事でもあるまいにとすべて趙州の機鋒に寄せて無難の至道を拈弄するのである。風吹けとも入らずこれは趙州爲人の作略に風の透る隙間も無いと云ふことである。而して其實はヤハリ至道の法界徧滿を頌するのである。故に着語にも虚空の如く相似たりと言ひ、又硬刹々地と言ふ、唯虚空の如く無礙であるばかりでなく又鑽石の如くに堅い、何とも形容のしやうが無い有様、空に望んで啓告す、何とも手が着かんに依て嗚呼蒼天蒼天と天を仰いで悲むの外は無いと讚歎の極である。さて又此の趙州老の風采と云へば虎の歩み龍の行くが如くて、風を起して走り雲を蹴て躍る其の威凜凜々として近寄ることの出来ない有様、着語に他家自在を得とほめ、妨げず奇特なりと讚歎した他家といふは即ち趙州をさす、此に至りて彼の僧が閉口して退ぞいたばかりでは無い、鬼も號び神も泣くイヤ鬼神ばかりでは無い、三世の諸佛も歴代の祖師も悉く倒退三千里の外は無い、其れは其のはずである無難の至道より尊いものも無いければ、強いものも無いからである、着語に六衆耳を掩へ、鬼神に泣き號ばれては大變であらうぞ、一同に耳を塞いで聞かないやう

にしると坐下への提撕、草偃し、風行く、鬼神ばかりでは無い、草も偃すぞと算し、閻黎是れ他と同參なることなし、や其う言はれる雪竇お前もヤハリ鬼神と諸共に泣き號ぶのでは無いかと擲揄す、頭長きこと三尺知ぬ、是れ誰ぞ、此れは趙州老人の寫眞の説明、イヤ至道無難如來の姿である、昔し或る大徳の禪師が人の佛を問ふに答へて、頭長きこと三尺、頭短きこと二寸と言ふたことがある、其れを雪竇が引てきて其のやうな妖怪は何であるぞと言ふた、これは三十二相八十隨形好を頭長三尺の一相に飯して、其の一相の更に無相なることを示し、到底無難の至道を形容や議論で、見ることも考へることも出来るもので無いことを明かされたのである、着語に怪底の物妙な化物であるぞと言ひ、何の方の聖者ぞ、西方の彌陀如來も東方の藥師如來も其のやうな姿とは承はらぬが、其れは何處の何佛であるかと言ふ、此れは無方の無相如來と云ふ佛である、近う寄つて拜禮をとげられましやうと云ふので見るや、見るやと言ふ、さて此の無方無相如來は如何なる法を如何なる躰裁で説かれるかと云ふに、相對して言なく、獨足にして立つ、此の如來は晝は日ねもす、夜は夜もすがら、一切衆生と相對するぐらゐのことでは無い、其實は朝々佛を抱いて起き

夜々佛を抱いて眠るて、つかの間も離るゝと云ふことは無いのであるが、終に一言の迷とも悟とも法の説くべきは無い、儒者さへに天何をか言ふや四時おこなはれ萬物育すと言ふて居る、無相佛の無言に何の不審もあるべきでは無い、而も一本足て立つて居る、他の力を假らず、勿論杖などつかないで自由自在である、雪竇は之を知ぬ是れ誰ぞと言ひ、圓悟は山僧も亦れ識らずと言ふ、吾人お互ひに何とか雪竇に向つて答へねばならぬのである、圓悟も更に諸人須からく子細に眼を着けて看るべしと言はれてある、着語に咄と化物を叱り、頸を縮めて去れり、其れ見ろ圓悟の一咄て化物が遁げたぞ、一着を放過す、其實は一棒に打ち殺すのであつたが放してやつたイヤ彼れは山體であらう獨足にして立つと云ふやうな山鬼を放過せば即ち不可ゆるして置ては後の害になる、便ち打つと其跡を拂つてしまつた、斯れ等の着語みな悉く吾人をして言句につきまはらしめぬやうにとの、圓悟禪師の大慈悲懇歎の所を感謝せねばならぬのである。

第六十則 雲門拄杖子

垂示諸佛衆生本來無異。山河自己寧有等差。爲什麼却渾成兩邊去也。若能撥轉話頭。坐斷要津。放過即不可。若不放過。盡大地不消一捏。且作麼生。是撥轉話頭處。試舉看。

諸佛と衆生と本來異なること無く、山河と自己と寧ろ等差あらんやとは、本躰平等無差別の境すなはち本分の上から直に法性真如の當躰と示された、畢竟同じことを二句にわけて文を巧みにしたまへたことであるけれども、強て分けて言ふて見れば、諸佛衆生と云ふた方は、精神の上から迷だの悟だのと云ふ差別の無いことを明かしたので、圓覺經には始て知る衆生本來成佛生死涅槃猶ほ昨夢の如しと説かれてある、又山河自己と云ふた方は、形體の上から動物だの植物だのと云ふ差別の無いことを明かしたので、吾々人類の四大すなはち地水火風も、山河艸木の四大も本より同一のものが、且らく因縁果報の結合如何に依て、假りに形を異にし居るまでのことである、と云ふのは、佛教普通の常談で、何も別段に珍らしい話では無い、但その平等一相なるものが什麼としてか却て渾べて兩邊となり去るや現に艸木

と吾々人類との如きは、目前の事實に於て吾々人類の日々の食料を山河艸木に取
て生活して居るでは無いか、吾々の此身が二三歳までは母の乳で育てられたので
あるから、母の血肉と吾が血肉と全く同一であるに相違ない、其れ故に母と吾と他
人でないと云ふなら、吾々が母の乳房を離れてから以來、米や豆や大根や牛房、乃至
魚鳥や牛豚の肉で此の身軀を作つて居るとして見れば、彼の艸木や畜類と吾々の
の關係は全たく母と吾との關係に少しも異なつては居らぬのである、況んや釋迦
と云ふも彌陀と云ふも皆唯吾々と何の異りも無き人類である、然るに其れと根本
より異なつた物のやうに思ひ甚しきは、何のやうにしても凡夫が佛には成れない
者のやうに思ふものもあると云ふは、一躰どうしたわけであらうぞ、要する所は一
念の轉處に於て千里萬里の隔たりとなるのである、然らば更に其の一念心上に向
つて、若し能く話頭を撥轉し、要津を坐斷すると云ふことが、先づ第一肝要のことと
ある、話頭を撥轉すると云ふは、前に言ふた平等一相の本體がナセ兩邊になつたか
と云ふ話、それを撥轉と排ひのけて一點の疑ひも無くなつた姿、要津を坐斷すと云
ふは前にもあつたが、迷の此岸から悟の彼岸へ渡る渡し場を打ち破りて、此岸の衆

生だの彼岸の佛だのと云ふ兩邊を見ないやうになることである、其うさへなれば
自己も山河も此儘に法性真如の當躰で、別に求むべきの法もなければ又厭ふべき
の法も無い、さりながら其れも纒かに放過すれば即ち不可である、放過といふは其
事を打ち棄て、緩み怠ることである、たとへ一旦如何ほどの悟が開けたにもせ
よ、悟後の修行が十分に相續しないでは決して實地に自由を得ることは出来ない、然
るに、若し放過せず、晝夜不斷造次顛沛にも、不退の三昧に住することが出来れば、
盡大地一捏をも消せず、既に宇宙と吾と同躰一致して居るのであるから、如何に天
地が廣大であつても一捏にも足らないぞと、言ふ、且く作麼生か、是れ話頭を撥轉す
る處、従前その例も多くあるが、今は別して雲門拄杖子の話を試みに、擧す、看よと垂
示せられた。

本則 擧雲門以拄杖示衆云、點化在臨時、殺人活人、活人活人、拄杖子化爲龍、何用

作什麼、吞却乾坤了也、天下朝臣性命不存、還却性命、山河大地甚處得來

十方無礙、落四面亦無門、東四南北四維上下、爭奈這箇何

雲門の文偃大師ある時、拄杖を拈起して以て坐下の大衆に示して云く、着語に點化は時に臨むに在り、點化と云ふは龍門に於て魚が龍に化することを云ふので、其れが時に臨むと云ふは、此の拄杖が龍に化するやら、虵に化するやら、其れは臨機應變で何うなるか分らぬと云ふのである。殺人、刀活、人劔、又此の拄杖が人を殺す刀となるやら、人を活かす劍となるやら、其れも雲門の自由である。你が眼睛を換却し了れり、モ、此の拄杖を拈起して見せたばかりで、未だ何とも一言も發せぬうちに、諸人の眼はスツカリ味まされて居るぞと言ふ。拄杖子化して龍となり、之れは敢て龍にならないても、拄杖子その儘で好いのであるが、且く諸人の人情に随つて化して龍となると言ふたのも、ハヤ落艸の手段である。故に圓悟は何ぞ、周遮を用ひんと云ふ。周遮といふは色々手敷をかけて廻り遠いことである。化するを用ひて、什麼が作さん化してしまふては、拄杖の用はなさんぞ、衆生は象生て好い佛とか云ふものに成る必要は無いと云ふ意味である。乾坤を吞却し了れり、これ十方法界唯一條の拄杖子となり了つた、これは何も拄杖に限つたことでは無い、如意でも拂子でも喝でも咄でも、天龍や俱胝は一指頭を以て乾坤を吞却せしめたのである。着語に天下

の稍僧性命存せず、既に吞却せられたのであるから、拄杖子の性命の外に稍僧の性命といふものゝ存在すべきはずは無い。遠て咽喉を碍着すや、乾坤などを吞却して喉に支へはせぬかと弄し、閑黎什麼の處に向て、安身立命せん、雲門自分の安身立命の地は何うなさるか、と擲論するやうに言ふて、吾々參學の者に研究の要路を示すのである。山河大地甚の處よりか得來るサ、此の通り拄杖の龍に乾坤を吞却されてしまふた時に、山河だの大地だのと云ふものが何處に在るぞ、乃至佛だの衆生だの地獄だの極樂だのと云ふものが何處に在るぞ、十方壁落なく、四面亦た門なし、其れ無限の空間あけはなしになつた。東西南北、四維上下、いくら吞却しても、やはり東は東、西は西、上は上、下は下、東南の間と、西南の間と、西北の間と、北東の間との四つである。即ち四方と四維と上下とて十方、これが我が佛教中に於て空間の無限なることを言ひ證はす術語になつて居る。サテすべて吞却したとしても、這箇を奈何せん、這箇とは何である、今は拄杖子と名けられてある、拄杖子は拄杖子を吞却するであらうか有るまいか、こゝ參究の要點ぞと言ふ。

頌 拄杖子吞乾坤

徒說桃花浪奔

不如一手脚羅燒尾者不在拏雲攫霧○左之右之老僧只管看曝腮者何必喪膽

亡魂千人氣字如王○自是爾拈了也謝慈悲○切聞不聞不免落草○直須灑灑落

落殘羹飯○乾坤休更紛紛紜紜○打云放過則不可七十二棒且輕恕

杖下座大衆一時走散○山僧不替行此金○一一百五十難放君○正令當行豈可只恁麼了○直師驀拈拄

杖○杖子乾坤を呑むと先づ本則の全體を舉げ殊に直に拄杖子と云て龍と化したと

は言はぬ圓語は什麼と道ふぞと耳立てた只用て狗を打たん乾坤を呑むなどと奇
怪なことを言はずとも其の拄杖で狗でも打つが好いぞと抑へる徒らに説く桃花
の浪に奔るとこれは支那の禹門といふ處に三級の浪と云ふて例へば日光中禪寺
の湖水が華嚴の漣となつて落ちるやうな處があつて其水が三段になつて落ちる
毎年三月其浪に桃の花が散り落ちて漲るころ魚が其水に溯ぼりて三段の浪を
超えることが出来れば化して龍となりて天に昇るそこで之を登龍門といふので

ある然るに今此の拄杖子が乾坤を呑むといふ話に就いても其れは拄杖子が桃花
の浪に奔りて龍門に登り龍と化した上でなければ働かないやうに言ふものが
多いが何も其用な面倒な世話は無い拄杖は拄杖で何の不足でもないと云ふのが
雪竇の意で即ち一切衆生其儘に本來成佛で何の不足もない何も事新らしく修行
して悟を開いてから初て成佛するのでは無いぞと云ふ本分の上の景況を示され
たのである着語に向上一竅を撥開すれば千聖も齊く下風に立つ桃花の浪に奔
るやうなことでは無く本分の上から斯う以てこれらでは三世の諸佛も平身低頭
するより外は無い雲を拏らひ霧を攫むの處に在らず桃花の浪に奔りて點化した
龍は拏雲攫霧の技倆を逞くするであらうけれども本分の拄杖子は其のやうな
小細工はしないと云ふ説き得て千徧萬徧するも手脚羅籠一徧するには如かず桃
花の浪に奔ると云ふやうなことを徒らに千萬返くりかへして説て居ても直に一
度乾坤を吞却するには及ぶまい尾を燒く者は拏雲攫霧に在らずこれは彼の魚が
禹門三級の浪を超えて龍となる時には必ず天火があつて其魚の尾を焼くと云ふ
ことであるが其のやうなことをして龍になつても其れは未だ拏雲攫霧の真龍で

は無い眞の天龍は浪を超えたり尾を焼たりする必要は無い、本源自性天眞佛て妄想も除かず眞をも求めず其儘て何の面倒もないと言ふ、着語に左之右之老僧只管に看る、われ圓悟も常に其通りに看て居るぞと賛成した也、た是れ一箇の乾柴片尾を焼くと云へば枯柴のやうであるぞと抑へる、要する所は皆坐禪觀法の力を假りて成佛得道するのであると思ふやうな鄙劣な根性を打破しやうとの婆心片々である、腮を曝す者も何ぞ必ずしも膽を喪し魂を亡せん、さて尾を焼て龍になつても其れが眞龍でないとして見れば、三級の浪を超え得ないて後へ戻り龍門の下の死水沙磧の中に其腮を曝して居る魚のやうな鈍根の衆生ても、本來成佛であると悟れた上には、智愚賢不肖の差別は無い、一味平等の無等等であるに依て、何も膽を喪し魂を亡じて歎き悲むには及ばないぞと言ふ、着語に人々氣宇王の如し、其れてこそ箇々各自に獨立獨尊である、自ら是れ、你千里萬里然るに己れと己れを自から卑みて二乗外道の見に沈むは憐れむべきである、さりながら獨立自尊の氣象を失ふて居る者が、遽に斯やうな本分の話を聞けば、大概是驚き怖れて信じ得ない姿を、爭奈せん、悚然たるをと言ふた、雪竇は諒つて此に至り一轉して拈了也、モ一是れて也

しまいぞと言て、従上の葛藤を一言に打ち拂ふてしまふた、着語は慈悲を謝すと言ひ、老婆心切と言ひ、これてヤツと助かります、今までのやうに色々なことを並べられては參學も研究も出来たものでは無い、聞くや聞かずや、これて拈了つたのであるが、諸人は能く解つたか解らないかと念を推した、着語に免かれず落草なることを、其んなことを言ふては何うも本筋路ては無いぞと抑へ聞くを用ひて、什麼をか作さん、聞くや聞かずやと言はれるけれども、何の役に立つぞと、何處までも圓悟は本分の大道を行く、直に須らく灑々落々たるべし、胸中に一點の滯ふりなきこと、萬里の青天に一片の雲もないやうになれと言ふ、着語に其のやうなことは殘羹飯て乞食てゝも無ければ食はないぞ、今さら珍らしくも無いと罵しる、しかし此の何の珍くも無い所が、即ち乾坤大地甚の處にか得來ると云ふべき十方廓落の境界を更に紛々紜々たることを休めよ、迷だの悟だの修行だの證果だの其他すべての雜想雜念に使はれないやうにしろと言ふ、着語に、令を擧する者、先づ犯す雪竇も前が其のやうなことを心配するのが、其れが即ち紛々紜々てあらうぞと答める、相次に、你が頭上に到る、相次は造次と云ふも同じこととて、朝な夕なの都べての事が

紛々紜々を免かれまいぞと警醒し打て云く放過せば不可なり少しても油断してはならぬぞと注意する七十二棒且く輕恕す若しも灑々落々たることが出来ないで紛々紜々たるやうであつたならば輕く恕しても七十二棒の罰を與へるぞとの嚴令である圓悟は山僧は會て此令を行せず七十二棒で輕恕するなどと云ふ手緩いことは圓悟は嫌ひであるぞ令に據て行はん息の根の止まるまで打て打て打て打てやらうぞと云ふ頼ひに山僧を得るに遭ふ此の圓悟が居て正令を行するから好いやうなもの、雪竇だけに任せて置いたら大罪人を取り遁がすであらうに一百五十君を放し難し到頭雪竇も圓悟に譲らず本式になつてきた着語に正令當行ならば豈只恁麼に了るべけんや圓悟は一百五十でもまた本統では無いと云ふ直饒朝打三千幕打八百するも什麼を作すにか堪えん時々刻々に警醒して三昧正受到安住するやうにならねばならぬぞと云ふのである師慈に拄杖を拈して下座す大衆一時に走り散す雪竇は拄杖を拈起して何とも言はずに直に下座してしまふた此際已に乾坤を吞却し了つたのである大衆は之を見て皆走り遁げてしまふたとある圓悟は雪竇龍頭蛇尾にして什麼をか作さんと着語した拄杖を拈起した所

は龍頭であるが打ちもせず下座したは蛇尾であると云ふ意が例の抑へたやうに云ふて其の作略の異常出格なることを讚歎したのである。

第六十一則 風穴若立一塵

垂示 建法幢立宗旨還他本分宗師定龍蛇別緇素須是作家知識劔刃上論殺活棒頭上別機宜則且置且道獨據寰中事一句作麼生商量試舉看

法幢を建てること云ふことは前にもあつたが凡そ人の師となつて法を説く者は幢旛を其の門庭に建て、今日の學校や會堂などに其の學校や會堂の徽章を旛はした旗を建てるやうなものである宗旨を立すると云ふは同じ佛法の上に於ても其の師家の作略に依て或は念佛と勸めるものあれば或は題目を勸めるもあるやうなもの、同じ達磨門上に於ても臨濟大師の四料簡とか洞山大師の五位とか云ふやうな亦た其れくの主義を定め家風を興すことである宗の家は本は家系の上に

於ての本家といふ字であるが、今日では漠然と一般に宗教とか宗門とか宗乘とか云ふて孰れの門下にも使ふやうになり、耶蘇教にまで應用されて居るけれども、昔は宗と教とに差別があつて宗と云へば禪家のことに限り、教といふは禪家以外の天台とか華嚴とか法相とか三論とか云ふ類のことを單に教家と稱したものである、其の典據は楞伽經に本づいて六祖大師の壇經などに、禪家のことを宗とばかり云ひ、教家のことを説と稱し、宗も通し説も通すると云ふやうな語が、永嘉大師の證道歌などにも見えるのであるから、たしかに唐朝の頃から其の差別があつたやうに思はれる、旨の字は食物の味の好い俗に謂ゆるウマイとかオイシイとかいふ意味の字で、宗と旨との二字あはせて一番の本源根元であつて此上も無き妙味のある所と云ふことになる、偕て其の法幢を建て、宗旨を立し人の師となつて法を説くことは、他の本分の宗師に還へず、其れは到底凡庸なる者の企て及ぶべきことでは無いに依て、本分すなはち三世諸佛の頂額をも蹈み超えて、自から十方世界の主宰となるほどの大宗師の職分であるから、其人にも還し致す、偕又其の大宗師たるべき人が、多くの參學の徒を接し得て、龍蛇を定め、細素を別つ、此の者は九天に翔

翔して雲を起し風に乗るの真龍である、彼れば茫々たる草の中にニョロ／＼と匍匐まはつてゐるに過ぎざる蛇でしか無いと云ふことを明かに鑑定して、印可證明すべきは之を印可證明し、三十棒を喫せしめて息の根を止めてしまふべきは決して之を放過しては置かないと云ふやうに決断する、又細素といふは黑白と云ふも同じことであるから、言葉が異つただけ、前と同じ意味、すなはち學人の機根と其の修行の分齊とを能く判決することである、其れ等のことは、須らく是れ作家の知識なるべし、これも前の他の本分の宗師に還へすと云ふたのと、言葉を換えたまでのことと意味に違ひは無い、劔刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つ、前の龍蛇を定め、細素を分つと云ふのは、師家たる人が學徒の機根を鑑定する方であり、此の殺活を論じ機宜を別つと云ふのは、其の機根次第に之を接化する作畧を言ふのである、けれども其れ等の事は、譬へば元帥や將軍が四隣の敵を征服して武威を振ふやうなものであるから、今は則ち且く置くと取り除いて置て、更に且く道へ獨り、寰中に據るの事、一句作廢、生か商量せん、寰中といふは畿内といふも同じことで、天子の宮城の在る處のことである、しかも天子が其の寰中に獨り據ると云ふのであるから、

大臣や將軍に心配させたり戦争させたりするやうな厄介もなく九重の雲深き處に御座たれこめて手を拱して天下治まると云ふ神聖幽玄なる境界に就ての一句其れは何と相談したものであらうぞと言ふて試みに擧す看よと本則を喚ひ出した

本則擧風穴垂語云興發致雨也若立一塵我爲法王於法自在家國興盛

不是他事不立一塵掃塵滅跡○失却眼家國喪亡一切處光明○川家國作雪竇拈

拄杖云須是眼立千仞始還有同生同死衲僧麼還我話頭來○雖然如是要平不

運知麼○若知許爾自由自在風穴といふは汝州風穴の延沼禪師と申し臨濟大師の孫て南嶽下の第七世すなは

ち達磨十三代の法孫である或る時その門下の衆僧に垂語して示された此の垂語の全文はモツと長いので委く禪林類聚に出てある其れを今は雪竇禪師が抄録して語を着け且つ頌を附せられたのである圓悟の着語に雲を興し雨を致す此の垂語は餘程天下の潤ひになるぞとほめた也た主となり賓とならんことを要す是の如

き垂示は誰が賓客といふことは無いに依つて自分主ともなれば賓ともなるぞ若し一塵を立すれば家國興盛す平等一相の本體の上には空々寂々として一物も見らるべきものは無い然るに若し一塵すなはち毫釐ほども動き出せば直に千差萬別の現相歴然として羅列し山もあれば川もあり花もあれば紅葉もあり地獄もあれば極樂もあり衆生もあれば佛陀もあり苦もあれば樂もあり迷もあれば悟りもある譬へば此に一つの國家があつて王侯相將百官羅列して政治だの法律だの經濟だの教育だのと云ふて文明開化の隆盛を見るやうなものであると云ふこれは全く宇宙萬物の現相其儘の姿である圓悟が我は法王たり法に於て自在と言ふ一往は風穴禪師の此の垂語に一塵を立しやうとも立せざらうとも家國を興そうとも亡ぼそうとも自由自在の力があると云ふのであるけれども其實は風穴に限つたことは無い吾々も互に誰にも一念の轉じやう如何に依て地獄極樂を建立することも出来れば娑婆も淨土も一時に掃蕩してしまふことも出来るのである又花簇々錦簇々とする此れは天地萬物森々として羅列し皆ことごとく其れれく其れれくの光明を放ち各自の本分を盡して居る姿である然るに又是れ他の屋裡の事に非ずと稱

ふた、他といふは風穴をさすので、風穴は臨濟の嫡嗣たる南院の弟子であるが臨濟の家風は此の一塵を立して家國を興盛せしむると云ふ主義では無い都べて此の反對の方で次の垂語に言はれた方の側である。即ち次の垂語に一塵を立せざれば家國喪亡すと此れは全たく前とは反對で、平等一相の本體の上から、苦もなければ樂も無い迷もなければ悟もない、佛もなければ衆生もない、地獄も極樂も十方も三世も皆ことごとく見とめない境界譬へは家も國も喪ひ亡びて王もなければ民もない治もなければ亂もないやうなものであると云ふのである。着語に蹤を掃ひ跡を滅すとある、都べて何事にも痕迹の見えるやうなことは本統のものでは無い、俗にも味噌の味噌臭きは上味噌に非ずと云ふて居る、忠孝の忠孝臭き仁義の仁義臭き、皆本統のものでは無い、次の着語に、眼を失却すとある、眼さへ開かなければ都べての色は皆喪亡してしまふ、唯に眼晴ばかりでは無い、鼻孔に和して失す鼻も亦一時に無くなつた、そこで一切處、光明で盡十方方法界たゞ一道の大光明となつて、花は花のまゝに紅葉は紅葉のまゝに無礙の光明たらざるものは無い、家國を用ゐて什麼にかせん此の着語は今さら言ふには及ばないやうであ

る、全く是れ他家屋裡の事、これてこそ臨濟門下の風穴らしいぞと云ふ、さて風穴禪師が斯う二様に垂語せられた、即ち一塵を立すると立せざるとの二様、家國が興盛すると喪亡するとの二様であるが、どちらが好いとも悪いとも言はない、凡俗の人情から見たならば興盛と聞けば愛たいやうに思ひ、喪亡と云へば悲しいやうにも思ふてあらうが、今は其のやうな都合の話では無い、こゝて即ち垂示に謂ゆる獨り寂中に據るの一句を、何とか道はねばならぬ所であるが、風穴の門下には此時に進み出て一言の領解を呈した者もなかつたと見えて、後世の雪竇が拄杖を拈して云く、サ、此の拄杖を拈じた所、即ち十方方法界たゞ此の一條の拄杖となつた、此れは一塵を立したと云ふもので有らうか、將た一塵を立せずと云ふもので有らうか、圓悟は須く是れ壁立千仞にして始て得べし、何とも手の着けやうも足の踏み處もないぞと言ふ、達磨來也、碧眼の胡僧が出て來たやうぞと擲擲する、還て同生同死の稱僧ありや、何うじや、諸人この拄杖子と同生同死の契りを結んで居る者が居るか、と搦問せられた、其の實は誰も彼も皆ことごとく此の拄杖と同生同死のはずであるけれども、はずである、と云ふ理想だけになつて居て、其の同生同死底の活用が實地に現

成せぬに依て、是の如く雪竇にたしなめられても、一言の返す言葉もない仕合である。圓悟は我に話頭を還へし來れと言ふ拄杖子と同生同死のものを求めて何にするぞ其やうな不用の話頭は我に還せと奪ふたのである。然も是の如くなりと雖も不平の事を平げんを要す此れは前の着語を承けて、拄杖と同生同死の者を求めるには及ばぬけれども、立の不立の興盛の喪亡のと兩端に涉つたやうなことを言ふて人に疑惑させるのであるから、其れを拄杖で打ち拂つて不平の事を平げるのも好からうと言ふ、又須く雪竇に於て商量して始て得べしと言ひ還て知るやと言ひ若し知らば、備に許す自由自在なると言ひ若し知らずんば、朝打三千、暮打八百と言ふ、いづれも皆蛇足のやうて圓悟の着語とは思はれない、況や古寫本には無いそ

頌 野老從教不展眉美三千里外有商人。且圖家國立雄基太平一山大家知

即住○靈乾坤大地是箇解脫門 謀臣猛將今何在有慶有慶○土人稀 萬里清風只自

知○地○若○無○人○教○誰○掃

此の頌は一塵を立せず家國喪亡すと云ふ掃蕩門の方は捨て置いて、一塵を立すれば家國興盛すと云ふ建立門の方を取て誑はれたのである。萬事を掃蕩して平等の實際を彰はすことは、固より禿僧の本分ではあるけれども、其れだけでは衆生濟度が出來ない、淨土眞宗に於てさへ往相すなはち極樂往生ばかりでは無く、必ず還相と娑婆へ還りて濁世を救ふことを大切にす。況や祖師門下却來退歩して塵に入り細に入り、被毛戴角を以て一段の風流とする宗風に於ては勿論のことである。そこで野老は從教あれ眉を展べざるを、此れは家國興盛で王侯相將の威權さかんに法律制度の規定などが嚴重であつたならば、天然自然の安穩無事ばかり楽しんで居る所の鼓腹擊壤の野老等は、面倒なことである厄介なことであると云ふて眉を擧めて傳陶しがるであらうけれども、其んなことは儘よ厭がる者には厭がらせて置て、且く國を家國に雄基を立ることとを、一般多數の人民のために安全の策を講ずるには、是非ともに家國に英雄の基業を立て、其の政治法律の恩恵に依らせるやうに、已むを得ず第二義門に下りて衆生濟度の方便をめぐらさなければならぬのである。着語に三千里外に箇の人あり、此れは遠方に知音があると云ふ意味の語で、即

ち雪竇和尚は風穴禪師の好い知音であると云ふのである。しかし美食も他人の喫に中らず雪竇が斯やうに御馳走を持ち出されても満腹して居る。國悟などは食ふ氣にならぬぞと云ふ。太平の一曲大家知る。家國に雄基を立ると云ふことは實に太平の一曲であるから誰でも之を喜ばない者はなからう。行かん、と要せば即ち行か、住らんと要せば即ち住る。雪竇は法を取扱ふ上に於て自由自在なものである。ほめ又盡乾坤大地是れ箇の解脱門。作麼生か立せん。元來解脱ならざる處は無いに今さら雄基を立するなどは餘計なことぞと抑へる。謀臣狂將今何くにか在る。雪竇が先きに拄杖を拈じて還て同生同死の禪僧ありやと言ふたのを、今は家國の雄基を立つるに就て天子の補佐となり、内に在て嘉謀をめぐらす大臣、又は外に出て、猛威を振ふべき大將、即ち拄杖子と同生同死底の禪僧が現に今何處に居るぞ。國悟は有りや有りやと言ふ吾々互ひも雪竇の拄杖下に犬馬の勞に服すべき。輪重輪卒なりとも勤めなければならぬのである。土曠人稀にして相逢ふ者少し。土曠といふは土地曠漠といふこととて、餘りに土地が廣いのに人が少いから片腕になつて働く者は容易に無い、と言へば雪竇自分一人のみ風穴の知音で、拄杖子と同生同死

底らしく聞えるが、且つ、點胸する、こと、莫れ點胸といふは自慢自負の姿である。萬里の清風只自ら知る。人間界には到底謀臣も猛將も無いけれども、萬里の清風のみが雪竇の知音であるぞと言ふ着語に、旁若無人、其れは雪竇あまりに自慢すぎはせぬかと抑へ誰をして掃地せしめん、其のやうに獨りざりになつては掃地させる奴僕も無くて困らうぞと弄し、也た是れ雲居の羅漢、大層な天狗ぞと抑へる。

第六十二則 雲門中有一竊

垂示以無師智發無作妙用以無緣慈作不請勝友向一句下。
有殺有活於一機中有縱有擒且道什麼人曾恁麼來試舉看

無師智を以て無作の妙用を發す、無師智と云ふは敎家の説く所に依れば、法華經に一切智と佛智自然智と無師智との四つを説てあり、其中で他縁を待たざるを無師智と名くと釋してあつて、禪語では門より入る者は家珍に非ずと謂ふ如く、見性悟道の智は即ち無師智である。偕此の無師智を得たもの即ち見性悟道の人であれば

無作の妙用を發する無作といふは造作を假らぬと云ふて即ち天然自然に活潑自由なる作用のあらはれるのを無作の妙用と云ふさて又無縁の慈を以て不請の勝友と作る此れも教家では色々ひつかしく言ふとて慈悲に衆生縁の慈悲と法縁の慈悲と無縁の慈悲との三つを説く其中で無縁といふは無邊とか無限とか云ふも同じこととて自他を忘れ能所を見ずに天真爛漫たる絶對の慈悲の影はれることである不請の勝友と云ふことは華嚴經にも維摩經にも説かれてある人から請待されないでも依頼されないでもこちらから無縁の慈悲心に催ふされて一切衆生の師ともなり友ともなると云ふとてであるさて又之を禪宗の言葉で言ふて見れば一句下に向て殺あり活ありと無作の妙用を發し一機中に於て縦あり擒ありと不請の友になつて濟度の方便をめぐらすことである且く道へ什麼人が會て恁麼にし來る之を古人の中に求むれば雲門大師の如き即ち其人ぞと云ふので試みに舉ず看よと本則をあげる。

本則 舉雲門示衆云。乾坤之內。宇宙之間。拈燈籠向佛殿裏。將三門有一寶。在什麼處。先生也。秘在形山。拈燈籠向佛殿裏。將三門。

來燈籠上

雲門大師是不妨語說。○燈籠。○

あるとき雲門文偃大師が衆に示して云はるには乾坤の内宇宙の間中に一寶あり形山に秘在す此れは僧肇法師の寶藏論に在る語を借てきたのである此の寶藏論のことは前にも言ふたと思ふが僧肇が冤罪のために秦王の刑に遭ふて殺された其時に七日の暇を請ふて寶藏論を著述しいよく殺される時になつて四大元無主五陰本來空空將頭臨白刃猶似斬春風といふ偈を唱へて刃を受けたと云ふことである偕こへ引た語の意味は無縁の空間に充塞し無限の時間を通貫して十方三世に徧滿常住せる一つの寶物がある其れが形の山すなはち人間の肉體の中に秘藏されて居ると云ふ即ち宇宙の本體が吾々も互ひの本心本心であると云ふとを形容したのである宇宙といふ語は平生つかひつけて居て分つたやうではあるが上天下地を宇と曰ひ古往今來を宙と曰ふとあつて宇宙の二字に空間時間の共に無限なるとを含んで居る圓悟が第一句の着語に土曠人稀と此の垂示を會する者の少きを歎き六合收不得と此の一寶は乾坤の内ぐらゐることでは無い土下四方の六合にも收りさらぬぞと言ふ第二句に鬼窟裡に向て活計を作すことを

休めよ、さらに又宇宙の間などと云ふ様子がチト恠いぞと咎め、蹉過了也そのやうに乾坤の内だの宇宙の間だのと仕切をつけては大間違ひであらうぞと云ふ、第三句に什麼の處にか在る其の一寶とか云ふものが何處に在るぞ、情識の分別を認め、て其れが本心本性であるかのやうに誤つてはならぬぞとの警誡である、光生せり眞實に其の一寶が合點出来れば、盡十方無礙の大光明を放つてあらう、切に忌む、鬼窟裡に向て覓むることを、かりそめにも情識の分別に涉つたならば取り返しのかない誤りになるぞと云ふ、第四句に撓と云ひ點と云ふ、この撓は破なり障なりと註して、其の一寶を秘在してあるこの形山を破し點も點破であつて其の秘在をあばき破るのである、此れ皆吾人をして一寶とか秘在とか云ふことに滞ふらせぬやうにとの慈悲の注意を、然るに雲門大師の撓破點破は更に甚だしい、燈籠を拈して佛殿裡に向ふと言ふ、一寶が形山に秘在すと聞けば何となく有り難そうにも聞えて、やゝもすれば情識にも涉りたがるが、燈籠が佛殿に這入つたと言へば有り難くも聞えず情識にも涉れない、其うして畢竟は同じことである、畢竟同じことであるがら一は情識に涉り一は情識に涉らないと云ふは何故であらうぞ、燈籠も

佛殿も共に無心にして清淨無礙であるからである、要する所は五尺の肉體を見ること佛殿の如く、心性を見ること燈籠の如くに其實徹底することが出来れば、雲門大師の洪恩の萬一を報謝することが出来てあらう、しかし此れは理論でも領解し易い所であるから、着語にも猶ほ商量すべしとあるが、次の三門を將て燈籠上來たすと更に雲門大師が那一寶を活轉せしめて見せられた、京都知恩院の三門の如き間口十幾間高さ何丈といふやうなのを、眞宗の佛壇に釣つてある輪燈のやうなもの、上に將て來たと云ふのである、大小廣狹を分別したり迷悟苦樂を思量したりして居ては、到底何のこととも合點のゆくべきこととて無い、若し能く此に於てセメては信得及する所があつたならば、始て方に聊か雲門大師垂示の慈悲に答ふることが出来るであらう、着語に雲門大師是は即ち是なれとも妨げず、諸訛なることを、此の雲門の垂示は面白いけれども、艱澁くて合點がゆきかねるぞと門下へ注意、獨ほ些子に較れり、何うも未だ十分とは思はれないと抑へ、更に若し子細に檢點し、將ち來れば未だ屎臭氣を免かれず、三門を燈籠の上へ將てくるとか、燈籠を佛殿に入れるとか、何やら手品つかひの仕るやうなことを言ふて、禪宗くさい所が鼻つ

まみてあるぞ、三門は自からは是れ三門にして燈籠は自からは是れ燈籠たるに何の不足があつて其のやうに轉換を要するぞと云ふので、要する所は參學の徒に住着させまいとの慈誨である。

頌 看看高着眼用看作古岸何人把釣竿孤危甚孤危〇壁立甚壁立〇賊雲舟

打斷始得〇百座千取水漫漫左之右之〇明月蘆花君自看看若則語〇若識得

句後

此頌の長短句は亦た一種特別の體である、第一句が看々と只二字、雲門が三門を燈籠の上に將ち來たと云ふが、諸人よく看るが好いぞと言ふ、着語に高く眼を着けよ、一通りの眼のつけやうでは見えなからである、けれども看を用ひて、什麼をか作さん、其れを見て何にするぞと咎めた、即ち是れが圓悟の高く眼を着けた所よ、驪龍珠を玩ふと此れは雪竇が雲門の垂語を珍玩する姿、第二句に古岸何人が釣竿を把る、雲門が斯く僧徒の語を拈弄し更に轉換して見せられたのは、畢竟學海の金鱗を釣り出そうと云ふ接衆の作略であるぞと言ふ、着語に孤危甚だ孤危壁立甚だ壁立

と此れは雲門の釣竿が餘りに高尚で、其の釣針にかゝるものが無いと云ふのである、其れを亦た雪竇が彼れ此れと云ふても、賊過後の張弓て何の役にも立たぬと抑へ、又腦後に腮を見るは與に往來すること、莫れ、若し復たヒョット其釣針にかゝらうものならば、如何なる憂き目に遭ふかも知れんて、メツタに近寄らぬが好いぞと言ふ、三四の句に雲舟々と云ひ水漫漫々と云ふ、此れは釣竿を把り居る所の古岸の景色、即ち人々各自の本地の風光いかにも浩渺として瀟灑なる姿である、着語に打斷じて始て得ん、其の舟々たる雲や漫々たる水を都べて打斷したならば彼の雲門大師垂示の本意が見えるであらう、けれども其雲や水が百匝千重で十方法界舟々漫々ぞと窺ひ難からしめて、更に灸脂の帽子、鵝臭の布衫、ハヤ穢なくて臭くて手もつけられぬは鼻もちもならぬぞと奪ふ、皆吾人を導いて語脈裡に轉せられぬやう指導せられるのである、灸脂と云ふは汗や油が炙りつけたやうになつてるといふこと、鵝といふは鷹の類で肉食する禽であるから非常に悪い匂ひのするもの、うな、其のやうな穢い帽子や布衫では被るわけにも着るわけにもゆかぬ、其れと同様に本分向上の處に腰を据えてはならぬぞと奪ふたのである、左之右之、此れは右

も左も皆其儘にと云ふ意味で、再々たる雲も漫々たる水も孰れを孰れと取ることもならねば捨つることもならぬと、一旦奪ふたものを更に皆ことごとく與へられた前に、遮り後に擁す此れも左之右之と同じ意味で何處も彼處も悉く本來解脱の風景ぞと云ふのであるいよ／＼結句に明月蘆花君自ら看よ、再々たる雲や漫々たる水で未だ其の風光が見えぬならば、明月蘆花の邊で諸人各自に能く看るが好いぞと言ふ、明月の光は白いもの蘆の花も白いもの、其の白い蘆花を白い明月が照す、皓々たる一色の上に同異の論量は容れられない、寶鏡三昧歌には此の景光を銀盤に雪を盛り明月に鷺を藏すと謠ふてある。此の風光が能く分れば彼の三門を將て燈籠上に來たする云ふことも明かに合點が出来るぞと云ふのである、けれども此の風光は看やうとして見えぬのであるから、着語に看すれば、瞻す見えぬのみならず眼がつぶれるぞと言ふ、若し雲門の語を識得すれば、便ち雪寶末後の句を見ん、此の着語は蛇足のやうである處々に斯のやうな註釋的の着語の雜つてゐるのは、後人の書添と見えて毎にうるさく思ふことである。

第六十三則 南泉兩堂爭猫

垂示 意路不到。正好提撕。言詮不及。宜急着眼。若也電轉星飛。便可傾湫倒嶽。衆中莫有辨得底麼。試舉看。

意路不到と云ふは心行處滅と云ふも同じこととて、意識を以て考へ到れない所の境界そこが即ち正に好し提撕するにと、作家の宗師が學人を導いて往くべき所ぞと云ひ、更に言詮不及すなはち言語道斷て、是とも非とも言葉を以て説き詮はすことの出来ない場合そこが即ち學人たる者の宜く急に眼を着けて實參實究すべき所に到り得たる者であつたならば、其の活動の神機妙用は亦た別段のものぞと云ふとを示して、若し也た電轉し星飛は、便ち傾湫倒嶽すべしと言ふ、湫は潭、湫と云て水の尤も深いところ、嶽は即ち山の尤も高いところ、其の湫をも傾ひけ其の嶽をも倒すと云ふので、眞箇禪僧の活作畧には天地山川をも碎破するが如くに、都べての思

議も言論も涙絶すると云ふことを示された、さて今此の衆中すなはち圓悟の門下に、其の傾瀉倒嶽の活機輪を辨じ得る底の者あることなしや、昔は南泉禪師の如き即ち其人であるぞと云ふので、試みに擧す看よと本則を拈出せられた。

本則 擧南泉一日東西兩堂爭貓兒 ○不是今日合關 南泉見遂提起

云。道得、即不斬 正令當行十方坐斷 衆無對 可借放過 泉斬 ○杜撰一隊漆桶堪作泉斬

貓兒爲兩段 快哉快哉 ○若不如此是弄泥團 ○未舉起時好打

池州南泉の普願禪師は馬祖大師の法嗣で達磨九代の孫である。一日東西の兩堂貓兒を爭ふ、東西の兩堂と云ふは僧堂の内の東單で坐禪して居る僧たちと、西單で坐禪して居る僧たちとのことである。と云ふ説もあり、又經藏に東藏と西藏との二つあつたと云ふ説もあり、又は前堂と後堂とのことである。と云ふ説もある。いづれにしても、其の兩堂の首座と首座とか争ふたのである。然し其の様なことは湘南でも潭北でも西洋人でも東洋人でも宜い、とにかく甲乙が集まつた猫の兒を一疋とらゑて何か争ふて居たと見える、此れは赤猫であるイヤ三毛猫であると争そ

ふたので有らうか、又は牝猫であるイヤ牡猫であると争そふたので有らうか、マサカに其様なことを争そふたのではあるまい、然らは何を争そふたので有らうぞ、此猫が佛に成れるか成れぬかと争そふたので有らうか、此猫が地獄へ落ちるか落ちないかと争そふたので有らうか、孰れ其邊のことと猫にこと寄せた佛法の上の争そひて有つたらうと思はれる、其れならば昔の南泉門下の坊さんには限らない、佛在世の頃から今の世に至るまで、諸宗各派で念佛だの題目だの坐禪だの觀法だのと争そひの絶えたことが無い、畢竟皆本源を忘れて支派に走つた妄想分別ばかりである、そこで圓悟も是れ、今日、合關のみにあらずと着語し、又一場の漏逗と兩堂の坊さんたちを叱つた漏逗と云ふことは前にもあつたが、器物に疵がついたり塞がつたりして用に立たないことである、然かし其實は三世の諸佛も歴代の祖師も皆此の猫の争ひから、發心もすれば修行もして菩提涅槃を證得せられたのである、から、輕卒に思ふては相ならぬけれども、今わが祖師門下に於ては其の謂ゆる菩提も涅槃も超過した處を立場とするのであるから、南泉禪師が其争ひを見て遂に其猫を奪ひ取り高く其れを提起して云く道得ば即ち斬らじ、一鉢に貴公等は何を

オクオクと本分に背いたことを議論して居るぞ、サア一言此の南泉の心に契ふたことを道ふて見る、其の一言一句が能く本分の事に適當すれば、此の猫を斬り殺さずに命を助けてやるが、若しも其うて無かつたならば一刀に此の猫を斬つてしまふぞと、謂ゆる電轉じ星飛ぶの勢ひである、着語に正令當行、十方坐斷、是の如く法王宣戰の詔勅を發せられては、四海九州みな降伏の外はあるまいと言ひ、又這の南泉老漢には龍蛇を定むる手脚ありとあるが、此の着語なども無くても好いやうに思ふ衆無對はたして誰一人として何とも道ひ得るものが無い、妄想分別の議論は彼れの此れのと騒々しくせにいよ／＼決死の際になつては此の通り一言もない、惜む可し、放過すること、を其時にグツと南泉老漢の利腕を抑へて、猫を斬らうとする刀を奪ひ取れば好かつたに残念なことよと、圓悟は悔やむ、一隊の漆桶什麼をか作すに堪えんと抑へ、杜撰の禪和麻の如く、粟に似たりと罵する、遂に泉は猫兒を斬て、兩段と爲す、猫こそ甚た迷惑千萬なわけて有るが、到頭サツクリと二つに斬り下げられてしまふた、此れが即ち垂示に謂ゆる意路不到、言詮不及の處で、決して彼れの此れのと理窟を求め議論をさしはさむべき所では無い、然るに南泉は殺生罪

を犯したとか、イヤ本統に斬り殺したのでは無く、只斬るやうな貌をして見せただけのとてあるの、色々に妄想分別する者もあるが、既に是れ意路不到の處である何の罪とか福とか云ふ論量があらうぞ、此場に於て斬る眞似をするの爲ぬの云ふ程度の沙汰では無い、圓悟は快哉、快哉と拍手大喝采て、更に若し此の如くならずんば、盡く是れ泥團を弄する、漢即ち南泉も亦やはり子供仲間に過ぎぬであらう、けれども更にモ一步進んで言へば彼の猫を奪ひ取るや、イナや直にサツクリと斬り下げてしまへば好かつたに道ひ得れば斬られじなどと云ふて、遂に斬らねばならぬやうなことに成つたのは、賊過後の張弓て甚だつまらぬと悔み、又己に是れ第二頭と抑へ、己れ圓悟であつたならば、未だ舉起せざる時好し、打つてあつたにと自家の作略を示された果して然らば、猫も亦た災難を免かれたであつたらう。

頌 兩堂俱是杜禪和

親言出親口○一句 撥動煙塵不奈何

有善 賴得南泉能舉令

子○好箇金剛王寶劍○川切泥去也 一力兩段任偏頗

百種作○不可致過也○便打

兩堂俱に是れ杜禪和杜は例の杜撰と云ふことと昔し杜默といふ男が頻りに多くの詩文を作るが、少しも法にも律にも合はぬので、世間の人が都べて不合格な詩文のことを杜撰と曰ふたと云ふことである。其れを今は禪僧の不合格者に應用して杜禪和と云ふた。禪和子といふは單に禪僧といふも同じことであるが今は韻字の都合で子の字を省いた。着語に親言は親口より出つ。此の雪竇の一言は實に大慈悲の訓誡ぞ、一句に道斷す。モ一二言と云ふには及ばない。款に據て案を結す。此れて裁判は決定した。烟塵を撥動して奈何ともせず。杜撰なる禪和子等が狐烟馬塵を撥動しての大戦争を始め。太平無事の天下を修羅の巷にして如何とも始末のつかないやうな騒動を仕出だしたぞと叱られた。此れは都べて古今の教相だの判釋だの比較だの批評だのと名相の分別にばかり安動して居る者の頂額の一針である。着語に看よ、爾什麼の折合をか作さん。其のやうに戦つて何時どう落着させるつもりであるぞと言ひ、イヤ其の奈何ともし難き所が現成公案で即ち意路不到の境界ぞと擲論し、更に其の奈何ともせざる所に也、た些子あり。マンザラ棄てたものでも無い、其れが即ち言詮不及の處よと弄す。頼ひに南泉の能く令を擧ぐるを得て、令は謂ゆ

る正令である。滌僧本分の號令、即ち棒を用ひ、喝を用ひ、都べての意路も言詮も皆勦絶して痕迹なからしむる所の作用。若しも南泉禪師が此際に當りて此の正令を擧行せられなかつたて有らうならば、兩堂の首座は相抱いて無間地獄へ眞逆さまに矢を射る如くに落ちるであつたらうと言ふ。圓悟は拂子を擧げて云く、「へに這箇に似たり、どうじや南泉が刀を揮つて猫兒をサツクと斬つた。機合は今わが此の拂子を斯う擧げたやうなアンパイぞと示された。刀を揮つて猫を斬るのと拂子を以て虚空を拂ふのと同じ姿であると云ふのぞけれども、王老師猶ほ些子に較れり。マダ南泉の令は十分とは言へぬ。ナゼかと云ふに、好箇の金剛王寶劔用て泥を切り去れり。南泉の名劔も杜禪和の爲めに猫を斬つたのでは、劍徳の光を失ふであらうぞと抑へる。一刀兩斷偏頗に任かす。一刀兩斷は辨ずるまでも無い。偏頗と云ふは不正の貌と註して一方に片よることであるが、今は世人が彼れの此れのと色々いふても、其のやうなことは一向に構はないと云ふ意味で、偏頗に任すと云はれたものと見える。古人にも色々説があるけれども、此れこそ妥當と思はれる。註脚も見あたらない。着語に百雜碎と一刀兩斷の様子を評し、忽ち人あり、刀を按住せば、看よ、他は

什麼をか作さん、この按の字は抑なり止なりと云ふ義で、南泉が將に猫を斬らんとする刹那に若しも傍から遽かに其刀を抑へ住めて斬らせないやうにする人が有らば南泉は何うするつもりで有つたらうぞと云ふのである。放過すべからず此に於て南泉が設ひ一刀兩段にしたとしてもマダ許せぬ所があるぞと言つて、便ち打つと上來の葛藤を悉く勦絶してしまふた。

第六十四則 南泉問趙州

本則 舉南泉復舉前話問趙州也須是同心同志始 州便脫草鞋於頭

上戴出泥不免拖南泉云子若在恰救得貓兒者少○將錯就錯

趙州觀音院の從諗禪師は前にも屢々あつた通り、前則の主人公たる南泉和尚の弟子である。然るに彼の猫を斬つた時には他出して不在であつた。そこで後に趙州が歸つたのを見て、南泉が前話を舉げて趙州の意見を問ふた。若し其時に貴公が兩堂の内に居てあつたならば、何うするつもりであつたか言ふて見ると云ふたやうな

アンバイであつたらう。着語に也、た須らく是れ同心同意にして始て得べし、他人ては到底相談にならぬ、同道の者まさに知る。此の着語も重複であるから刪りたい。そうすると州すなはち草鞋を脱して頭上に戴いて出づ。これが即ち趙州老漢の意路不到言詮不及なる所を表明せられたる轉處であつて、彼の南泉の一刀兩段に猫を斬却したのと、全く同道唱和のところ木佛が歌へば石佛が舞ふたやうなもので、到底人情凡智を以て彼れの此れのと測り知るべきとでは無いけれども、圓悟は更に一步を進めて其の足に穿くべき草鞋を帽子のやうに頭に戴くと云ふやうな餘計なことをするだけハヤつまらぬぞといふので、免れず泥を拖き水を帶ぶ畢竟子供だまかしよと抑へた。前の六十二則の三門を將て燈籠上に來たすの著語に、屎臭氣を免かれずと言ふたのと同じ味ひである。南泉云く子若し在りなば恰かも猫兒を救ひ得たらんに、あの時に貴公が居合せてあつたならば、猫を斬らずに濟むのであつたものを惜いことをしたと云ふたやうなアンバイ、此れ亦た若しも語路を逐ふて妄想分別したならば、種々様々なる疑團に疑團が重なつて何とも解決のつかないことになるのみであらう、ナゼかと云ふに南泉の言葉を以て考へて見れば、猫

兒を救ひ得たらんにと云ふうちに何となく殺したのは悪かつたが已むを得ない
 場合であつたと悔やむ意味が含んで居るやうに聞える若しも其の様な人情を容
 れ得る話であるならば南泉が猫を斬たのは殺生戒を犯したのであると云はなけ
 ればならぬことになる其他に此れと同様の疑問が幾等も起つてくるが結局その
 様な人情凡智を以て彼れ此れと論量すべきことでは無い只これ鐵槌子と參究す
 るより外は無の着語に唱拍相隨ふ唱と云ふは歌を謠ふこと拍と云ふは手を拍て
 調子を取る事即ち南泉の唱に趙州の拍さてく面白曲であると言ひ知音の
 者少し斯う好く調子の合ふ相手は多く得がたいとほめて置て更に錯を將て錯に
 就くと抑へる趙州が草鞋を戴いたのが既に錯であるに其れを南泉が斯のやうな
 ことを言ふのは錯の上の上塗りぞと斥ける。

頌 公案圓來問趙州

○言猶在耳○不消更斬

長安城裏任閑遊

得恁麼快活

休○信手拈來草不可

草鞋頭戴無人會

○風也○明頭也合暗頭也合

歸到家山即便

○脚跟下好與三十棒○且道過在什麼處○只爲一箇無

公案圓かにし來て趙州に問ふ兩堂の首座が猫兒を争そふて居るのを一刀兩斷
 に其猫を斬り棄て、争ひの根源を斷ち切つた有様を公案を圓かにしたと言ひ
 其既に圓かにして畢つた公案を更に拈じて趙州に問て二重の公案にせられた圓
 悟は言猶ほ耳に在り其のお話ならばモ一聞き飽きましたと排ひ更に斬ることを
 消せず、の消せずといふ言葉は須むすとか要せずとか云ふのと同じ意味で其
 のやうに一疋の猫を幾たびも斬るには及ぶまいと抑へ喪車背後に藥袋を懸く死
 人に藥を飲ませて何の効があると罵るさて又趙州は南泉から厄介を持ち込まれ
 たのを知らぬ顔して長安城裏閑遊に任す頭に草鞋を穿いてノコノコと出かけて
 往つたいかにも太平無事の民て義皇以上の人も謂ふべき風采である故に着語
 にも恁麼に快活なるを得たり又恁麼に自由なるを得たりと言ふ何故に斯く快活
 自由なることを得たるかは吾人の尤も參究すべき所ぞ手に信せて草を拈し來る
 你をして恁麼にし去らしめざる可からずマダ南泉が前話を舉し終らぬにハヤ草
 鞋を頭にのせたと云ふ調子が少しも分別に涉らずに手に任せて路傍の草でも引
 きぬいたやうな工合それが即ち恁麼に快活自由にならねばならぬ所ぞと云ふの

である然るに其の草鞋を頭に戴ける。趙州活機輪の轉處を人の會する無しと雪竇が言ふ其れは其はず此の如き意路不到の處は元來人の會すべきことでは無い、不會すなほち蓋天盖地である、着語に也、た、一箇半箇の會する底もあらうぞ、此の圓悟の居ることを忘れるなど云ふたやうなアンパイけれども別に是れ一家風て趙州の左右は亦た別段ぢやとほめ、明頭も也、合し、暗頭も也、合す、謂ゆる左右逢原て何らからでも自由自在と讃歎する飯て家山に到つて即便ち休す、元來此人は途中の人ては無い、十方法界の大安樂窩たる家郷の山房に歸臥して居るのであるから何事にも聊かも滞ふる所なく斯く快活自由に働けるのである譬へて見れば己れの家の便處へは夜半に燈火なしでも間違ひなく往けるやうなものである始め泊つた道中の宿屋で夜中にマゴクするやうなものは無い、圓悟が脚跟下好い、三十棒を與ふるにと言ふ、家山とは何處のことぢや別に家山に飯るには及ぶまい、十方法界ゑらぶべき處は無いに其れを擇ぶと云ふので、三十棒を與へると云ふ其の説明を次に且く道へ過は、什麼の處にか在る、只、你、が、風、な、き、に、浪、を、起、す、が、爲、め、な、り、ニ、ヤ、ー、ニ、ヤ、ー、と自由にさせて置けは好いのに猫を斬たり、足に穿くべき草鞋

を頭にかぶつたり、其れを珍らしさうに持ち出して謔ひ囃したり、南泉も趙州も雪竇も皆これ風なきに浪を起すの罪人である、彼、此、放、下、彼、れ、も、此、れ、も、只、放、下、し、て、打、ち、棄、て、置、け、ば、好、い、に、只、恐、ら、く、は、恁、麼、な、ら、ざ、ら、ん、然、し、本、統、に、家、山、に、飯、臥、す、る、こ、と、が、出、來、ま、い、若、し、恁、麼、な、ら、ば、也、太、奇、そ、れ、が、本、統、に、出、來、れ、ば、隨、分、さ、し、ろ、い、ぞ、と、吾、人、參、學、の、者、に、對、し、て、色、々、と、參、究、の、要、路、を、指、示、せ、ら、れ、た、。

第六十五則 外道問佛有無

垂示無相而形。充十虛而方廣。無心而應。徧刹海而不煩。舉一明三目機。銖兩直得。棒如雨點。喝似雷奔。也未嘗得向上人行履在。且道作麼生。是向上人事。試舉。

宇宙萬象の本體は如何なる形相と云ふ定りは無く、而して如何なる姿にても顯はれる、其の様子を無相にして、而して形はれ、十虛に充ち、而して方廣なりと言はれた、十虛といふは十方虚空を省略したので謂ゆる無限の空間といふこと、方廣の

方は方正だの方等だのと續いて少しも誤りの無いこと、廣は讀て字の如く限りなく謂ゆる十虛に充滿して一切萬物に悉く行き渡つてること、偕又それは宇宙萬象の本體が物質となつての姿であるが、更に精神的の作用となつては無心にして應ず。本より本體に知慮分別のあるべきでは無いに依て無心である、無心そのまゝに一切諸法に應じて千萬無量の心的作用を發し、自由自在の活動をする、而も刹海に徧くして而も煩はしからず、て刹といふは世界のことで、刹海と云へば十方虚空の間に無量無邊の多くの世界のあることを、大海に多くの島のあるに譬へたのである、さて其の限りなき多くの世界に在る所の限りなき一切衆生に、普ねく充滿瀾淪して千萬無量の作用を爲しつゝ、少しも其の本體に於て煩悶も惱苦も無いのが宇宙の大精神の妙處であるぞと云ふ此の大精神を本來具有して居る吾々人類が其れを實用し得ずして煩悶惱苦して居るのを、煩惱生死の凡夫と云ひ、其れを實地に應用し得て自在無碍なるを菩提涅槃の聖者と云ふのであるが、其の實地應用自在無碍の人であつたならば、舉一明三目機銖兩直に得たり、棒は雨點の如く、喝は雷奔に似たるの活作略をも爲し得るであらうけれども、更にモ一一段すなはち

百尺竿頭更に一步を進めて、其の實地應用自在無碍の聖者と云ふやうな、有り難きうな名稱も快活らしい作用をも超過した本體其儘の場處には及ばぬぞと云ふことを、也た未だ向上人の行履に當得せざること、在りと言はれた、舉一明三目機銖兩と云ふことは第一則の垂示にもあつたので、非常に俊發伶俐であるといふこと、向上人の行履といふは、今は本則の世尊良久を謂ふのである、そこで且らく道へ作麼生か、是れ向上人の事試みに舉すと本則を提起せられた。

本則 舉外道問佛、不問有言、不問無言、雖然不是屏裏人、也有些子香、雙船倚空飛、却是不同世尊

良久、炎動世界、其聲如雷、坐者立者、皆動、他不得 外道讚歎云、世尊大慈大悲、開我迷雲、令

我得入、恰倒漢一撥便、憐憫○盤盃明珠 外道去後、阿難問佛、外道有何所證、而言得

入、不妨令人疑、若○也要、大家知、銅鑪著生、鐵○ 佛云、如世良馬見鞭影而行、且道喚什麼、作鞭影、○打一

要○拾得、口喫飯

支那に於ては佛教の書籍を内典と稱し、其他の儒教道教および諸子百家の書籍を

すべて外典（外典）と謂ふが如く、印度に於ては佛教をのみ内道とも内明とも謂ふて、其他の婆羅門種族等の信奉して居る都べての哲學とか宗教とか云ふべき種類を悉く外道と稱するのが佛教を信奉する者の常である。今も其の或る外道（外道）の一人が佛すなはち釋尊に問ふ有言（有言）を問はず無言（無言）を問はずと此れは實に妙な問ひやうではある。此の外道中々一筋繩ては縛られない奴（奴）て、若しも釋尊が何とでも言はれたならばイヤ其れは有言（有言）で御座る。拙者は其れを問ひませんと詰り、若しも何んとも言はれなかつたならば其れは無言であるから、拙者の問ふ所て御座らぬとやりこめて、いづれにしても釋尊に閉口頓首させやうといふ野心と見える。かやうな難問に出あふては如何なる者でも當惑するであらう。そこで圓悟は然も不是なりと雖も、屋裏の人たり也。た些子の香氣あり、未だ本統のものとは謂はれないけれども、モ一我が佛法中の人になつて居るのでや、やはり聊か香ばしい所があるぞと褒めた。又双劍空に倚て、飛ぶ有言も問はず無言も問はずと、兩刃を左右に振りかざしての問であるぞと言ひ更に頼ひに、是れ不問、これが有言をも問ひ無言をも問ふのであつたならば、問ふ者も問はれる者も更に厄介なことであつたらうが、好いアンバイに問は

ずと云ふのであつて、弄した。然るにサスガは三界の大導師じや、世尊（世尊）。良久とすましたものである。是れは他の書には世尊默然としたのもあり、又は世尊據座となつて居るものもある。然るに雪竇は良久を採られたものと見える。默然ならば無言に似て居る、據座といふはチョイト座（座）り直すやうなことをうな、然るに良久といふは將に何か言はんとするが如くてあつて言はず、言はぬけれども唯の默然でも無い様子である。即ち有言にも落ちず無言に落ちず、唯是れ良久である故に雪竇の弟子の天衣和尚は之を頌して、吹毛匣裏冷光寒しと言はれてある。實に匣（匣）の中に正宗の寶劍を容れてあるやうなもので、抜き放つて振りかざさないでも觸（觸）ればザクリと斬れる有様が見たばかりでも身の毛がよだつ。今この世尊の良久は無言とも謂はれねば有言とも謂はれないで、垂示に謂ゆる無相にして形はれ、無心にして應ずる當躰まことに歴々分明である。圓悟は世尊を謗する、莫れと着語した。若し萬一にも世尊の良久を彼れの此れのと凡情を以て測量分別したることならば、謗佛の大罪に落ちるであらうぞと學人への注意、又其聲雷の如しとある。良久と云へば無言默然のやうに思ふもあらうが、其聲の轟くことは雷の震ふが如くぞと云ふ風外老

人は此着語を後人の妄添として斥けられたナゼならば其聲が聞えては有言に屬するからであらう。座者立者皆他を動し得ず此の良久の確固不拔さかげんは坐つて動かしても立て揺がしても到底一厘一毛も動かすことの出来るものでは無い。外道讚歎して云く世尊大悲大慈我が迷雲を開きて我をして得入せしむ。さすがに圓悟が最初から屋裏の人と鑑定しただけあつて時節因縁の純熟した宿善開發の人であつたと見えて世尊の良久を讚歎して蔭入ることが出来ましたと言ふた。此れは一昧に如何なる處を如何やうに讚歎したのであらうぞ。又如何なる處へ何の爲めに入つたのであらうぞ。そこが即ち人々各自に實參實究すべき所であらう。統大智が斧頭元是鐵と着語して居るのも面白い。圓悟は伶俐の漢一撥すれば轉ずと其頓悟の速かさをほめ更に其の轉がりかげんを盤裡の明珠お盆の上で珠をころがす様であると讚歎した。先づ此れて本則は濟んだのであとは阿難の質問に釋尊の慈悲である。外道去て後に阿難俄に問ふ外道何の所證ありて得入と言ふ。阿難陀尊者は釋尊の從弟であつて弟子になり三十年間常隨昵近して日々のお説法を悉く聽聞し且つ皆譜記して居たと云ふほどの人であるけれども釋尊御在

世の間には遂に悟が開けず後に法兄の摩訶迦葉尊者に提撕せられてやつと印度に於ける第二祖になられた人である。乃ち平生のお説法で聽聞する所の道理に涉り言詮に表はれたことであらうならば解りもすれば記憶も出来るのであらうけれども今日の外道と世尊との問答になつては全たく盲人の垣のどきと云ふ有様で、さすがの阿難にも何の事とも合點がゆかぬ。第一外道が有言を問はず無言を問はずと云ふ問ひやうも合點のゆかぬ問ひかたであれば其れに對して世尊の良久も何の事やら少しも分らぬかて、加へて其の合點のゆかない良久を有り難そうに、大慈大悲我が迷雲を開きて得入せしむと御禮を言ふた外道の様子、實に狂人と狂人との出會のやうで何の事とも愈々分らない。そこで到頭この質問と出かけたのである。抑も此れは阿難尊者の昔話では無い、吾々も互ひ皆悉く此に於て一大疑問を起さねばならぬので、若しも又其の疑ひも起らぬほどのことであつたならば、此の碧巖の參究などは實に何の詮もない暇つぶしに過ぎぬのである。そこで圓悟も妨げず人をして疑着せしむと云ひ也。大家の知らんことを要すと言ふて學人を勸誠し更に錮鏑に生鐵を着くと阿難を抑へた。錮鏑といふは鑄物師が鍋や釜な

どの穴を塞ぐために鑄掛いかけをすることである。鑄掛いかけをするには鐵てつを煮立て、湯にしておいて無くては穴を塞ぐことは出来ないののであるに、今阿難が已れの力で分りもせぬことを質問するのは生なまな鐵てつを鍋釜の穴へ着けたやうなもので、到底何の役にも立つまいぞと云ふのである。吾々も互ひ人々各自に我は果して熱鐵なりや將た生鐵なりやと反省せねばなるまい。佛ぶつ云いく世よの良馬りやうばの鞭影べんえいを見て而して行くが如し。誠に慈悲の深い御教訓である。此れは阿含經の中に四種の馬と云ふ喩があつて、學人の機根に四段の階級があると云ふと示された。其の第一が即ち鞭影を見て直に驚くとあり、次が鞭が毛に觸れて始めて驚く、其次は鞭が肉に觸れて乃ち驚き、最下等に至ては鞭が骨に徹して方に驚くとある。然るに今この外道は實に最上俊發の機根であるに依て、わづかに鞭の影をチラリと見たばかりで、已に是の如く大悟の境に達することが出来たのである。その御諭してある、圓語は且らく道へ什麼を喚てか、鞭影と作すと、拶着せられ、更に打つこと、一拂子とある。此れが即ち圓悟老漢が鞭影を吾々に示されたのであるが、吾人は如何に其の鞭影を見るべきであらうか、棒頭に眼あり、明なること、日の如し。此の着語も取らぬと風外師は言は

れた、いかにも御尤なことと思ふ。眞金を識らんと要せば、火裡かぢに看よ、時節因縁純熟したら眞金の如き外道が、世尊の智火の炎々たる爐中に投じて、始めて其の本色をあらはすことが出来たぞと云ふ。此の語意は差支ないけれども、今さら此へ斯のやうな着語の入用は無いかと思ふ。これも大かた後人の書き入れて、もあらう。口を拾得して飯を喫せよ、此れは餘計なことを言はずに其口で飯でも食へと云ふ。惡口で釋尊が阿難に向つて解りもせぬことを諍々と婆々談義して居られるのを抑へたのである。しかしながら釋尊が伶俐なる外道に對しては、良久の活作略あり、遲鈍なる阿難に對しては亦た此の諍々たる教訓ある所すなはち世尊の世尊たる所以をも知らなければならぬ。

頌 機輪曾未轉在道裏○果然 轉必兩頭走不落有必落無○不東則 明鏡忽

臨臺遠見釋迦老子○一撥便 當下分妍醜盡大地是箇解脫門○好與 妍醜分兮

迷雲開故二線道○計爾有箇轉 慈門何處生塵埃退後○迷來也 因憶良

馬窺鞭影我有拄杖子○不消爾與我○且道什 千里追風喚得回騎佛殿出三門去

可放可放即不即不喚得喚得回鳴回鳴指三下指三下
前不擇村後不送店○勢折拄杖子○向
什麼處去○響雷聲其大雨點全無

機輪會て未だ轉せず機輪の二字を圓悟が解釋して機は乃ち千聖の靈機輪は是れ
從本已來諸人の命脈と言はれてある要する所は諸佛も衆生も俱に本來具有して
ある所の本心本性のことである其の本性のとてある其の本心本性が縁に隨ひ感
に赴いて自在無碍に活動する姿即ち垂示に謂ゆる無相にして形はれ無心にして
應ずる様子を機輪と名けたのであるさて其の機輪は本より無相無心であるに依
て如何に形はるゝとも如何に應ずるとも會て未だ本位を動轉すると云ふとは無
い其れを言説の上で云へば終日終夜饒舌つゞけに饒舌しても其儘に有言でも無
ければ無言でも無いと云ふとにならねばならぬ要する所は轉の一字に在る即ち
今謂ふ所の轉の字は轉變の轉の字で遷り變ることである遷り變るといふにも様
々あるが今は其の根源の本分に背いて枝葉の末に移り走ることである譬へば花
は咲きもすれば散りもする其の咲くと云ひ散ると云ふは遷り變るやうであるけ
れども咲くは咲くまゝに花の本分であり散るは散るまゝに花の本分であるから
其の本分その儘の作用は會て未だ轉せずである然るに若しも其の咲くと云ひ散

ると云ふ反對の姿に付き廻つて咲くは好いとか散るが悪いとか云ふやうな揀擇が
あつたならば其れが即ち動轉したと云ふものでハヤ花の本分に遠くして遠くな
るのである雪竇和尚今只此の機輪會て未だ轉せずと云ふ一句を以て外道が有無
を離れて問ひ釋尊が本分を全提して示された様子を頌し盡された圓悟は這裡に
在りイヤ其處で御座ると受けたアンバイ又果然として一絲毫をも動せず貧乏搖
ぎてもすることでは無いと大賛成を表した第二句に轉ずれば必ず兩頭に走る若し
も此れが一絲毫をも動轉すれば忽ち必ず有言とか無言とか迷とか悟とか苦とか樂
とか生死とか涅槃とかいづれ兩頭に走りて本分に背いて了ふことになるぞと警
賊せられた着語に有に落ちざれば必ず無に落つと云ひ東せざれば西すと云ひ
皆經論の註解を見るやうな言ひ草で圓悟の下語とは思はれない終りに左眼半斤右
眼八兩と云ふだけが着語らしいが兩頭は何れに走りても本分に背くの罪過は同じ
であるぞと云ふのである明鏡忽ち臺に臨むと此れは世尊の照鑑に十方三世の一切
諸法歷々分明別して現に外道の肝膽を臍の下まで明かに照破せられた様子を頌し
たのである着語に還て釋迦老子を見るやどうじや釋迦牟尼佛の釋迦牟尼佛たる

所が能く見えたと學人への抄着、一撥すれば便ち轉す釋迦老子がチヨイと手を掛ければ外道邪見の車輪も忽ち一轉して、入正定聚の佛乘となるぞと云へば又その臺に臨める明鏡に付き廻るであらう破也、破也、敗也、敗也、打ち毀してしまへ叩き破つてしまへと、明皎々たる鏡を粉微塵に碎いてしまふた當下に妍醜を分つ、釋迦老子の明鏡に照されては、如何なるものの妍と美くしいのも醜と見悪いのも歷々分明毫も味ますことが出来ぬと云ふ、着語に盡大地是れ箇の解脱門の妍醜分明にして盡大地の一切諸法毫も味まさる所それが即ち直に解脱の姿である、花の咲くは咲くまゝに他の束縛は受けぬ紅葉の散るは散るがまゝに誰も繫留することが出来ぬ、盡大地何物か解脱ならざらんとの意、しかしながら其の妍醜といふ言葉に付き廻つて妍と聞けば好いやうに思ひ醜と聞けば悪いやうに思ふものが有つたならば放さぬぞ、一鉢に雪竇が妍醜を分つなどと言ふたのが宜くないと云ふのて好し、三十棒を與ふるにと奪ふた、遠て釋迦老子を見るや釋迦老子は妍か醜か能く見分けられるか何うじやと門下に一抄妍醜分れ迷雲開く已に外道は世尊の明鏡に妍醜を照らし分けられて、從來の迷雲は忽ちに掃ひ盡して本分に歸入するこ

とが出来た、着語に一線道を放つと外道の得入をほめ、又備に箇の轉身の處あることを許すと賛成したけれども尙ほ争奈せん、只是れ箇の外道あるをと奪ふた、ナゼ奪ふたぞ元の外道に何の不足ありて、迷雲を開いたとか得入したと東奔西走するのであるぞと、本分の上から吾人に參究せしめんとの警策であらう、慈門何の處にか塵埃を生ぜん、外道の迷雲を開いて得入せしめられた世尊の大慈大悲、すなはち有無を離れて良久せられた當躰には、只に有言無言の沙汰が無いばかりで無い、六祖の謂ゆる本來一物て何の處にか塵埃を牽かん、香渺なる長空一點の雲影を留めざるの風光である、圓悟が徧界曾て藏さず何處も彼處も開け放して宇宙萬象丸出しじや、退後退後、これは前にも有つた天子の行幸に警蹕する言葉で、下に居れ下に居れとか又は下がれ下がれとか云ふやうなこと、只今唯我獨尊の主人公と通りであるぞ、森羅萬象みな下に居れ下に居れと云ふアンバイ、唯我獨尊の主人公とは誰様かと思ふたら達磨來也、イヤ碧眼紫髯の達磨殿であつた、因て憶ふ良馬の鞭影を窺ふ、を其れに就て憶ひ出すのは良馬が鞭影を見て走ると云ふことである、と世尊が阿難に諭されたと言葉を諒ふて置て而して次の結句を喚び起すのである、着語

に我に拄杖子あり、爾が我に與ふるを消ひず、自分に必要な道具は自分に持て居るから、他人の道具を貸してもらふには及ばないと云ふ、即ち人々おのづから光明の在るありの意で釋迦や達磨の御厄介にはならぬぞとの見識とは云ふもの、且く道へ什麼の處か是れ、鞭影の處、什麼の處か是れ、良馬の處、空想に走つて實地を踏み誤まらぬやうにせよと學人への警誡、千里の追風喚び得て回す、外道の俊發なるを千里の追風に比して、追風といふは秦の始皇が七頭の良馬を飼つてあつた中の隨一の名馬である、其れが一日に千里も走るといふので千里の追風と謂ふたのである、其れほど俊發の外道であるから、若しも邪路に向つて走り去たことならば、どこまでも深く惡道に入るかも知れぬのを如來の大慈悲方便を以て、一良久のもとに忽ち喚び得て頭を回らさしめられた、圓悟が佛殿に騎つて三門を出て去ると言ふ、千里の馬などを用ひずとも佛殿に騎つて三門を出て去ることも自由なものぞと、更に一轉して示された、とかく良馬と聞けば直に良馬に付き廻るのが學人の常習であるに依て、かくも深切に轉處を開いて指導せられるのである、更に身を轉せば、即ち錯さる、喚び得て回すと、雪竇は言ふけれども、喚ばれて回るやうではもう役には立た

ぬと抑へた、放過せば、即ち不可如何に良馬であるなどと云ふても、少しも油断は出来ぬぞと言ひつゝ、ボカリ鞭ち打つ、これが圓悟の馬の御しかたである、人々各自に斯く油断なく意馬を御せよと云ふことぞ、喚び得て回らば、指を鳴らすこと、三下、此れは亦た雪竇が彼の千里の追風に向つての最後の御しやうである、若しも彼れ外道が本分の弟子であつたならば、如何に喚び戻されたからと云ふても、頭を回すべきては無い、元來諸法住法位世間相常住である、花は紅に何の不足がある、柳は綠に何の不足がある、然るに、若しも花が綠に喚び得て回され、柳が紅に喚び得て回されると云ふならば、其れは天地の大變ては無いか、今も亦た其の通り、外道に何の不足ありてか、佛道に得入するぞ、若しも外道の捨つべきありて更に佛道の取るべきありと言はし、業く已に第二第三に落在したことを、故に雪竇は三度爪弾きして斥ぞけやうぞと言ふたのである、指を鳴らすと云ふことは、常には彈指と謂ふ、李長者の華嚴合論に、彈指に去穢と驚覺との二義あると云ふてある、驚覺といふは他人の内などへ入るときには、必ず其室外に於て先づ彈指三下して入ると云ふのが禮である、便處に入るときなどにも、彈指するが好いと云ふことである、去穢の方は何なり

とも穢らはしい物など見たり聞たりしたときに、彈指して其の穢氣に浸されないやうに氣を轉ずるためである、今の鳴指三下も其の種類で、外道が世尊の良久に動かされて悟を開いたなどは、イヤハヤ餘計なことをしたものだ、吾人元來何の不足も無い無垢清淨の獨尊であるにと、本分の姿を示して第一句の機輪會未轉に結歸させたのである、着語に前は村に構せず、後は店に迭せず、喚び得て回すと云ふから前村にも進ませず更に彈斥するのを見れば後店にも迭せずさては往くも復るも都べて皆本位を棄てるのであるから、いづれにもウロウロすべきでは無いぞ、拄杖子を拗折して、什麼の處に向て去る、コレは雪竇が指を鳴らすと云ふた手ぬるさを抑へて、お前は拄杖を折てしまふたのであるか、ナゼ三十棒を興へずに指などを鳴らすぞと責め、更に雷聲甚大にして、雨點全く無し、雪竇は掛聲ばかり大きくて實地ぬるい、虚雷鳴て雨が降らない様であるぞと重ねて抑へる。

第六十六則 巖頭什麼處來

垂示 當機覲面。提陷虎之機。正按傍提。布擒賊之略。明合暗合。

雙放雙收解弄死蛇還佗作者

當機覲面とは對手の顔を見るやいなやチラリと視線と視線が出會ふた途端に間に髪を容れる隙もなく直に陷虎の機を提さぐ、虎を捕へる機合といふものは實に怖ろしいもので、少ししても隙間があれば忽ち虎にワングリと噛み附かれる、眞に命がけのものである、今や宗門の師家たる者が實參實究の學徒を接する手段も亦た其の通りでなければならぬ、正按といふは正面から向つてゆくこと、劍術ならば眞向に振りかざすといふアンバイ傍提といふは正按の反對に横の方から突き込てゆく、劍術ならば刀を斜めに構へて横ッ腹へ斬り込むか足を蹴ぎ倒すやうな機合かやうに正奇出沒いろ／＼の手段を以て、擒賊の略を布く、その機に臨み變に應じて濟度衆生の方便をめぐらすことは戰場に於て百萬の軍勢と奮闘するも同様である、さて又明合暗合、雙放雙收と明と誰にも見える所から正々堂々と押し掛けることもあれば、暗と馬に杖を啣ませて鞭聲肅々夜過河とヒソ／＼攻め寄せることもある、又双放と何も彼も開放して自由に任せることもある、双收と都べて拘束して手も脚も動かさせぬやうにすることもある、かやうに禿僧作家の作

略は千變萬化であるが、其中で今死[○]蛇[○]を弄[○]す[○]こと[○]を解[○]する[○]は他[○]の作[○]者[○]に還[○]す[○]こ
れは全く虎を陥し、いれるとか賊を擒ふるとか云ふのは大に様子の違ふただけ
のことで、已に死せる蛇を活かして龍に化せしむることが出来ればまた一入の
慰みといふものじや併し其ういふ藝當は巖頭や雪峯の如き人にお任せ申すが好
いと云ふて、本則を拈起した。

本則 巖頭問僧什麼處來未開口時納取快了也僧云西京來一箇小

頭云黃巢過後還收得劍麼平生不曾做草賊僧云收得取也

因近前云也須識機宜始得上僧云師頭落也只見

大笑天下稱僧不奈何僧後到雪峯依前顯

僧云巖頭來果然納峰云有何言言

僧云雪峯打三十棒趕出雖然釘鐵因甚只打三十棒

僧云豈然釘鐵因甚只打三十棒

巖頭和尚と雪峯和尚とのことは前の第五十一則の處で大略申して置いた通りの
ことである、さて或時一人の衲僧が巖頭和尚の處へ參禪のため相見に來た巖頭が
直に其僧に向て什麼の處よりか來ると例の如くに其の僧の脚下を點檢にかゝつた、
着語に未だ口を開かざる時に取缺を納れり、とある、其の僧がまだ何とも答へ
をせぬうちにハヤ腹の底まで見透されて、とうに取缺し了つて居るやうに見える
の豫言である、然るに巖頭が斯やうな拶問を起されたのは、觸體を穿過す魂のぬけ
た枯骨を斬て見るやうなものよと冷かし、又來處を知らんと要するも亦た難から
ず、問ふて見るまでも無いことよと抑へた僧云く西京より來る、着語に果然それ見
る西京から參りましたなどと正直は正直であらうけれども、撥草瞻風の衲僧たる
處は少しも無い、一個の小賊に過ぎないに依て陷虎の機も擒賊の術も必要は無さ
そうであるけれども巖頭の慈悲の深さ更に黃巢過ぎて後に還て劍を收め得たり
や、と問ふた、コレは故事がある昔し曹州に黃巢といふ者があつて、最初は鹽を賣る
商人であつたが任俠氣のあるもので、遂に土匪の頭になり王仙芝といふ友人と黨
を結んで處々方々を荒し廻つて居たが、或時途中で劍を拾ふた取上げて見れば、天

賜黃巢といふ銘が刻んである、其れから一段と自信が強くなつて自から衝天大將軍と名乗り出し、長安を陥落させて自ら皇帝と稱し國號を大齊と名け年號を大統と建てるに至つた、けれども其の運は長く保てないで程なく李克用に破られて滅亡してしまふた、今この僧が西京から來たといふに就て、其の西京は昔し黃巢が一旦占領してあつた長安であるが、たとへ黃巢が滅亡しても其の天より賜はつたといふ劍は遺つたであらうに、其の劍を貴公が持て來たかと云ふの間である、サ、此の劍は只一時皇天から黃巢に賜はつたのみでは無い、無始劫來未來永劫人々具足箇々圓成殺活自在の那一劍であるから、今さらに收得の不收得のといふ沙汰のものでは無い、然かし會つて承陽大師が此法は人々分上ゆたかに備はれりと雖も、修せざるには現はれず證せざるには得ること無しと言はれてある通り、いかに先祖傳來の正宗の名刀を身を放さずに佩びて居ても、遂に劍術の稽古をしたことが無く、抜くことさへも知らないものには、播木ほどの用にも立たないばかりでは無く、却つて其のために大怪我をすることがあるやうなもので、身を衛るべき道具が中々に身の禍となるのである、偕て圓悟の着語に平生會つて草賊を倣さずとある、巖

頭は餘程の大賊であるに依て斯やうな問を起したのは中々油斷がならぬぞと言ひ、又好大膽と評した又此の二つの着語の間に頭の落るを願ひ、みず便ち恁麼に問ふとあるのは恐らくは、草賊を倣さずと云ひ好大膽と云ふ二つの着語を注解的に後人の書き加へたのでは無からうかと思はれる、僧云く收得す其の天から賜はつた寶劍は確かに拙者が持て居りますと立派に答へた、本より人々の具足て持て居るには相違なからうけれども、其れが謂ゆる大怪我の種にならねば好いが、圓悟が敗也モ、其れで大失敗してしまふたぞ、ナゼかと云ふに、未だ轉身の處を識らず巖頭に收得すやと釣られたのを外すことが出來ないで、直に其の收得といふ言葉に喰ひ附いて、ハイ收得して居りますと云ふやうなことは、モ、早や已に大怪我をしてしまふたのである、けれども此の僧のやうな、茅廣の漢が世間には麻の如く、粟の如くに多くある、賊になさけない事ぞと圓悟が歎いて吾々を警省せられた、茅廣といふは疎荒といふも同じことと疎漫荒涼の意味、他の本には謀廣と書いたのもあるが、謀廣と云へば虚言妄語することであるやうな、巖頭頭を引て近前して云く、圓然らばも前が其の劍を掛て居るか、其れならば此の老僧の頭を斬り落して見ろ

と云ふので、ヅカ〜と其の僧の側へ近寄つてエーと聲を掛けた此時の圓の字は重い物などを持ちあげたりする時に力を入れるためにヤツとかエーとか掛け聲をする姿であるさうな、大智和尚は此處へ毒氣射人と着語した實に恐ろしい機会である、圓悟は也、た、須、から、く、機、宜、を、得、て、始、て、得、べ、し、是の如き作略は巖頭のやうな能く機宜を識た人てなくては出来ないうことであると言ひ、實に是れが謂ゆる、陷、虎の機と云ふものであると評し、更に是れ、什、麼、の、心、行、ぞと巖頭の所爲を咎めるやうに言ふて學人に參究の要點を指示せられた、僧云く師の頭落ちぬッレお望み通り和尚の頭を斬り落しましたと、此の僧なか〜豪氣な勢ひのやうではあるが、結局空砲を放つたのに過ぎないのであるから、圓悟は、只、錐、頭、の、利、を、見、て、鑿、頭、の、方、を、見、ず、コレは錐の尖は鋭いものであると云ふことばかり知て居ても、鑿の先は四角である、と云ふことを知らない、と云ふ俗語で、つまり向ふ見ずと云ふ意味である、此の僧が巖頭の頭を引て斬れと言ふたのに釣り込まれて、直に頭が落ちたと言ふた調子が全く出たらめを言ふので、甚、の、好、惡、を、か、識、ら、ん、其の愚には及ぶべからずである、此次に着也とある着語を風外師は上の着語に附けて一句に讀むが好いと言は

れてあるが、イツソのことに削除してしまふ方がよからうと思ふ、巖頭呵々大笑す、此の呵々大笑が實に恐ろしい、圓悟は、盡、天、下、の、稱、僧、も、奈、何、と、も、せ、ず、何故に巖頭が呵々大笑せられたのであるか、只此の僧の愚を笑はれたとばかり上滑りして見過ぐすはけには往くまい、或る場合に於ては相手の作略又は機鋒を讃歎し又は印可する爲めに呵々大笑することも往々にあるのである、今は果して何の爲めの呵々大笑であらうぞ、圓悟は更に、天、下、人、を、欺、殺、す、と言ふた更に、這、の、老、僧、が、師、の、頭、の、落、處、を、尋、ぬ、る、に、得、ず、とある彼の僧が師の頭落ちぬと言ふたが、其の落ちた頭は何處へ往つた、其の落ちたと思ふた頭が呵々大笑して居る、此れは彼の僧だけの責任では無い、吾々も互もろともに巖頭の頭の探索と呵々大笑の聲が何處から何の爲めに發したのであるか取り調べて見ねばなるまい、圓悟が此公案を評唱するため、に此れと同じやうな他の一則の公案を擧げられてある、其れは龍、牙、和、尚、が、ま、だ、若、い時のことと、或時德山禪師の處へ往て學人莫、耶、の、劍、に、仗、て、師、の、頭、を、取、ら、ん、と、擬、する時如何と問ひかけた、其時に德山が今の巖頭と同じやうに頭を引て近前し、圓と云ふた、龍、牙、も、亦、た、師、の、頭、落、ち、ぬ、と、答、へ、た、が、此時に德山は呵々大笑では無くて、

便ち方丈に歸るとある、何も言はずに笑ひもせず黙して方丈へ引込てしまはれた、龍牙は其れて大勝利を得たつもり立派に徳山の頭を斬り落したつもりで居たものと見えて、其後に洞山大師の處へ往て其の話を自慢らしく言ふた時に、洞山が我に徳山の頭を借し來れ、お前が徳山の頭を落したと云ふなら其頭を私に見せてくれと言はれた、此時龍牙は言下に於て大悟し、遂に香を焚て遙に徳山を望んで禮拜懺悔したと云ふことである、又此の巖頭に向て師の頭落ちぬと言ひつゝ巖頭に呵々大笑せられた僧も、彼の龍牙の若い時と全く同じ程度であつたものと見えて、大笑されたのを却て印可でも受けたやうに思ふて居たことであらう、果して僧後に雪峰に到る、雪峰和尚は前の第五十一則でも申した如く巖頭の兄弟弟子で同牀に生死する親い中である、若語に依然として顛預、懺悔と彼の僧の相變らず迂路くと呻吟あるく有様を叱り、更に這の僧往々十分に敗缺を納れ去るとある此の着語も亦た前の顛預懺悔を注解したので後人の書入かと思はれる、峰問ふ什麼の處よりか來る例の如く従前の行履を點檢される、着語に來處を説かずんばある可からずと言ひ也、た勘過を要すと言ふ語意は辨ずるまでも無い、僧云く巖頭より來る、い

つても正直なことは正直に相違ないが、果然として、敗缺を納る、モ、斯れて第一歩から失敗である、峰云く何の言句か有る巖頭の處で何のやうな話があつたぞ、ハヤ此れが擒賊の機であると云ふことも合點のゆかない謂ゆる茅廣の漢であるから、擧げ得るも免かれず棒を喫すること、たとへ如何なることを擧揚し得たからと云ふても到底雪峰に出あふては三十棒を食ふより外に致しかたはあるまいと云ふ、果して僧前話を擧す巖頭の頭を打ち落しましたと云ふ話をした、着語に便ち好し、趕ひ出すに、果して雪峰打つこと三十棒、この間抜け坊主め何をぬかして迂路つさあるくぞと云ふので、打て打て打ちますゑた上に趕ひ出してしまふた、前に類則に擧げた洞山は我に徳山の頭を借し來れと眞綿で頭をしめるやうなのであつたが、雪峰の機は全く武斷的で彼の僧ひどい目にあふたが、他の龍牙は、言下に大悟して徳山の之恩を感謝したけれども、此僧は、言下で大悟したやら打たれ損になつたやら、ソコノ結局は分らない、要する所は平素眞實に工夫參究の功を積んで居なければ、如何なる名師の接化にあふても其効が無いことになる、吾々も互でも大に反省せねばならぬ次第である、着語に然も斬釘截鐵なりと雖も、甚に困て、か只

打つこと三十棒のみなるやと圓悟は檢事の上告と云ふ調子で中々其の罪科は三十棒ぐらゐの軽いことでは無いと云ふ更に拄杖子也た未だ折るゝに至らざるゝと在り此の着語も前の註釋のやうて蛇足かと思はれる又其の次の且つ未だ是れ本分にあらず何が故ぞ朝打三千暮打八百モツとく打て打て打ちすゑよと云ふのであるが斯んな着語も無くもがなと思はれる其次の若し是れ同參にあらずんば争てか端的を辨ぜんコレは巖頭と同參の雪峰でなくては斯うは往かないと云ふのであるから有ても邪魔にはならないが其實此れもどうても好い然るに最後の然も是の如くなりと雖も且く道へ雪峰巖頭什麼の處に落在すと云ふ一語はたとへ真に圓悟の着語でないにしても此の公案に參究するもの、尤も注意を要する所である。

頌 黃巢過後曾收劍

○孟八郎誤有什麼用處

大笑還應作者知

一子親得〇能

宜 三十山藤且輕恕

○同條生同條死〇朝三千暮八百〇東

得便宜是落便

有幾箇〇不是

黃巢過後曾て劍を收むと云ふは彼の僧の茅廣に答へた有様を頌したので其の故事は已に本則で申した通りのことである着語に孟八郎の漢什麼の用處か有らんと抑へたたとへ如何なる名劍を收得したからうと云ふても抜くことも知らない孟八郎では何の用にも立たないぞ況んや只是れ錫刀子一口子供玩具に錫で作つた小刀よ其れて何うして巖頭が斬れるものか大笑は還て應に作者知るべし然るに巖頭が頭を引て圓と言ふた時に己れの頭が落ちてしまふたも知らずに却つて師の頭落ちぬなどと譏語を言ふて居るから巖頭は氣の毒で堪らぬので呵々大笑されたのをまだ何のために笑はれたかも分らずに居たのであるが其の笑はれたことは同參の雪峰が能く知つて居ると云ふのである作者と云ふことは前にもあつたが唐宋の時代は詩文の作爲が盛んであつたから何でもエライ人のことを作家とか作者とか稱したものであるそ様な着語に一子親く得たり一子と云へば雪峰が巖頭の弟子のやうにも聞えるが今は只同胞といふほどに見れば好い能く幾人かある此語も前の一子の注解のやうである是れ渠儂にあらざんば争てか自由を得んこれも注解じゃ有ても無くても好いやうに思はれる三十山藤且ら

く輕恕す山藤と云ふは即ち山から伐り出したばかりの藤の拄杖と云ふこと、其の拄杖で三十棒を與へたのは且らく情狀酌量の上の輕罪處分て誠に御仁恕の御沙汰と申すもの、其實は曾て巖頭が呵々大笑の時に彼の僧の命はハヤ無かつたのであるが其れを今雪峰か代つて打たのであるから着語に同條に生じ同條に死す巖頭と雪峰とは異跡同心であると云ふ朝打三千暮八百と云ふは雪寶が三十山藤の輕恕であると云ふたのを賛成して、本分の令であつたならば三千も八百もよと承けたのである、又巖頭の呵々大笑と雪峰の三十棒とは恰かも東家の人死すれば西家の人哀を助くるやうなものよと評し却て與めに救ひ得て活せしむ若し此の三十棒が無かつたならば彼の僧は遂に出身の活路が無かつたのであるが此の三十棒で目が醒めて正氣になれば彼の僧の幸福である、便宜を得る是れ便宜に落つ此の便宜と云ふことも前にあつたかと思ふが、此れは商人が商賣上に於て言ふこと、得便宜と云へば利益のあつたこと、落便宜と云へば損耗したことである、今はその僧が劍を收得して師の頭落ちぬと言ふた處は得便宜のやうであつたか、其れが却つて笑はれたり擲られたりすることになつては是れ落便宜である、又巖

頭や雪峯も笑つたり打たりした處は得便宜のやうであつたが彼の僧が其れて龍牙のやうに言下に於て大悟とも往かなんだのでは、笑つた効もなく三十棒も疲勞もふけと云ふ落便宜になつたぞと、雪寶が揚げたり抑たり、批評である、着語に欺に據て案を結すコレで裁判が濟んだ、悔らくは當初を慎まざりしことを結局落便宜となつたのは、互ひに最初に注意しなかつたからのことである、と云て後學のものも警誡せられた也、た些子ありと云ふ着語に就ては古人も色々と言ふては居るが結局コゝに必要が無い、イッソ削つてしまふが好いと思ふ。

第六十七則 梁武帝請講經

本則 學梁武帝請傳大士講金剛經 講經兄弟來也○魚行酒肆即不無精微門下即不可○近老漢老老大大作道

去大士便於座上揮案一下便下座 是直得大星○進數○似則似武帝愕然

誌公云大士講經竟 也須逐出因始得○當時和誌公一時與也數他機來不著○誌公問陛下還會麼○向外○也好與三十棒 帝云不會 許可也

此の一則は垂示が無くて直に本則である。梁の武帝のことは第一則の下で委しく申して置いた通りのこと。傅大士と云ふは婺州と云ふ處の在家の居士で、名を翁と曰ひ齊の建武四年の生れて、劉氏の妙光といふ婦を娶り普建と普成との二子を生み、雲黄山と云ふ處に手づから二本の樹を栽て双林と名け、自から善慧大士と稱して大乘佛法の中に就ても禪宗の宗乗を達磨大師と同時に唱へた人で、遺著には「傳大士語錄」といふのがあり、別して「心王銘」と題せる一篇の如きは廣く世に流布せられてあり、傳記は傳燈錄の第二十七に委く載せられ、又編年通論や佛祖通載などにも載せられてある。即ち印度に於ては維摩居士、支那に於ては此の傅大士、我日本に於ては聖德太子、これが先づ在家居士の三國傳燈の祖師と申しても好からうと思ふのである。此人が或時梁の武帝に書翰を差出したが、其の冒頭に「双林樹下當來解脫善慧大士、白國王救世菩薩」と書いてあつたのを、梁朝の官員だちが無禮であること云て武帝に進達しなかつたと云ふことである。然るに武帝は常に信仰して居る所の寶誌和尚に向つて、金剛經の講釋を聞きたいと言はれた。寶誌和尚すなはち誌公のことは此れも前の第一則の處で申して置いた通りのこととて、當時無双の碩徳で

あつた。然るに誌公が武帝に申したには金剛經と云ふものは、中々拙僧などに講釋の出来るものでは御座らぬ、幸ひに市中に傅大士と云ふ人が居ります、其人ならば確かに金剛經を講釋することが出来ましやうと言ふた。然らば其の人をと云ふので、傅大士に勅命が下つて、愈々大士が參内して金剛經を講釋することになつたのである。ソコの様子を本則に、梁の武帝、傅大士を、請して、金剛經を講せしむとある。一鉢に此の金剛經と稱するものは、大般若經六百卷の中の第五百七十六卷目の能斷金剛分と題する所を別譯單行して金剛般若波羅密多經と名け、禪宗に於ては朝夕に讀誦して居るのであるが、其れは釋迦老人の説法の精粕を支那の三藏法師が漢字に翻譯した文章に過ぎないのである。然るに眞の金剛經といふものは釋迦老人に説いてもらはないでも三藏法師に譯してもらはないでも、人々具足個々圓成決して他人の講釋などを聞くべきものではない、謂ゆる冷煖自知して獨り莞爾と笑ふ時節が無くては、幾ら講釋を聞いたからでも何の効もあるべきでは無い。然るに今梁の武帝は誌公に聞きたいと言ふて斷はられたにも懲りず、其の誌公の口車に載せられて今度は傅大士の講釋を聞かうと云ふのである。本分の上から見れば實

に一場の滑稽に過ぎぬ、ソコで圓悟が大士を揶揄して達磨の兄弟來也と着語した、達磨が武帝の處へ往た話は第一則の通りであるが、傅大士も亦た其轍を蹈むかと冷かしたのである、更に魚行酒肆は即ち無きにしもあらず、衲僧門下のことは即ち不可ならんと抑へた、此れは在家居士の傅大士のことであるから、魚店へても酒屋へても自由自在に大乘佛教を説くことは出来るであらうが、我が衲僧門下の事は亦た別段であるに依て、いかに傅大士でも到底うまきは働けまいぞと言ふて、後の大士の働きを案外に思はせる稱揚の作略である、ソコで次の着語にも這の老漢、老々大々として這般の去就を作す、自から當來解脱善慧大士など、名のるくせに、武帝の召に應じて講經の座に昇るなどは何といふ醜態ぞと罵しつて、傅大士を全く普通の經師論師のやうに抑へて置くのが、後に大に揚げるの伏案である、大士便ち座上に於て案を揮つこと、一下して便ち下座、さて愈々大士が金剛經を講釋すると云ふことになつたから、武帝を始め百官臣僚みな耳を澄して居たことであつたらうが、大士はカチリと案を一つ擧つたばかりで直に講座を下つてしまふた、此れは現に文字に書いた金剛經にも無法可説、是名說法とあるので、金剛不壞の正體

は到底言説を以て彼れの此れのと談論すべきものには無い、圓悟が直に得たり、火星迸散すること、揮案一下便下座といふ機合寸分の隙間も無い有様を、星の飛ぶのに譬へたのである、斯う稱賛すれば亦た之に取附くものゝあるのを恐れて、似たることは、則ち似たり、是なることは、則ち未だ是ならずと抑へて見せる、尙ほ葛藤を打するを煩さず、能くも言説を用ひずに金剛經を講じ畢られたことよと稱揚する、武帝愕然まことに無理の無いことと愕然されたのが當然である、着語に兩回三度人に瞞せらるゝヤ、ハヤ武帝はも氣の毒なこととて、達磨には無功徳だの無聖だの不識だのと幾たびも驚かされて、又々傅大士に愕然させられるサテも、このお悔みである也、他をして、摸索不着ならしむ、此れは到底武帝に合點のゆくはずは無い、然るに又横合から、誌公が口を出して、陛下還て會すや如何て御座る御合點がゆきましたか、と泣面を、蜂がチクリと刺した實は、此事に就て歴史上の研究になれば大疑問があるので、武帝が傅大士に金剛經を講じさせたと云ふのは、大同年間の事であり、誌公は天監十三年すなはち傅大士が十八歳の時に遷化されたと云ふことであるから、此の講經は誌公歿後凡そ二十年も経てからのことである、と云ふ

ことである、然し今は歴史上の研究などは必要でない、着語に、理に、黨して、情に、黨せず、道理の前には人情を容れないに依て、天子であるからと云ふて遠慮するには及ばないとけしかける、**肱、膊は外に、向はず**如何ほど詰公が氣を揉んでも**肱、膊が外へ**向はないと同様に、武帝に此の事が會せられるものでは無いと抑へた、**肱は胸骨なり**と註し、**膊は股又は脇の骨といふ**字であるどのやうにしても股や脇を外へ向けることは出来ない、と云ふことである、也、た、好し、三十棒を興ふるに若しも本分の上ならば、直に武帝に三十棒を興ふべきであるのにと息ま、**帝云く、不、會、今、更のこと**ては無い、着語に、**可、惜、許、サテノ、致し方もない**次第、**詰公云く、大士講經竟れり**、御丁事なるを断りては、ある、**圓悟が也、た、須、から、く、國を、逐ひ、出して、始て、得べし**會て達磨を逐ひ出した時にも詰公を諸共に逐ひ出すが好いと言ふてあつたが、今も亦た大士も詰公も逐ひ出してしまへは好かつたに、ナゼかと云ふに本分の上から見れば揮案一下も已に是れ第二第三況んや講經竟れりなど、何の贅言を費やして居るのぞと益々宗乘を拖上し、結局此の傅大士と詰公との兩箇の漢は同坑に異土なし、全く一つの穴の狐と言ふ、**コ、に更に歴史上の疑問のあるのは、此の傅大士も實詰和**

尙も皆達磨大師に遭ふたか遭はぬかが疑問である、たとへ遭ふたとして達磨に遭ふた後に其薰陶を受けたものとは思はれない、然るに傅大士の心王銘を始め其他の詩偈などを見ても、全く六祖以後の禪祖の口吻がたしかにあつて、彼の誰か能く知つて居る、橋は流れて水は流れずと云ふ句の如き、臨濟洞山あたりよりも少し後の人の調子である、此れは暇のある人たちに委しく研究して置てもらひたいものである。

頌 不向雙林寄此身只爲他把不住**却於梁土惹埃塵**若不入草中見端的
當時不得誌公老有義律底難見**也是栖栖去國人**正好一快領

雙林に向つて此身を寄せすと云ふは傅大士が自己の住處と定めてある双林樹下に落ち着いて居たら好からうに、ノソノと天子の居る都などへ何しに出で來たものかと云ふて、大士が自家本分の地を去て衆生濟度のために身をやつす有様を頌したのである、着語に、**只、他、の、把、不、住、な、る、が、爲、め、なり**、他とは大士をさし把不住とは取り留らないこと、**今は其の自家本分の**に落ち着いて居らず利他の境界に出

かけた姿を云ふけれども、囊裡豈錐を藏す可けんや、囊の中へ錐を入れて置けば知らずくの間、に尖が出るやうに、濟度衆生の慈悲心を抑へ附けて置かれるものは無い。却て梁土に於て埃塵を惹く兒を怒んで醜を忘るゝ有様、頌し得て誠に分明である。着語にも若し草に入らずんば争てか、端的を見ん釋尊が華嚴自證の座を起つて鹿苑阿舍の境に下り、小乘方便の教を説かれたやうなもので、若し此の草裡に混ざるの方便がなかつたならば、孤峯頂上に獨り自ら尊しとするのみで、遂に宗乘の端的を擧揚するの機會が無からう。埃塵を惹くと云へば何となく殺風景のやうにも聞えるが、其の風流ならざる處、也た風流て、坂の上の田村丸將軍が百萬の醜虜を皆殺しにする手腕を以て、幼ない子供の相手になつて無我無心に遊んで居るやうなもの、其のあどけない所に却て將軍の英風颯として、艸木も靡く氣象が一段と奥ゆかしいやうなものである。此れは何事の上にも吾人の學ばなければならぬ、大切なことである。當時誌公老を得ずんば也た是れ栖々として國を去るの人なりしならん、切角と傳大士が手を垂れて導びかれたにも拘はらず、武帝は不會て畢つたのであるが、若しも其の時に誌公が口を出して此れて本統の金剛經の講釋が濟ん

だので御座ると言ふてくれなかつたならば、又彼の達磨のやうにスゴくと手持ち無沙汰に江を渡りて魏の國へても往かなければならんだかも知れなかつたに先づ、傳大士は御無事でめてたかつたと雪賣の冷かしてある着語に、賊と作て本を須ひず、誌公の此處の働きかたは盜賊が資本いらずに金を贏けるやうなもの、傳大士に揮案一下の資本を出させて置て、傍から講經竟ると利益を占めた、實に此の講經竟るの一言に千萬無量の力がある、彼の從容録に出て居る世尊陞座の話や東印請祖の話などを引て参考すれば、餘程もしろいけれども、長くなるからち預りにして置く、さて又次に伴を牽く底の額兒あり、大士と誌公まことに好いカツタイ仲間である、正に好し、一狀に傾過せん、皆同罪であるから同じ刑罰に處するぞと云て、便ち打つと此れが圖悟の此の公案に對する斷案である、碧巖百則中にも此頃の如きは誠に能く解しよくて、着語も亦た一つも餘計なものが無い、他の諸則の着語も何うぞ餘暇のある時に悉く能く撰擇して、煩はしくないやうにしたものである。

第六十八則 仰山問三聖

垂示 掀天關翻地軸擒虎兕辨龍蛇須是箇活鱗鱗漢始得句
句相投機機相應且從上來什麼人合恁麼請舉看

此の垂示は賓主相契ふ處を論ぜられたのである先づ天關を掀け地軸を翻すと云ふは主人たる人の自行の立ち場て宇宙萬象を自由自在に寝かそうとも起そうとも勝手にすると云ふのである次に虎兕を擒へ龍蛇を辨すると云ふは其の天關を掀倒し地軸を翻覆する底の大力量ある主人公が如何なる賓客を接待しても瀟々落々として力を勞せず其功を實にする様子を示された偈又是の如き主人に對して賓客となり賓客たるの資格を全たうするには須からく之れ活鱗鱗の漢にして始めて句々相ひ投じ機々相ひ應ずるとを得べし尋常容易の手段では到底お相手になれるわけのものでは無い譬へば碁を打つにして見ても將碁を指すにして見ても二段も三段も段の違ふ者が何うして對等の手合せが出来やうぞ今も全

たく其の通りのこと天關を掀け地軸を翻する底の主人には同じく天關を掀け地軸を翻する底の賓客でなくては呵々大笑して歎を竭すわけにはゆかぬ且らく從上來什麼人が合に恁麼なるべき之を古人の賓主應酬に求むれば仰山と三聖との商量であらうぞと本則に結駁した

本則 舉仰山問三聖汝名什麼名實相契 聖云慧寂慧寂 仰山

云慧寂是我封 聖云我名慧然彼此却守本分 仰山呵呵大笑可謂是

○錦上繡花○天下人不知落處何故土曠人稀相送者少○一似塵頭笑又非塵頭笑○一等是笑爲什麼却作兩段○具眼者試定當看

仰山三聖に問ふ仰山慧寂禪師のことは前の第三十四則にあつた通り禪宗五家のうち一番に古い瀟仰宗の第二祖勅賜智通大師である三聖慧然禪師は前の第四十九則にもあつた如く臨濟大師の高足の弟子であるいづれも當時の橫綱力士で兄たり難く弟たり難き作家の衲僧であるが年輩から云へば仰山は先輩であり法系から見ても仰山は百丈の孫であり三聖の百丈の曾孫であるから其位地が多少相違して居たらしい乃ち三聖は前の第四十九則にあつた通り雪峰にも參學せられ

たが、其後に仰山の處へ往つたものと見える。而も此の本則の問答は初めて仰山に相見した時の事と見えるが仰山は疾に三聖の名は慧然と云ふことも知つて居るに相違なく、又一見して直に此れは餘程出來て居ることも謂ゆる龍蛇を辨ずるの眼を以て見留めて居るが、其の出來加減を點検するために、汝の名は何と問ひ掛けた、コゝで汝と斥したものは抑も何物であらうぞ、今現に此處へ來て仰山和尚に相見して居る慧然和尚の肉體のことでは有るまい、謂ゆる父母未生以前の面目を暫らく假りに汝と謂ふたとすれば、其の謂ゆる父母未生以前の本來の面目は名を何と謂ふてあらうぞ、或は眞如とも法性とも又は菩提とも、涅槃とも、色々の名は附けられてあるが、其のやうな古くさい名では仰山老人なか／＼承知しないのみならず、其れから後の商量が尋常容易のことでは済むまい、即ち垂示に謂ゆる活潑々の漢てなくては句々相ひ投じ機々相應ずることが出來ぬぞと圓悟が言ふて置いた所以である。着語に名實相奪ふ世の諺には名は實の賓といふこともあるが、今仰山が名は何ぞと問ふた一言に自然に其實は何ぞと云ふ意味も含まれてあるから、其名の答へ一つで其實の價值も定まるのである。然し賊を匂ひて家を破る仰山

はとんだ盜賊を引きずり込めて身代限りをしなければ好いがと言ふた果して聖云く慧寂ハイ拙僧の名は慧寂と申します、コレは驚いた慧寂といふは主人たる仰山禪師の名で然るに賓客たる三聖が主人の名を奪ふて、拙僧が慧寂で御座ると言ふ元來天地萬物これは月であるこれは花である、イヤ山である河であると色々の名をつけてあるが、其れは無始劫來月花が自ら月花と名のつたのであらうか、山河が自から山河と稱したのであらうか、其の名ばかりでは無い元來月花は徹底月花で山河はどこまでも山河であらうか、正眼に見來れば了々として一物も無し、何の月花と名け山河と稱するものあらんや、故に般若心經には色即是空と説かれ、祖師は身心脱落と言はれてある、然しそれは理窟である、今や三聖が仰山に汝の名は何と問はれた途端拙僧の名は慧寂と賓主を派絶して、雪月蘆花宇宙一色の風光を咄嗟に現出せしめた働らきは實に古今の奇觀である、着語に舌頭を坐斷す此れには誰でも口は出せまい、其の働きの敏活さは敵の旗を搥き、鼓を奪ふたやうなものぞと、圓悟老人大喝采である、こゝで仰山は之に對して何と出るかと思ふに、さすがは天下の名將である一向平氣で仰山云く、慧寂は是れ我、慧寂か慧寂ならば其れは

れと反對に何も彼も開放して手を推し廣げ、慧寂は是れ我と云へば我名は慧然と帶紐オビといた姿、此の賓主唱酬互ひに相ひ契ふた調子の好き、此れは一轉若爲オノなる宗オノぞ若爲と云ふは如何と同じことであるから、之を俗に言へば其の双收双放の取り組の面白さに思はず知らず聲を放つて、此れはマ一何といふ面白いことであらうぞと言ふたやうなアンバイ、其れを若爲なる宗ぞと言ふたのである。圓悟も其れに大賛成で知んぬ他に、幾人かあらん、此の仰山と三聖との外には恐らく斯のやうな面白い相撲オウムクはあるまいと云ふ、更に、八面玲瓏と喝采した將に謂へり、眞箇、恁麼の事あらんとコレは圓悟が門下及び後來の學人等が此の双收双放の機に取り附て金鎖玄關に滯ふらんことを慫み、ナニ本統に其のやうなことがあるものかと奪ふて見せたものと見える。虎オウに騎るには由來、絶功オトクを要す馬に乗るのでさへも馬術を知らないものは往々蹴落オウされるのであるに、況んや虎に騎らうと云ふには奇絶妙絶の功を積だ者でなくては到底蹴落されるばかりでは無く、一嚙オウに食ひ殺されるは勿論のことである。然るに今この仰山と三聖との問答は、互ひに虎となり騎手となりてヒラリと騎るかと思へば又ヒラリと飛び下りるアンバイ、ほとんど曲馬師が

馬の上で藝をするやうなものであるとの稱讃である。着語に若し、是れ頂門上に眼あり、肘臂下に符あるに、あらずんば争てか、這裡に到るを得ん、言ふに及ばぬこととて斯んな着語は無くも好いと思ふ、且つ語の意味を辨ずるまでも無いが、肘臂下の符と云ふことは前にもあつたと思ふが、コレは支那の道教の人たちが護身符と云ふ守り札を肘オウに懸けて居れば、如何なる惡鬼も惡魔も害を加へることが出来ないこと信じて居る、それが俗間の風習となつて斯のやうな俗諺も出来たものと見える。日本の佛教別して眞言天台や日蓮宗などの或部分に於て、輒もすれば御守りとか御符とか云て人に授けるのは、皆此の支那の道教の風俗が傳染したのである。然るに禪宗や神道までが其眞似をして色々な守札などを出すに至りては、誠に滑稽至極と言はねばならぬ次第である。次に騎ることは、則ち妨げず、只恐らくは備下り得ざらんことをとある。此の着語は肝要のこととて語意は此れも辨ずるまでも無いが、何事も只進むことばかり知て退ぞくことを知らぬやうなことは、決して成就することが出来ぬ。祖師が常に退歩の學を學べと言はれたのも全くコレである。是れ、恁麼の人にあらずんば争てか、恁麼の事を明めん、この着語も言ふにや及ぶ、無くても

好い笑ひ罷て知らず何の處にか去る虎の頭に騎たり下りたりは左もあらばあれ、最後の呵々大笑し去つた其の笑聲を眞實に聞き得て諦當なる者が幾人ある、統大智が笑聲起清風清風絶蹤跡と評してあるが實に其の通りのこととて、圓悟も盡四、百軍州恁麼の人を覓ひるに也、た得難しと言ふた、支那一國を四百州と云ふことは趙宋の時に天下の軍區を四百軍に分けて一軍を一州と定めたのである、言猶ほ耳に在り、仰山の笑ふた聲が今も尚ほ聞えるやうであると言ふ、吾人も皆必らず與かり聞かねばならぬのである、千古萬古清風あり何ぞ唯清風のみならんや、明月も飛花も落葉も笑聲古今に通徹して居るては無いか、然るを何處去など、は何事ぞと咎めたと見え、只應に千古悲風を動すべし、此の一句は古人も色々に見て居られるが、統大智は大笑の落處便ち是れ本分斷腸の悲風であると言ひ、風外老人も亦た仰山の一笑に逢ふては天下人も腹を斷たねばならぬ、雪竇も頗る斷腸じや、汝諸人從劫至劫工夫を下しても此笑は知れまい、其のはずじや、佛祖も窺ふことがならぬと言はれてある、圓悟は如何に、今什麼の處にか在る、其の千古の悲風は現在即今何處に在るか、と雪竇に問ふやうにして門下への注意である、更に咄と蹴は

なしてしまふた大笑にも悲風にも取り着くまいぞとの咄却じや、既に是れ大笑、什麼として却て悲風を動すと一撈して、大地黒漫々、此の黒漫々地に笑ふべきことがあるか、悲むべきことがあるか、到頭蹤跡を泯絶してしまふた、これは圓悟が學人のために慈悲深重なるところぞ。

第六十九則 南泉拜忠國師

垂示無陷啄處。祖師心印狀似鐵牛之機。透荆棘林。衲僧家如紅爐上一點雪。平地上七穿八穴。則且止不落。資緣又作麼生。試舉看。

啗啄なき處といふは宇宙の本體に形象の見るべきものの無い姿を言ふたので、啗も啄も齒を立て、物を噛み砕くことであるが、其れが無いと云ふのであるから、齒の立て處が無いと云ふことと謂ゆる不可思議不可說不可量の姿である、偈又祖師の心印すなはち達磨所傳の心法は狀鐵牛の機に似たり、鐵牛のことは前にもあつ

たが黄河の守護神であると云ふので、すさまじく大きな鐵の牛を作つて大河を跨がせてある、其れは如何なる力を以ても揺り動かすことが出来ないと云ふ譬喩、且つ又己に鐵牛である其れに何の心機もあるべきはずは無い、心機は無いはずであるが河を守る所の神であると云ふ、祖師の心印は如何なる状であるかと云ふに本是れ心印である何の状もあらうはずは無い、何の状も無い其まゝに活潑々地に能く働らくものは祖師の心印である、そこで此の譬喩があるのである、荆棘林を透る、衲僧家荆棘と云ふは都べて往來の妨害になる所の艸木、吾人の一心上に自由自在の働きを妨げる者即ち人我は勿論その上の法我乃至法身二種の病とも云へば金鎖玄關とも云はるゝ、悟りの上の佛見法見其れ等の障害物を悉く透り越してしまふた眞箇の衲僧であつたならば、如何なる時に如何なる事に出あふても、紅爐上一點の雪の如く、赫々と起りさつてる火の上につまみの雪を載せたやうに、あるかと見るまに蹤跡は無い、如何なる心機發動しても發動するまゝに即空即寂、少しも痕跡の留むべきでは無い、然しながら是の如き平地上すなはち灑々落々たる太平無事の境界に於て、七穿八穴と何事にも自由自在に働らくことは、則ち且く止く、資

縁に落ちざる又作麼、生資は連絡の義であるから何事にもせよ色々と複雑した關係のあることを資縁と云ふので、和訓にはマツハルとも讀ませ纏綿と同じやうな意味にも見ることがある、今は即ち都べての言説伎倆を離れて謂ゆる鐵牛の機に似たる心印の状を示すことは何うしたものぞ、試みに擧す看よ。

本則 擧南泉歸宗麻谷同去、禮拜忠國師、至中路、三人同行必有我師

於圓相中坐、一人打鐘地上畫一圓相云、道得即去、無風起浪也、要人知也、歸宗

於圓相中坐、一人打鐘麻谷便作女人拜、一人打鐘泉云、恁麼則不

去也、半路抽身是好、人好、好、歸宗云、是什麼心行、粗得破也、當時好

南泉の普願禪師と歸宗の智常禪師と麻谷の資徹禪師と三人で同く去て、光宅寺の慧忠國師を禮拜せんとす、此中で南泉のことは前に屢々出てあつて、第二十八則にも第四十則にもあつたが別して例の斬猫で名高い人、麻谷のことは第三十一則にあつた只歸宗のことは未だ前に出なかつたかと思ふ、此人は南泉及び麻谷と同じく馬祖道一禪師の法嗣で達磨九世の孫である、廬山の歸宗寺と云ふに住せられたか

ら、歸宗が通稱になつて居る。又忠國師のことは第十八則に委くあつた通りのこと
 で、唐の肅宗皇帝及び代皇帝二代の帝師で、王者の尊敬を受けたことに於ては古今
 無類、強て例を求むれば我が國の夢窓國師のやうな人であつた。そこで當時の衲僧
 だちが皆競ふて國師の門下に集まる勢ひであつたが南泉歸宗麻谷三人のためには
 祖父の南嶽の兄弟であるから、三人は國師の又姪またひに當る緣故もあり、三人打揃ふて
 又叔父またおぢの國師に遭ひに往かうといふのである。コゝに去ると云ふ字を使ふてある
 のが今日通常の漢語では分りにくいのであるが、ヤハリ往くと云ふことと後にも
 此の字が肝要の語になるから贅言ながら申して置く。着語に三人同行すれば必ず
 我師あり、論語の三人行則必有我師をもじつたので、圓悟の下語らしく思はれない
 けれども別に害もなからう、什麼の奇特がある。コレは確かに圓悟らしい、國師に何
 の奇特があつて遙々と何の爲めに禮拜しに往くぞと叱るとは云ふもの也。た端的
 を辨せんことを要す、之を機縁として三人互ひに其の端的を辨驗するも好から
 うぞと云ふ、中路に至りて南泉は地上に一圓相を畫して云く、道ひ得は即ち去らん
 兄弟三人同行ではあるが中にも南泉は兄の資格であるから、途中あるさながらも

油斷なく他の二人を提擲してゆく様子である。遂に途中で南泉が地上に一つの圓
 相すなはち丸い輪の形を畫いて、サ、尊公等二人とも各々自分の見處を言ふて見
 る。其の言ひやうが我が氣に契へば國師の處へ往かうし、若しも二人の見處が詰ら
 ぬとしたら、モ、國師の處へ往くことは止めにしやうと云ふ相談である。一圓相と
 云ふは宇宙萬象の本體圓明寂靜にして都べての形象を絶し而して都への徳用を
 具足せざることなき姿を表示するのである。之に對して何となりとも一言のべて
 見ると云ふのが南泉の發議である。圓悟は風なきに浪を起すと云ふた元來言語道
 斷心行處滅の境たる一圓相に對して、何とか言ふて見るとは餘計なことでは無い
 かと抑へるやうに言ふて益々宗乘の高尙なることを詮表するのである。然しなが
 ら此の一圓相の消息は也。た人の知らんことを要する所ぞと言ふて吾人の參究を
 勧め、又陸沈の船を擲却すと奪ふた船といふものは海の中で沈没したのでも、モ、
 用には立たぬものである。況んや陸上て沈没してしまふた船が何の用に立つぞ、其
 のやうな不用の物を持ち出して何うするつもりかと眞理は到底形容することも
 詮表することも出来るものでは無いにと云ふ意味とは云ふもの、驗過せずんば

争てか端的を辨ぜん裏から云ふたり表から云ふたり百方方便して吾人に宗意を示されるのである。歸宗は圓相中に於て坐す宇宙の全體ごとく歸宗の膝下に歸してしまふ歸宗の外に宇宙なく宇宙の外に歸宗は無い。圓悟は一人鑿を打てば同道まさに和す。南泉が銅鑿を打てば歸宗が歌ふイヤモ一面白いお芝居である。と云ふたアンバイそこへ又一人おどり出したのは麻谷便ち女人拜を作す。アラ有難たや圓相歸宗如來光明遍照十方世界南無南無と合掌恭敬して拜む有様女人拜と云ふは男子の如く五躰投地をするに及はず。只合掌して腰を屈することを云ふので一躰かやうな場合に女人拜をすると云ふことは彼の翻筋斗すなはちトンプボガヘリをすると同じやうなことで眞面目の仕方では無い人を馬鹿にしたやりかたである。然し今の處は實に三人同道唱和の調子少しも隙間はないのである。着語に一人鼓を打てば三箇も也た得たり。これ十方法界を舞臺とした三人兄弟の大演劇が滞りなく演ぜられた。そこで頭取の南泉は恁麼ならば則ち去らじ。貴公等二人が其ういふわけてあるなら、モ一國師の處へ往くことは止めにしやうと云ふ。ハテ、最初に道ひ得は即ち去らんと云ふ約束であつたに歸宗の坐斷と麻谷の女人拜

を見てモ一往かないと云ふからには、此の二人の仕打が氣に入らぬと云ふのかなか、まさか其うてはあるまい。然らば二人ともに能く道ひ得て居るから、モ一國師の處へ參究に往く必要もないと云ふので往くことを止めたのであらうか。人情を以て推量して見れば其れに違ひないやうであるが、此れは結局人情を以て模索し得らるゝことではあるまい。要する所は南泉の活機は去も不去も自由に轉身する所に在るのじや、其れ以上は各自實地の參究に任せるより外は無に着語に半路に身を抽んずる。是れ好人と此れは南泉の轉身自由を稱讚したのである。又好一場の曲調と云ひ更に作家、作家と重々の喝采である。然るに歸宗云く是れ什麼の心行ぞ。言葉の上では南泉が去ると云ふて置きながら更に去らぬと云ふのを答めたのであるが、まさか其のやうな情識の計度では無からう。亦た是れ飯宗一段の轉法輪畢竟如何と參じて見ねばなるまい。着語に頼ひに識破するを得たり。歸宗は南泉の心行を他くまで識破して此の一擲を下したのぞと云ふのである。當時好し一掌を與ふるに其時すかさずビシヤリと南泉を打てやれば好かつたに、然るに歸宗は元來孟八郎の漢であるから斯のやうなことを言ふて人を惑はすのであるぞと、其實は歸宗

に大賛成のことと見える。

頌 由基箭射猿常頭一路誰敢向前 遠樹何太直若不承當爭敢恁麼 東西

千箇與萬箇如麻似粟 是誰曾中的一箇半箇 相呼相喚更沒一箇也用不得

歸去來第一隊弄泥團 曹溪路上休登陟不唯南泉半路抽身

復云。曹溪路坦平爲什麼休登陟不唯南泉半路抽身

由基の箭猿を射る、コレは三人の言語動作個々別々のやうでありながら、結局同道唱和であつて少しも調子の違はぬ所を、由基が猿を射た故事を以て頌せられたのである。由基と云ふは姓名を養叔と曰ひ由基は其字である。或時楚の恭王が獵に出て一疋の白猿を見出して多くの人に射させたけれども、猿が悉く其の箭を捉へて戯れて居るそこで群臣が養由基ならば確かに射當てるであらうと申したので、由基を召して射させた所が、猿が由基の顔を見るやいなや樹に抱きついて悲んだが、由基が遂に箭を放つに及んで、猿は樹をグル／＼と遶つて箭を避けやうとしたけれども、不思議なことには由基が放つた箭が猿と共に樹を遶つて遂に射落したと

云ふ怪談がある今此の三大老の作略も其の妙處に至つて居る有様はほとんど其れと同じ様な調子であると云ふのである。着語に當頭の「一路誰か敢て向前せん天下萬人誰ありてか能く此の箭先に向つて進み得るものがあらうぞ」と、三大老の作略を讚歎する又觸處得妙と云ひ未だ發せざるに先づ中ると云ふ皆重ね／＼の讚歎のみである。第二句に樹を遶ること何ぞ太だ直なる樹を遶ると云ふことは前に言ふた通りのこと、何太直の直の字には古來色々の説がある、直は當なりの訓で只能く當つたと云ふことに見る説もあり又すでに樹を遶るとあるからには箭がグル／＼と迂曲したはけてあるが結局その目的の猿に當つたと云ふ點から見れば、曲り遶つたまゝに即ち眞直であることとなる。今三大老の作略も個々別々のやうでありながら、其の別々のまゝに同一調子であると云ふ姿を頌したのであると云ふのも一説である、いづれにしても意味に格別の差異はない、要は只其の妙處を謠ふたまでのことぞ、着語に若し承當せずんば争てか敢て恁麼ならん三人とも皆能く本分の宗旨に承當してあればこそ斯の如く異曲同工に的中したのであると云ひ、又東西南北一家風、東西南北と別々のやうではあつても元來同一馬祖

門下の兄弟であるから其の家風に異りは無い、已に周遮すること多時、周遮と云ふは遼ることてイヤモ、先刻から一圓相と遼つたり坐圓相と遼つたり女人拜と遼つたり久い間いろく周遮したが其れが皆能く當つたぞと云ふ、千箇と萬箇と是れ誰か會て的に中つ古今東西千箇萬箇の參禪の客は多くあつて斯のやうに能く的中し得たものは誰あらうぞと重々の讃歎じや、着語に麻の如く粟の如しとは千箇萬箇の相錯野狐精、一隊も妄修暗證の徒に多いことを歎き然し其中に南泉を得るを争奈何せん、全たく一人も無いとは言はれまいぞと弄し、更に一箇半箇はあらうぞと云ひ又更に一箇も没し其實は南泉と雖も許されぬ所があると四方八面から評論して吾人參究の資料を與へられた其上に一箇も也た用不得と云て縦ひ一箇の能く的中てた者があつたとしても、其れが何の用に立つぞ喚て如々と做すも早く是れ變了と云ふては無いかと云ふ調子てますく、吾人に本分の草料を給與せられた相呼び相喚て歸去來三人が途中の相談といのふてモ、此處から歸りましやうと云ふことに成つた此の歸去來が肝要ぞ承陽大師は空手にして郷に還つたと言はれた佛法だの祖道だのと云ふ重荷を負ふて歸つたのでは無い何事に

つけても皆此の故郷本家へ歸つてからてなければ本統の仕事は出来ぬ、圓悟は一隊泥團を弄するの漢と三人が去るの去らぬのと言ふて居るのを罵しりつゝ更に往くよりもイツソ歸り去るの好きには如かずと贊し又却つて些子に較れり其れも未だ本分とは言はれぬけれども國師を禮拜するなどと云ふて他國に流浪してあるく他力の念佛行者よりは好からうよと云ふたアンバイ曹溪路上に登陟するとを休む、國師は曹溪六祖の嫡嗣であるから國師の處へ往くのを休めて、故郷へ歸るが好いと云ふのである、要する所は人々各自に自己本分の家郷がある、其れを忘れて輒もすれば他に求めやうとするは、大丈夫たる者の耻づべきとてある、これは何事につけても同じとて回轉の機、尤も肝要なる所以である、着語に太勞生、往きかけて見たり戻つて見たりサテモく御苦勞などぞと冷かし、想ひ料るに是れ曹溪門下の客にあらず、必らず曹溪へ往かねばならない人たちは無いのである、そらナ曹溪のみならず靈山へも兜率へも極樂へも、低々の處は之を平ぐるに餘りあり、高々の處は之を觀るに足らず、コレハ曹溪の路と云ふ路の字に就て雪寶の此の頌が未だ圓成して居ないと云ふとを評したので、俗語に帯に短かし褌に長しと云